

シ、中世殿舎類頗社地不明ナリシヲ、寛文三年大神宮司大中臣精長現今ノ地ニ再興セリ、

○御食神社 度會郡神領社坐町

祭神

水戸御饗都神

殿舎

正殿 神明造板葺南面

玉垣御門 葺頭門

玉垣 板連打

鳥居 造神明

右神宮司廳造替

本社ハ、豊受大神宮ノ攝社ニシテ、等由氣太神宮儀式帳ニ、水戸御食都神社ニ作ル、太神宮本記ニ、從其處○忌棚幸行波有小濱其處爾取鷺老公在支、于時倭比賣命御水飲

壹 壹 壹 壹
基 重 間 宇

止詔天爾老爾何處爾吉水在止問給支、其老以寒御水御饗奉支、于時讚給、水門爾永饗社定賜支トアリテ、倭姬命ノ祝定メラレシ所ナリ、神祇本源ニ、御饗社一名水戸御饗都神速秋津日子神ト見エ、御鎮座本縁ニハ、大御食津臣命中臣祖神坐度相郡トアレドモ、本社ニ祭ル所ハ、取鷺老公ノ靈ヲ、御食都神ト稱ヘタルニテ、天兒屋命四代ノ孫ナル、大御食津臣命トハ異ナリ、中世殿舎類頗社地不明ナリシヲ、寛文三年大神宮司大中臣精長現今ノ地ニ再興セリ、然レモ太神宮本記ニハ、水門ト云ヘバ即チ現今ノ大湊ナルベク、鷺取老公及ビ、清水ノ舊趾志井ト稱シテ、同所ニ存在ス、又本社ハ、神社町大字神社ノ、産土神トシテモ奉祀スルヲ以テ、前記ノ建物ノ外ニ、氏子ノ獻進ニ係ル、御門、御垣、鳥居等アリ、

○小俣神社 度會郡小俣坐村

祭神

宇賀御魂神

殿舎

豊受大神宮攝社

正殿 神南明造板
 玉垣御門 屏猿頭門
 玉垣 板連打子
 鳥居 造神明

壹宇
 壹間
 壹重
 壹基

右神宮司廳造替

本社ハ、豊受大神宮ノ攝社ニシテ、御鎮産本縁ニ宇賀之御魂伊弉諾伊弉尊伊弉神今號小俣トアリ、然ルニ後世所傳ヲ失ヒ、神宮ノ關係モ絶エシニヨリテ、終ニ八王子ト稱シテ、小俣村ノ産土神トナルニ至レリ、寛文三年攝社再興ノ時ニ、大神宮司大中臣精長、其ノ傍ニ別ニ本社ヲ造立セシヨリ、一ハ外宮ノ攝社トナリ、一ハ地方ノ村社トシテ、一社兩殿ノ形トナレリシヲ、明治四十三年十一月、村社ハ遂ニ官舎神社ヘ合祀セリ、

豊受大神宮末社

○伊我利神社 豐受大神宮城內鎮坐

祭神

伊我利比女命

殿舎

正殿 神南明造板
 玉垣御門 屏猿頭門
 玉垣 板連打子
 鳥居 造神明

壹宇
 壹間
 壹重
 壹基

右神宮司廳造替

本社ハ、豊受大神宮末社ニシテ、等由氣太神宮儀式帳、伊我利神社ニ作ル、祭神ノ神系詳ナラズ、中世殿舎頽顛セシヲ、寛文三年大神宮司大中臣精長、現在ノ地ニ再興セリ、皇大神宮建久年中行事二月ニ條ニ、鉾山伊賀利神事ト載セテ、鉾山祭ノ事項ヲ記シ、本社モ亦豊受大神宮御常供田ニ接近シテ、祝祭セルヲ見レバ、伊我利トハ蓋シ、御稻ノ生

豊受大神宮末社

熟ニ最モ、關係ヲ有スル事必セリ、

○縣アガタ神社

祭神
縣神

壹座

本社ハ、豊受大神宮ノ末社ナリ、神名略記鈔ニ、秋毗賣神歟トアレドモ、其ノ神系詳ナラズ、中世殿舎類顛社地不明ナリシヲ、明治三年攝社字須乃野神社ノ域内ニ再興セシモ、神宮改正ノ後、字須乃野神社ニ、御同座ノ事トナレリ、

○井イ中ナカ神社

祭神
井中神

壹座

本社ハ、豊受大神宮ノ末社ナリ、神名略記鈔ニ、水靈神トアレドモ、其ノ神系詳ナラズ、

中世殿舎類顛社地不明ナルヲ以テ再興ニ至ラズ、明治四年神宮改正ノ後、伊我利神社ニ御同坐奉祀セリ、

○打ウチ懸ケ神社

祭神
打懸名神

壹座

殿舎

正殿神明造板

壹字

玉垣御門猿頭門

壹間

玉垣板連打子

壹重

鳥居造神明

壹基

右神宮司廳造替

本社ハ、豊受大神宮ノ末社ニシテ、神祇本源ニ志止見、打懸、大河内社増位事件三箇社爲防川堤守護可被増位階之由、次第上奏之處、被進敷書、○中 敷正五位下打懸名神、今

奉授從四位下、大治三年六月十日トアリ、神名略記同鈔ニ、埴安神ト載セタル、該地ノ名神、即チ宮川堤防守護ノ神ニシテ、社域ノ異動等ハ、志等美神社ノ處ニ詳ニセリ、類聚神祇本源ニ引ケル、外宮御竈木帳ニ、撫懸社ト注セルハ、神宮ノ忌詞ニ、打ヲ奈津ト云ヘルヨリノ稱ナリ、

○赤崎神社 志摩郡、鳥羽町、大字、鳥羽鎮坐

祭神

荒崎姫命

殿舎

正殿

神明造、板葺、南面

玉垣御門

狹頭門、扉付

玉垣

板連打

鳥居

神明造

右神宮司廳造替

壹宇

壹間

壹重

壹基

本社ハ、豐受大神宮ノ末社ナリ、神系ハ、神前神社ノ條ニ云ヘルガ如シ、皇大神宮建久年中行事海神奉ノ條ニ、到著阿原木、神埼、先祭神崎神々、詔刀同刀禰申、其詞云、惡志赤埼加布良古明神、並浦々埼々神達申ト見エ、又九月、十二月同様ナリ、即チ當社ノ御費採取ニ關シ、重キヲ置カル、フ以テ見ルベシ、神名略記ニ赤崎ノ社、今在志摩國答志郡鳥羽藤郷、赤崎大明神ト見エタルハ、即チ現今ノ神社ニシテ、明治二十七年上地官林、壹反九畝七步ヲ復舊シテ、現今ノ體裁トナレリ、然ルニ上古、伊勢志摩ノ國界ハ、鳥羽城地ノ北ナル小流、今相橋ト云フ處是ナリ、故ニ本社ノ鳥羽町ノ南部ナル藤郷ニアルベキ謂ナケレバ、北部ノ産土神ナル賀多神社コソ、本社ナラメトノ一説アリ、

○毛理神社 攝社、河原神社、正殿、御同坐

祭神

木神

壹座

本社ハ、豐受大神宮ノ末社ナリ、神名略記鈔ニ、木神トアレドモ、其ノ神系詳ナラズ、中世殿舎頽頽、社地不明ナリシヲ、明治三年攝社河原神社ノ域内ニ再興セシヲ、神宮改

正ノ後河原神社ニ御同座ノ事トナレリ、

○大津神社 豐受大神宮 城内鎮坐

祭神

葦原神

殿舎

正殿 神明造、板葺、南面

玉垣御門 猿頭門、扉付

玉垣 連打子、板造

鳥居 神明造

右神宮司廳造替

壹座

壹宇

壹間

壹重

壹基

本社ハ、豐受大神宮末社ナリ、阿竹村記ニ、主潮神也謂葦原神名濱邊神亦大津明神トアレドモ、其ノ神系詳ナラズ、中世殿舎頽頽、社地不明ナリシヲ以テ、明治六年ニ舊地ヲ搜索スレドモ、猶ホ明瞭ナラザルニヨリテ、豐受大神宮城内ニ再興ノマヽ、今日ニ

至レリ、

○志寶屋神社 度會郡大湊町、大字

祭神

鹽土老翁

殿舎

正殿 神明造、板葺、南面

玉垣御門 猿頭門、扉付

玉垣 連打子、板造

鳥居 神明造

右神宮司廳造替

壹宇

壹間

壹重

壹基

本社ハ、豐受大神宮ノ末社ニシテ、等由氣太神宮儀式帳土賣屋神社ニ作り、神祇本源ニ、土賣屋社ニ作ル、蓋シ土賣及土賣ハ、土賣ノ誤ナラム、神名略記ニ志寶屋ニ作り、長徳檢録ニ鹽屋社ニ作レリ、然シテ其ノ祭神ハ、古事記ニ、爾鹽椎神云我爲汝命作善議、

即造无間勝間之小船、載其船以教曰、我押流其船者、差暫往將有味御路乃乘其道往者、如魚鱗所造之宮室、其綿津見神之宮也、到其神御門者、傍之井上有湯津香水、故坐其木上、其海神之女見相議者也。日本書紀鹽土トアリテ海路主護ノ神靈ナルニヨリ、當地ハ即チ海濱ニテ水路ノ要津ナルヲ以テ祝祭セルナラン、大湊町太田氏享和四年文書ニ、大湊領元田と申は、昔古より志寶屋社の御敷地にて、御園の内中澤と申所にて、

略○下 明應七年戊午年八月廿五日大地震高浪來り、其上宮川の上山ぬけ、大水一度に押來り、鹽屋村家員百八拾軒余内、御鹽取役人百軒余、何れも補任頂戴の者共に、内宮權禰宜荒木田姓に御座候、一時に大海へ押流され、鹽濱田畑とも、一面の荒野と成し事、哀とも悲ともいふ計りなく候、東の方中澤邊等居住の者、漸く四五人命介り、略又鹽屋社の義は、相介り候四五人の者共申合、小社を建、明神と奉崇有之候處、略○中大猷院様御代、御奉行所石川大隅守様御時、寛永廿一年の頃、兩宮攝社御改有之、外宮攝社に被爲成、志寶屋社と奉稱、略トアル如ク、明應ノ洪水ニ流失シタレドモ、生存者ノ手ニヨリテ再興セラレ、寛永廿一年ニ、外宮末社ナル事ヲ確認セラレ、明治二十五年上地官林、六畝拾歩ヲ復舊シテ、現今ノ體裁ヲナセリ、

所管社

所管社ハ、本宮直轄式外ノ神社ニシテ、皇大神宮ニアリテハ、與玉神、宮比神、屋乃波比伎神、御酒殿神、御稻御倉神、由貴御倉神、四至神、神服織機殿神社、同末社、神麻績機殿神社、同末社、御鹽殿神社、饗土橋姫神社、大山祇神社、子安神社トシ、豐受大神宮ニアリテハ、御酒殿神、四至神、上御井神社、下御井神社トス、蓋シ兩機殿末社ハ、從來兩機殿神社ニ附屬シ、又饗土橋姫神社、大山祇神社、子安神社、上御井神社、下御井神社ハ、明治維新後地方廳ノ所轄トナリシヲ、神宮管轄ニ復シテ、共ニ所管社ニ加列セラル、凡テ所管社ノ建造物ハ、造神宮使廳及ビ神宮司廳ノ造替若シクハ修繕ニ屬シ、又恒例臨時ノ祭祀等ハ、總テ攝末社ニ準シテ、執行セラルルナリ、

皇大神宮所管社

○興玉神皇大神宮 域内鎮坐

祭神

興玉神石疊 四面

壹前

右造神宮使廳修造

斯ノ神ハ本宮板垣内ノ西北隅ニ鎮坐アリテ、往古ヨリ神殿ヲ造立セズ、石疊ヲ構ヘテ祭祀セリ、大治御形記、神名秘書、御鎮座本縁等ニハ、禰神猿田彦神、又ハ其子孫ナル大田命ノ別稱ヲ興玉神ト云ヒテ、五十鈴川上即チ皇大神宮ノ地主神ナリトセリ、神宮元祿勘文ニハ、興玉拜處西面在本宮 西北角無宮猿田彦大神、亦號鹽筒翁命、天鈿女命、伴神自御鎮座以前御座此處トアリテ、猿田彦命鈿女命ノ二神ナルガ如ク見エタレドモ、右ハ興玉宮比二神ノ石疊ハ、同所ナルニヨリテ併記セルモノナレバ、興玉神ハ、猿田彦命ニシテ、宮比神ハ鈿女命ナリト云フ意ナリ、蓋シ興玉神ノ稱號ハ、御鎮座傳記ニ、狹長田之猿田彦大神略○中訓悟白久略○中吾復爲生物略授與壽福之故、名大田神、吾復反魂魄之故、號興玉神、悉皆自然之名也、興玉傳記ニ、美麻津彦尊之御世、同年丙寅九月十七

日亥時、以猿田彦大神、祭高殿之戌亥隅、而號興玉命トアルニ、起因セルモノナルベキモ、此ノ書ハ玉石混同シテ、悉ク信用スベカラズ、然レドモ猿田彦神ヲ興玉神ト稱シテ祭祀セルハ、神宮ノ古傳説ニシテ、建久年中行事記、六月十五日戌尅、興玉神熊並御占神事勤行ノ次第ヲ載セ、九月、同ツ年中三箇度、皇大神宮由貴祭ニ當リテハ、先ヅ斯ノ神ヲ祭り、然後神戶御厨ヨリノ進獻物、及ビ奉仕員ノ御占ヲ執行セリ、今ノ世モ尙ホ之ニ準據セラル、ハ、蓋シ深緑アル事ナラム、然ルヲ大神宮儀式解宮廻條ニ宮廻神百廿四前とあれど、神名知りがたし、中世三節祭十五日興玉祭、十八日宮比矢乃波波木神祭これなり、大宮地靈の祭りにて、最重く深き旨もありといへり、さて延暦の比は、大宮の四方にて祭りつれど、後には約めて巽乾二隅に、拜所をかまへたり、○中その宮邊神を興玉神ともいふ、興は稱美の詞、玉は即ち大宮地靈をいふ、宮地靈をたたへ申すなり、○中一説興玉は、猿田彦神なりといへり、按に此神太古より、宇治里五十鈴川上をうしはき給ひ、宮地の靈ともいふべければ、かゝる傳へあるべしト云ヒ、神宮典略ニ、興は借字なり、於久は大國の約まれる詞なり、○中かくて大國玉とは帳條社に、大土神社、稱國生神兒大國玉命、國津御祖神社、稱國生神兒宇治比賣命とある、此二社を祭るなるべし、此は大宮地の神にまして、帳條社に四方宮地神祭、例に六月神宮

廻神祭百廿四前とある中にむねとくしき神なりと行事記には所社なり延暦の比は祭月十八日別に祭られしを行事記の頃は此二柱をえり出て十五日に祭り又十八日には古儀の如く祭らる、例となり來しならんかく二度祭らる、故は大宮の大祭に仕奉る人の過ち犯しけん罪事の今夜御占にいづべきを畏むのみならず祭使の人々此地主神の知めす地に仕ふれば取わきて此神靈を祭りて平安に祭祀を勤むべきために兼て仕奉るなるべし略○中 中古より神宮には此興玉の解を誤りていへる事多し今こゝに辨へむとす弘安年中參詣記に荒祭宮參時先興玉を拜し奉る天兒屋根命の御父也とあるは神代紀に與台産靈兒中臣連祖天兒屋命とある神の興字によりて興玉を此神といへるなり經雅卿の儀式解に興は美名玉は宮地の靈の意といへるはともひがごとにして信がたしまた興玉は猿田彦といふ説ありて世人あまねく傳へたり此事の始は外宮偽書なる鎮座傳記に略○中 此後には誠にさる事と心得て其偽をさとする人なかりしに近き比經雅卿の儀式解に興玉を猿田彦と云は宇治郷地主と云より附會せしなりト云へりトテ辨ズル所アレドモ宮廻神等ヲ興玉以下三所ニ於テ合祭セシト云フハ事實ニ違フ所アリ加之皇太神宮引付永正七年二月ニ宇治土公氏自往古數百人蒙天恩預五品榮爵勤神事番直致天下御

祈禱者古今通規也略○中 爰檢宇治土公之遠祖者五十鈴河上地主興玉神也猿田彦神是件神無寶殿以賢木爲神殿氏人等玉申此緣也トアルニテ祭神ノ本義ニ至リテハ炳然トシテ爭フベキ餘地ナキヲヤ抑モ猿田彦神ノ神宮ニ關係ノ事歴ハ日本書紀天孫降ニ天神之子則當到筑紫日向高千穗穗觸之峯吾彦神則應到伊勢之狹長田五十鈴川上略○中 其猿田彦神者即到伊勢之狹長田五十鈴川上即天鈿女命隨猿田彦神乞遂以侍送焉ト見エ古語拾遺ニ泊于卷向玉城朝略○中 奉齋天照大神仍隨神教立其祠於伊勢國五十鈴川上略○中 始在天上預結幽契衝神先降深有以矣トアリテ皇大神ノ五十鈴川上ニ御鎮坐アラセラレシハ其ノ幽契遠ク神代ニアリテ猿田彦神豫テ神勅ヲ奉ジテ斯ノ地ニ降り坐シシモノナルヲヤ然レバ元祿勘文ニ自御鎮座以前御座此處トアルモカカル古傳説ノ神宮ニ存セシニ因リテ記セルナラム又太神宮本記歸正抄ニ按ズルニ猿田ノ字ハ成文ノ如クサダト訓ズベシ略○中 伊勢ノ狹長田ハ日本紀ニ天照大神以天狹田長田爲御田又以稻種始殖于天狹田及長田ナドアルニ准ジ此國土ニシテモ皇大神ノ伊須須河上ノ御田ヲ狹田長田ト稱シ約シテハ狹長田トモ云ヒシヲ前ニメグラセテ神世ノ言語ニモ係ケ其狹田ヲ以テ神名ニ負セテ語傳ヘシナリ略○中 然テ此神ハ神代ヨリ宇治郷一郷ノ地主ト爲テココニ住シ數世ヲ經

テ、大田命ニ至レルナリ、大田ト稱スル義ハ、儀式大嘗祭ノ條ニ、次ト定御田一段、田稱大田、稱撰子稻トアル、大田ノ義ニテ稱セシナリ、是亦皇大神ノ神嘗祭ニ、由貴御饌料田ヲ朝家ノ御田ニ、准ジタルナルベシ、略中其子孫宇治土公ヲ姓氏トスルハ、即チ宇治郷ノ地ノ君長ト云フ義ナリ、トアリ、彼是ノ事實ヲ綜合スルニ、猿田彦神ヲ大宮處ノ地主神トシ、興玉神ト稱シテ、神田ニ深キ關係ヲ有セル、由貴大御饌供進ノ大祭ニ方リテ、斯ノ神ノ祭事ヲ執行セラルルハ、最モ適切ナル理由アルニアラズヤ、

○宮比神 皇大神宮 域内鎮坐

祭神

宮比神 石壁 北面

壹前

右造神宮使廳修造

斯ノ神ハ、本宮板垣内西北ノ隅、興玉神ノ後方ニ鎮坐アリテ、古來神殿ヲ造立セズ、石疊ヲ構ヘテ祭祀セリ、皇太神宮建久年中行事記正月十一日ニ、興玉宮岐皇比矢乃波荒日垣内乾角、六月十八宮比矢乃波波木神祭也、内物忌祭、宮比神、外物忌祭、御與玉、後御、乾波

也、垣角先祭宮比、次祭矢乃波波木トアリテ、建久年中既ニ此ノ如クナルバ、其ノ古代ニアルヤ明ナリ、蓋シ神宮元祿勘文ニハ、天鈿女命伴神自御鎮座以前、御座此處トアルニ依レバ、皇大神宮御鎮座ニ先チテ、興玉神ト共ニ大宮地ニ鎮坐セラレシモノナルベシ、然シテ其ノ名義ハ、大神宮儀式解ニ、宮比ハ宮邊なり、毘と邊と音通ヘリ、略中その宮邊神を興玉神ともいふ、興は稱美の詞、玉は即ち大宮地靈をいふ、宮地靈をたゞへ申すなりト云ヒ、神宮典略ニ、宮比矢乃帝の神號は、昔より難義にして、考得たる人なし、略中解の説も信じがたし、上古の宮廻神の中なるは、まゐるけれど、宮比矢乃帝の神は、四至神にまして、波比利久智の神にまさず、又宮比は宮廻の神にして、此一柱のみ異なるは、いかなるを思ふべし、或説に宮比は宮賣にて、比と米と通音なり、されば大宮賣神なるべしト見エ、毎事問ニモ、宮比ハ庭津日神、矢乃帝ハ波比岐神ニテ、共ニ大歳神ノ子ニシテ、此二神ハ大宮地比神ト云テ、神祇官ニモ此ヲ祭ルトアリテ、或ハ單ニ大宮地四至神ト云ヒ、又ハ庭津日神ナリトモ云ヘンド、共ニ失考ナルハ宮廻神ノ祭場ハ、外院ニアリテ、中世迄存、在セシ確乎タル徵據アリ、其ハ本朝世紀仁平三年條日ノニ、伊勢太神宮脱、同言上、去五月十九日巳時、外院御馬屋前所在、奉祭四至神東方槻木枝壹支折落事、兵範記仁安三年、十二月注、皇太神ニ、内外院燒損大小木漆搦本内

四至神奉祭禮靈木肆本トアルニテ仁平仁安ノ頃迄ハ、外院御厩ノ附近ニ宮廻神ノ祭場アリテ、石神ヲ安シ、靈木ヲ標トナシシヲ、其ノ後此ノ祭場ハ荒廢シテ、祭事モ絶エシヨリ、前記ノ如キ説ヲナス者アルニ至レルナリ、宮比ハ或説ノ如ク、大宮賣神ニシテ、斯ノ神ハ、古語拾遺天石屋ニ天手力男神引啓其扉遷坐新殿略○中令大宮賣命侍御前是太玉命久志備所生神如今世内侍トアリ、延喜式祭大殿ノ祝詞ニモ、大宮賣命登御名乎、申事波、皇御孫命乃同殿能裏爾塞坐兵、參入罷出人能選比所知志神等能伊須呂許比阿禮比坐乎、言直志和志坐兵、皇御孫命朝乃御膳夕乃御膳供奉、比禮懸伴緒繼懸伴緒乎、手蹟足蹟不令爲兵、親王諸王諸臣百官人乎、已乖乖不令在、邪意穢心無久宮進米進宮勤爾勤之米答過在乎見直志、開直坐兵平氣安氣久令仕奉坐爾依兵、大宮賣命止、御名乎、稱辭竟奉登久白ト見エタルニテ、斯ノ神ハ、常ニ天皇ノ御殿ノ内ニ鎮坐シテ、君臣ノ間ヲ和シ、鎮メ給ヘル靈德坐セルニ依リテ、神朝廷タル皇大神宮ノ御垣内ニモ祭祀セラルル也、古史成文ニ、大宮能賣命、亦云大宮比賣命、亦名天宇受賣命、亦名宮比神ト記シ、宮比ハ風流嫺雅ノ義ニテ、天宇受賣命ト同神ニ坐ス由、古史徵、古史傳、宮比神御傳記ニ詳ニ見エタリ、日本書紀天孫降ニ其猿田彥神者、即到伊勢之狹長田五十鈴川上、即天鈿女命隨猿田彥神所乞、遂以侍送焉ト見エ、二見浦潮音山大江

寺ノ古勸進帳ニ、天津彦々火瓊々杵尊降臨始與玉神奉隨、天孫天神子者、至筑紫日向國我至伊勢國度會郡五十鈴川上、給天鈿女命、名改猿田姬相共歸ト記シ、神宮元祿勘文興玉拜處ノ註ニモ、猿田彦大神天鈿女命トアルハ、興玉宮比二神ノ石疊ヲ一處ニアゲタルモノナレドモ、二神ヲ同處ニ祭祀セルハ、決シテ其ノ緣由ナキニアラザルナリ、

○屋乃波比伎神 域大神宮

祭神

屋乃波比伎神 石疊南面

右造神宮使廳修造

壹前

斯ノ神ハ、本宮板垣御門外ニ鎮坐アリテ、古來神殿ヲ造立セズ、石疊ヲ搆ヘテ祭祀スル事興玉宮比神等ノ如シ、建久年中行事記正月十一日ニ興玉宮神宮比矢乃波波岐皇由貴祭ノ條ニ、同朝内外物忌父等衣冠着、同自由貴殿神戶所進、至二口菓子贊請預、宮比矢乃波波木神祭也、内物忌父等宮比神祭、外物忌父等矢乃波波木神祭、御在所御前、巽方荒垣

也、先祭宮比、次祭矢乃波々木、御巫内人着衣冠、相副事由申トアリテ、建久時代祭祀ノ
 狀況、既ニ此ノ如クナレバ、宮比神等ト同ジク、古來大宮ノ所管ニ屬シテ、本宮ノ職掌
 人等、祭儀ヲ掌リシモノト見エタリ、蓋シ斯ノ神系ハ、古事記ニ、速須佐之男命略、又
 娶大山津見神之女名神大市比賣、生子大年神略、故其大年神略、又娶天知迦流美
 豆比賣、生子略、中、次庭津日神、次阿須波神、次波比岐神トアリテ、大年神ノ御子ニシテ、
 速須佐之男命ノ御孫ナリ、然シテ其ノ名義ハ、古事記傳ニ、波比入君の意カ、伊は比の
 韻にある故に本より省き、又理と美とを省けるなり略、中、後撰集春上に、通住侍ける
 人家の前なる柳を思ひやりて、躬恒、妹が家の波比入に植る青柳に今や啼らむ爲の
 聲、堀川百首にも、柴の屋乃波比理の庭におくか火乃煙うるさき夏の夕暮、是らを思
 ふに門より舍屋内に入までの間乃庭を、波比入と云しなり、古言なるべし略、中、此神
 は、其波比入の庭を、守坐神にやあらむ、故家毎に祭りしなるべし、此波比入は古然る
 べき家にては大庭と云、今世には玄關前、白洲など云なる處なれば、家庭の中に就て
 もむねとする處なる故に、殊に其神坐なるべしトアルガ如シ、カクテ古史傳ニ、抑こ
 の二柱神波比岐神、阿須波神、をかく御井神と一ツ處に祭給へるは、師説の如く、共に人の家
 庭に就る神等なればなり、貞觀儀式、延喜大嘗祭式などを考るに、悠紀主基の兩國各

齋郡に齋院と云を構へて、八神殿を造り、八柱神を祭らる、其中にも此二柱あり、こは
 師説に、此齋院は、御稻拔穂の料なる故に、波比岐神は、其波比入の庭を、守坐し、阿須波
 神は、拔穂を、京に運送るまでの種種の事を行ふ、足場を、守坐すが爲に、祭らるるなる
 べしト云ヒ、又延喜式祭月次ノ祝詞ニ、座摩乃御巫乃稱辭、皇神等乃前、白々、生井
 榮井津長井阿須波婆比支、登御名者白氏、辭竟奉者皇神、能敷坐下都磐根、爾宮柱太知
 立、高天原爾千木高知氏、皇御孫命瑞乃御舍仕奉氏、天御蔭日御蔭、登隱坐氏、四方國平
 安國、登平久知食須、故皇御孫命乃宇豆乃幣帛、平稱辭、竟奉登久宣ト見エ、古語拾遺ニ、坐
 摩是大宮地之靈、今坐摩巫所奉齋也トアリテ、朝廷ニテ祭祀セラルル如ク、神廷ニテ
 モ鎮祭セラル、ナリ、然ルヲ神宮典略ニ、一説ヲ掲ゲテ、宮比矢乃箭の名は、宮宮の義
 ならん美と備は通音にて、神奈備とも、掃を箭とかくは略字なるべし、略註此掃を
 波波木と行事記に記したるは、箭は波波木と常によめる故ならん此祭本は、延暦延
 えざれば、此後にかく唱へ祭り始し、されば、宮宮を知食神を、すべて祭るよしなり、宮
 宮を知食事を、波木といふは、神代紀に、所帶十握劍所持劍、皇極紀に、持劍などある、所
 帶所持持をハケルと訓り略註、皆同言と聞えたれば、波久とは、領として身に持て
 る事をいふ、古言なるべしト云ヒ、又頭註、按に波波岐は、波比利にて、四至のはひり口

にますの名なり、古行事記に、四至四十四神と云も同じ、宮地四至の神なるは、至字にて明かなりト云ヒテ、宮處ヲ知食ス神靈ナリトシテ、即チ四至四十四前ノ神靈ナリトセルハ、頗ル事實ニ違フ所アリテ、信從スベカラズ、如何トナレバ、建久年中行事記六月十七ニ、但於東寶殿之前、件赤良曳荷前御調之糸之内、六所別宮並宮比矢乃波々木御料分進之殘奉納也、同十八日 件殿候王前平柱左右赤良荷前御調糸結付也、是宮比矢乃波波木神御料也、内物忌父等並御巫内八御前石壺後、以西爲上列祗候、件上巫内御巫内人乍列座詔刀申、其詞云申今年乃六月乃御祭乃十八日乃今時於以宮比矢乃波々木乃廣前仁恐美恐美申冬國々所々仁依奉禮郡神戶人等常奉留荷前御調糸並由貴御神酒御贊等於横山止置所足天奉狀於平久安久開食天宮中干平仁神藝事於令奉仕給不、福宜神主内外物忌色色職掌供奉人等毛長久久勤令奉仕給止恐美恐美申ト見エ、與玉祭ノ祝詞今世モ尙ホ大差ナキヲ以テ、四至神祭ト異ナル所以ハ明瞭ナラズヤ、殊ニ此ノ神等ニ限リテ、本宮中重ナル齋王候殿ノ平柱ニ、奉獻ノ調糸ヲ結付ケ、御前ニテ祝詞ヲ奏申セシ、宮比屋乃波比伎神ハ、輒チ皇大神宮ノ神廷ニ於テ、直接ノ關係坐セル神等ニテ、宮中四至神トハ、其ノ神德ノ異ナル所アルニ因レルナリ、

○御酒殿神 皇大神宮御酒殿鎮坐御

祭神 御酒殿神

壹座

斯ノ神ハ、本宮外院ナル御酒殿ノ守護神トシテ、奉齋セル神靈ナルヲ以テ、別ニ神殿ヲ構ヘズシテ、御酒殿ニ鎮坐セリ、抑モ本殿ノ創立ハ、皇大神朝御饌夕御饌供奉本記御鎮坐ニ、御酒殿乎造立天處々神戶人夫進以神田稻神酒作天先大神供奉、次倭姫命奉、殘者物部人等給支ト見エ、又延曆儀式帳ニ、御酒殿一院、酒殿一間、長四丈、弘一丈七尺、高八尺、底一丈七ト載セタル、皇大神宮及ビ諸神ニ、供進ノ神酒ヲ醸造スル所ニシテ、即チ御酒殿院ノ主殿ナレバ、神物寶器ノ類ヲモ安置收藏セシ事アリキ、其ハ帥記承曆四年五月ニ、被行軒廊御卜、伊勢太神宮燒亡之次、納酒殿御鞍盤燒失、是不知何用仍可被新造、歟否被ト也、兵範記仁安三年十二月皇太ニ、調御倉壹宇、件御倉所奉安置神宮政印也、而炎上出來之間、於御印者僅所出奉也、抑件御印、元雖奉安置酒殿、去承曆三年外院燒亡之時、於彼殿依燒損被改鑄下之後、所奉安置代々執行禰宜宿館也、又應永十五年內宮頭工

引付ニ酒殿百八拾貫文ト注シ氏經神事記文明十六年二月一日ノ條ニ酒殿依破壞納置神秘御神寶等以次六氏綱神主參外幣殿奉移永正記ニ酒殿者神居異于他也雜人不出入事預出納等之外雜人輒無出入者也トアルニテ知ルベシ然ルニ其ノ後永年ノ間中絶セルヲ慶安年中再興アリテ現形ノ如クナリシニヤ紀事珠ニ酒殿舊ハ御稻御倉ニ並ビテ興玉拜所ノ向ニ在リシ也氏富長官イカナル故ニカ今ノ處ニヒカレ屋長矮ク見分アシクナリシナリトアリテ神宮元祿勘文ニ酒殿南面在由殿西御修覆奉造神酒之殿高一丈六尺二寸長二丈四尺廣一丈二尺板葺同前庇高七尺五寸長二丈四尺廣三尺ト見エタルハ現今ノ形狀ト異ナル所ナシ蓋シ本殿ノ祭神ニ就キテハ大治御形記及ビ倭姬命世記ニ天逆太刀天逆鉞金鈴藏納之神名秘書ニ酒殿神伴神神靈曰天逆太刀逆鉞金鈴坐也此則天照大神御鎮座久代大田命藏納靈物也又御鎮座傳記ニ酒殿神一座神靈器坐ト見エテ寶器ヲ神靈トセリト云フニアリ日本書紀ナル神功皇后ノ御歌及ビ日本紀私記ニ據レバ恐ラクハ少彦名命ヲ祀レルナランカ御鎮座本縁ニハ豐宇氣比賣神神靈器坐トモ注セリ亦其ノ理アルニ似タリ然ルニ神宮典略ニ造酒司式云祭神九座神名式に造酒司所祭神二座酒彌豆男神酒彌豆女神また大邑刀自小邑刀自次邑刀自の三座と云此神ならむ谷川士清説に大邑刀自は大壺を祭れる也といかゞ知がたし

倭姬世記の説は偽也從ふべからずトアレドモ儀式解ニ此殿酒殿には天逆太刀逆鉞を藏といへり略○中此殿を拜事ありこれは古の太刀鉞などを拜むにやト云ヒ神拜次第秘抄酒殿ニ神代傳來之天逆太刀逆鉞藏於此殿殊奉釀神酒於此殿故曰酒殿院也ト云ヒ今尙ホ神體ハ靈器ニ坐セレバ御形記等ノ傳説正シカルベシ故ニ延暦儀式帳正月ニ以朔日禰宜内人物忌等略○中酒殿奉拜神宮雜例集正月元日ニ於酒殿向乾方拜建久年中行事記及ビ元文中行事記正月元日ニ於酒殿前置石在拜先酒殿次氏神向月七日忌火屋殿北經櫻宮拜一殿後經由貴殿酒殿前拜等也同月十一日旬長官傍官風宮高倉殿方拜由貴殿酒殿櫻御前同前也日ノ條今日御巫内人四至神祭先酒殿神祭也宮政所並彼出納等共供奉也ト見エテ古來拜祭ノ儀モ亦鄭重ナルヲ知ルベキナリ

○御稻御倉神皇大神宮御稻御倉鎮坐

祭神

御稻御倉神

壹座

斯ノ神ハ本宮中院ナル御稻御倉ノ守護神トシテ奉齋セル神靈ナルヲ以テ別ニ神殿ヲ構ヘズシテ御倉ノ中ニ鎮坐アリ抑モ本殿ハ延曆儀式帳ニ御倉一院倉四字長一丈八尺、高一丈、一臥堅魚木各四枚トアリテ、即チ御稻御倉、調御倉、鹽御倉、倉ト云フ鋪設御倉ノ其ノ一ナレバ古代ハ内院御垣ノ中ニ四字併立セシモノノ如シ殿舎考證ニハ二玉垣ト三玉垣トノ中ニ北方ヨリ向ヒテ御稻調御鹽鋪設ノ四字、東面ニ立テリト云ヘレド之ヲ古記ニ徵スルニ御稻以下四字ノ御倉ノ位置ハ東西宮地ニテ其ノ方向ヲ異ニシ西ノ宮地ニテハ東ニ向ヒ東ノ宮地ニテハ西ニ向フモノト知ラシタリ安貞二年内宮遷宮記ニ御裝束御辛櫃次第御神寶皆隨召立所奉出也先外幣殿次御稻御倉以下仁讀合之時奉納神財是也トアリテ遷宮ニ方リテハ新調ノ御神寶ヲモ奉納セシ嚴重ノ御倉ナルニ右モ氏經日次記享德二年正月皇太二、依御機殿荒廢奉織御衣事不可叶依御稻御倉荒廢御儀之御稻倉朽損御儀可令闕如鹽御倉者今月七日令顛倒畢如此條々非天下重事乎嚴密被急營作任先例被造此等御倉殿舎等被奉成遷御之條可爲御祈禱之專一者哉トアリテ當時既ニ荒廢ニ屬セシヲ寛正遷宮ニ至リテ改造セラレシニヤ同遷宮記遷宮ニ、正殿東西寶殿瑞籬同御門一鳥居外幣殿荒廢祭宮同御門御垣御倉者被造畢四字御倉者地組地板作進然間少少相殘營

作可相待歟トアリテ其ノ後三字ハ廢絶シ御稻御倉ノミハ中院ニ移リテ形式モ多少ノ變更ヲナセルナリ元來此ノ御倉ハ御常供田ノ稻ヲ收ムル所ニシテ延曆儀式帳二月ニ秋收時爾小内人祝部等平率耳大神乃御田乃稻乎拔穗仁拔耳〇中即臨九月祭日耳酒作物忌父爾令捧耳太神宮乃御倉爾奉上三節祭朝御儀夕御儀供奉ト見ニ御稻奉下ノ事見エタリ兵範記仁安三年十二月皇二、御稻御倉壹宇、件御倉所奉納、每年三度御祭由貴御儀新御料御稻併燒失、建久年中行事記日ノ條十六、出納二人開御稻御倉所納御稻方方奉下、九月十四日、按御常供田參向、御稻穗奉拔、是來十六日御儀料也、〇中御稻者御倉奉納ト見エ、諸節毎ニ御稻奉タルニテ明カナリ、然ルヲ同記十一月條十二、當郷御常供田當年作稻於廳舎懸之之後、御稻御倉奉納例也、而近代外幣殿與御稻御倉於中間懸來也トアルハ、寛正時代ノ加筆ニシテ、當時既ニ、外幣殿及ビ御稻御倉ノ位置モ變更シテ、古代ノ如クナラザリシヲ證スベシ、加以同記九月ノ條ニ、自朝迄十七日夕、於御稻御倉、母良並織女一人所奉織也、於料糸正員禰宜所進也トアリテ、延曆時代ハ禰宜ノ齋館ニテ奉織セルヲ、此ノ頃トナリテハ便宜ノタメ、御稻御倉ニテ御衣ヲ織リテ進獻セシヨリ、一ニ此ノ殿ヲ御機殿トモ稱スル事トナリ、是ヲ以テ神宮元祿勘文ニ、御機殿東面在本宮西、奉織御衣之殿、又當時兼用稻御倉

殿高二丈四尺三寸、長一丈四尺三寸、廣一丈二尺、一萱葺、榑風四枚、鯉木六本トアリテ、御稻御倉以下四宇當時中絶ト注セルハ、全ク本末ヲ顛倒シテ、御稻御倉ヲ一時御機殿ニ充テ奉リシ事ヲ辨ヘザリシナリ、蓋シ此ノ御倉ノ祭神ハ、大治御形記ニ、御倉神專女也、保食神是也、神名秘書ニ、素戔鳴尊子宇賀之御魂神是也、一名專女也、亦號白狐、神拜次第秘抄ニ、宇賀乃御魂神也、中此所謂御倉者御稻倉也、故祭祝宇賀乃御魂神也、中宇賀乃御魂神ハ、日本書紀ニ、伊弉諾尊又飢時生兒號倉稻魂命延喜式祝詞祭ニ、屋船豐宇氣姬命是稻靈也トアル、神靈ニ坐シテ、即チ食ノ元始ノ神ナルヲ、神名秘書ニ、素戔鳴尊ノ御子ノ宇賀之御魂神トセルハ、同名ニ坐スヨリ、誤傳セシモノナルベシ、而シテ拜祭ノ儀ハ、古記ニ所見抄ケレドモ、既ニ大治年中祭神ヲ記セレバ、古來祭祀ノ典アリシ事モ、察知スベキナリ、

○由貴御倉神皇大神宮由貴御倉鎮坐

祭神

由貴御倉神

壹座

斯ノ神ハ、本宮外院ナル由貴御倉ノ守護神トシテ、奉齋セル神靈ナルヲ以テ、別ニ神殿ヲ構ヘズシテ、御倉ノ内ニ鎮坐アルベキヲ、永正二年十二月廿四日由貴殿等燒亡ノ事、内宮子良館舊記ニアリテ、其ノ後廢絶セシヲ、寛永六年遷宮ノ時、其ノ一字ヲ再興シテ、神社ノ形式ニ改造セシヨリ、神宮元祿勘文ニ、由貴殿南面在本宮四殿北御修覆殿一丈六寸、長六尺、廣四尺一寸、板葺、榑風四枚、鯉木四本、板垣長廻東西一丈二尺、南北一丈高四尺五寸、同門高六尺八寸、廣四尺六寸ト見エ、今モ此ト異ナル所ナケレバ、全ク倉庫ノ古式ナル、井樓組ノ構造ヲ變シテ、神明造トナシ、御門等ヲ加ヘタル者ノ如シ、抑モ本殿ハ、延曆儀式帳ニ、御酒殿一院中倉二字長各一丈八尺、高一丈一尺、弘ト見エタル、御酒殿院ノ内ナル御倉ニシテ、其ノ性質トシテハ、由貴大御饌ニ供進スベキ、御料ノ御贊時菓等ヲ收ムル所ナレバ、兵範記ニ、由貴御饌調備御倉ト云ヒ、建久年中行事記六月十五日條ニ、禰宜等於字神崎、種種御饌物取、蠣瀬海松等也、中自鹿海船津神主乘馬本宮歸參、於御贊者祝等奉持、由貴殿巽方耳、迄十六日夜奉懸例也、仍造替御遷宮之時、件御倉耳中、彼方一枚切殘也、同月十七日條ニ、曉又可參御饌之由、催正權神主玉串大内人宿館、仍各參候如前夜、物忌父等參酒殿、請取御贊菓子等參也、中抑件御神酒白志、黑志、諸神戶佐之中一口以供進也、但於神戶佐者、納物供進之後進、由貴殿也、謂之伊牟氣佐、但九月

度根倉在一口加供進也ト見ユ元文中行事記ニ記セル所モ異ナラザレバ明治四年神宮改正前迄ハ年中三ケ度由貴祭ニ先チテ御贄ヲ採取シ由貴殿ニ納メシ古儀ノ一斑ヲ存セリ大神宮故事類纂ノ按文ニ由貴殿ハ現今神明造ニテ千木鯉木瑞垣御門等アル事現今丈尺ノ項ノ如シ然ルニ本文ニ異耳ニ御贄ノ裏ヲ掛ケ又耳ハ造替ノ時一枚切殘スト云フハ現今ノ建築方ノ古儀ニ非ザル事明カナリ古儀ノ造リ方ノ蒸籠組ニテアリシ事ハ御倉ノ造リ法トシテ之ヲ認メ得ベシトアルハ當レルナリ寔ニ此ノ御倉ハ神廷ノ歴史アル建造物ナレバ其ノ守護神トシテ御饌津神ヲ祭レルハ神宮元祿勘文由貴殿ニ御膳津姫神ト見ユ神拜次第秘抄ニ由貴殿略中凡於此殿有調備由貴須基御饌之故實仍所祭祝神靈御饌津神也最有秘傳哉トアルニテ炳然ナリ又外宮儀式解ニ御饌都都意ナリ之ノ神等由氣大神略中此神は天下なべての穀物を守給へど御膳持留とは長御膳の遠御膳にかけて申す詞にして此神は天皇の御膳をも守給ふなり天照大御神の御膳神は外宮大神是なりされば御膳津といふ御の語は天皇また天照大御神にむかへて申す尊稱なりけり豊受宇賀能賣保食など申すは其神神の常の御名にして御膳津神と云は皆右の意ある時の御名なり彼氣比大神も天皇に入鹿魚を奉らし御功德によりて御膳津神と御名を申給

ひしなれば是亦天皇にむかへての御名なりトアリテ此ノ大神ヲ皇大神宮ノ由貴殿ニ祭祀セル本義頗ル明瞭ナリ但シ年中拜祭ノ儀ハ御酒殿ト大差ナキヲ以テ是ニ贅セズ

○四ノ至ノ神皇大神宮 域内鎮坐

祭神

四至神石疊 西面

四十四前

斯ノ神ハ大宮ノ廻ニ鎮坐シテ其ノ境界ヲ守リ給ヘル神等ニテ五丈殿ノ東方ニ石疊ヲ拂ヘ石神ヲ安シテ合祭セリ延暦儀式帳二月ニ以十三日太神宮廻神百廿四前祭始同例六月十八日行事以同日辰時神宮廻神祭百廿四前祭料下從外幣帛殿神酒二至神贄二荷右祭御巫内人並物忌父等四人共率班祭同例九月以十八日巳時宮廻神祭酒二至贄二荷ト見ユ建久年中行事記正月十一日ニ天津神國津神方乾八百万神四所四至神北達諸聞食可申伴皇神達皆其坐方向踰踞拜也同五月五日御巫内人四至神祭先酒殿神祭也同日六月十八今朝御巫内人等四至神並天津神國津神八百万神

達祭同ノ十月一日御巫内人四十四所四至八百万皇神祭トアリテ、中古ヨリ宮中ニ四十四所ノ拜所ヲ搆ヘテ、祭祀セシモノナルニヤ、本朝世紀廿七年十月ニ、伊勢太神宮言上、去五月十九日巳時、外院御馬屋前所在奉祭、四至神東方槻木枝壹支折落事、兵範記仁安三年十二月ニ、内外院燒損大小木漆捌本、内四至神奉祭禮靈木肆本トアルニテ、外院ニ祭場ヲトシテ祭祀セシ事著シ、然ルニ後世ニ及ビテハ、四至神ノ本義ヲ誤解シテ、神宮元祿勘文ニ、四至神祭于四十四前未考件諸神、倭姬内親王之祭祀トアリテ、本宮御垣ノ四圍ニ鎮坐ス神ナリト云ヘルヨリ、或ハ宮比神屋乃波比伎神ノ石疊ハ、其ノ遺趾ナリト云フ説モ起リシカバ、近世ハ各所ノ石神廢亡シテ、所在ヲ詳ニセズ、元文中行事記正月元ニ、至四至神之御饌者、御巫内人備進之○中四至皇神○中各向御座方有拜兩端、同ノ條ニ、奉送別宮及四至神山神社等之御饌之次第亦如元日、同ノ條ニ、山宮司參進○中禰宜着一殿○中各起座改席○中宮司者東方西面、禰宜者北方南面○中三色物忌父者一殿之外南方置石之北上、東向北、御巫内人者物忌父之東同北面○中座定之御巫内人先祭、四至神○中各懸葛於冠鳥帽子、于時御巫内人申祝詞、則各以御鉄打地上、次御巫内人進寄祭、四至神之處申祝詞、次各開手兩端トアリテ、五丈殿ノ東方櫻宮拜所附近ナル石疊ニテ祭事ヲ行ヘリ、抑モ四至神

祭祀ノ起原ハ、元祿勘文ニ注セル如ク、本宮御鎮坐ノ時、倭姬命ノ定メ給ヘル所ニシテ、神名秘書ニ四至神四十四前外宮中祭之式也、無寶殿、御鎮座傳記ニ、宮中四至神四十四前中略、石ト見エタレバ、古代ヨリ神殿ヲ造立セズ、石神ヲ安シテ祭祀セシ事、今ノ世ト變ル所ナカリシナリ、

○神服織機殿神社 多氣郡、東黒部村、大字大垣内鎮坐

祭神

神服織機殿鎮守神

貳座

殿舍

- 正殿 神明造、堂葺、金銅金物打立、御階付、南面 壹宇
- 瑞垣御門 扉、頭門、付 壹間
- 瑞垣 板、袖打、棧 壹重
- 鳥居 神明造、明 參基
- 八尋殿 神明造、堂葺、金銅金物打立、御階付、南面 壹宇

玉垣御門

猿頭門、板連打子

壹間

齋館

柿切葺

壹重

○同

末社

社神服織機殿、社城內鎮坐

祭神

神服織機殿鎮守御前神

八座

殿舍

正殿

神明造、板葺、内二字南面、二字東面、三字西面、一字北面

八字

右神宮司廳造替

本社ハ年中兩度神御衣祭ニ皇大神宮及ビ荒祭宮ニ供進スベキ和妙ノ神衣ヲ奉織スル、御機殿八尋殿鎮守ノ神ヲ奉齋セル社ナリ、蓋シ八尋殿ノ創立ハ皇大神飯野高宮ニ御鎮坐ノ當初ニシテ伊勢風土記ニ機殿號八尋殿者倭姬命奉齋太神之日作立也ト見エ延曆十七年三月ニ記シシ機殿儀式帳ニ此機殿昔纏向珠城朝廷倭姬皇女傳奉大神齋奉飯野之高宮于時機殿立長田郷略中于後機殿遷於岸村略中難波長柄

豐前朝廷有格以留止大神御衣然後飛鳥淨御原朝廷大來内親王齋奉大神此時始而立此機殿更發供奉大神御衣トアリテ初メ長田郷ニ建立セシヲ岸村ニ移轉セラレ、孝德天皇ノ御宇ニ神衣ノ奉織ヲ停止セラレテ機殿モ亦廢絶セリ、然ルニ天武天皇ノ御宇ニ流田郷服村ニ兩機殿ヲ再興セラレシヲ天智天皇ノ即位七年八月兩機殿燒亡シ其ノ後神麻績機殿ヲバ現今ノ地ニ移轉セラレシカバ神宮雜例集ニ神服機殿在飯野郡流田郷服村麻績機殿在同郷右兩機殿皇大神宮御鎮坐之當初建立而麻績機殿承曆三年被下宣旨移造之ト記セルナリ、然レモ機殿造立ノ起原ハ遠ク神代ニアリテ、神名秘書ニ收ムル所ノ舊記ニ神衣祭者皇大神宮御座高天原之昔人面等之遠祖天八千千姬殖桑葉於天香山以所蠶之御糸織供進御衣於大神御垂跡之刻彼神達奉戴兩具御機具天降御座之以降人面職掌人等爲其末葉以女子者號織子以男子稱人面職掌不違天宮之例以四九兩月十四日所調進之御衣也又神宮雜例集嘉應二年大神部神服連公道尙少神部神服連ニ於神御衣勤者掛畏天照坐皇大神御坐天原之時以神部等遠祖天公後正ノ解狀御梓命爲司以八千千姬爲織女奉織之間御垂跡之後于今其勤誠以嚴重無雙也又仁治三年皇太神宮假殿遷宮記ノ背書康永二年八月少神部神服連ニ右機殿者皇太神宮御降臨以來國家鎮護之靈神率土撫育之社壇也因茲忝垂仁天皇纏向珠城朝廷倭

姫皇女受高天原之古風任天香山之例可遂行神御衣祭之旨依被定置之云々トアリ
 ナ神服連ハ疊祖以來連綿トシテ神衣奉織ニ供奉セシ事見ツベシ是ヲ以テ其ノ祖
 先ノ祠宇ヲ域内ニ建設シ機殿鎮守神社ト號ケシモノニテ創立ノ年代ハ詳ナラネ
 ドモ仁治三年内宮假殿遷宮記ニ兩機殿事略中修造覆勘之後歲月推移破損傾倚鎮
 守寶殿御器二口紛失公文筆海抄ニ文永六年九月祭主大中臣朝臣某解申請天裁事
 言上太神宮禰宜等注進神服麻績兩機殿神部言上鎮守神殿御裝束御幌並攝社御幌
 紛失弘安二年内宮假殿遷宮記ニ去年元弘安九月六日神麻績鎮守寶殿令顛倒給事
略中同年同月元弘安九月九日神服鎮守寶殿令顛倒給事天晴風靜鎮坐之近邊良久震
 動職掌未拜見之處俄以及重惟嘉元二年内宮假殿遷宮記大宮司清世ノ雜ニ神麻績
 鎮守神殿並屏門同八尋殿爲大風顛倒之間任例急先造假殿九月神御衣祭可被遂式
 日無爲之奉納之由ト見エ且ツ又延喜式伊勢太神宮四月九日服部等造二時神衣機
 殿祭並雜用料絲一百鈞倭文二丈一尺請官庫木綿麻各十三斤四兩二分祭料絹四疋
 四丈二尺綿四屯調布九端一丈商布七十九段鐵六廷砥四顆請官庫油一斗鹽一石稻
 六百五十六束九月祭料麻績等機殿祭並雜用料麻三十貫爲二尺絹四丈倭文三丈木
 綿十三斤四兩二分祭料商布七十九段砥二顆油八升鹽一石稻三百九十七束九月祭料

宮雜例集年中三三月三日神服麻績兩機殿節供事マタ四月一日兩機殿御卜神御衣
 奉織始事マタ八日兩機殿鎮祭事トアリテ此ノ他神服機殿年中行事記等ニ祭祀ノ
 儀ヲ詳記セルニテ鎮守神社創立ノ古代ナルヲ知ルベシ蓋シ御機殿ハ上ニ叙述セ
 ル如ク皇大神宮ニ重大ノ關係アルヲ以テ大少神部等ヲ補任シ神衣奉織及ビ鎮守
 神祭ヲ奉仕セシメ本宮直轄ノ殿舎トシテ公營ナリシニヤ仁治三年内宮假殿遷宮
 記禰宜ノ注兩機殿如延曆儀式帳者限六箇年可修造之由被載之トアリテ但シ六箇
 年ノ誤寫ナル旨兩宮諸殿舎古儀丈
 尺見込帳ノ附箋ニ辨セルガ如シ廿年毎ニ大神宮司修造シ或ハ時宜ニヨリ別功
 ヲ募リテ修繕セシ事モアリキ然ルニ中世神宮御衰微ノ結果寶德年中ヨリ神御衣
 祭中絶シテ修造モ行ハレザリシカバ八尋殿以下漸ク荒廢ニ歸シ就中神麻績機殿
 ハ亡ビテ奉仕ノ神人モ散失セシニヤ神宮元祿九年勘文ニ神服機殿在流田奉織皇
 郷服村
 大神和妙御衣之處略殿略中板葺樽風四枚鯉木六本板垣略中門略中板葺織殿中
 略萱葺樽風四枚鯉木八本神社七宇略中各板葺樽風四枚鯉木四本略中神麻績機殿
當時在小
 社一宇奉織皇大神荒妙御衣之處トアリテ當時神服織機殿ニハ八尋殿鎮守社末
 社七宇モ現存セシカド神麻績機殿ハ殿舎悉ク廢亡シテ只小祠即チ鎮守社ノミ存
 立セリサルヲ同十一年内宮一禰宜荒木田守洪神部右門久富ヲ召シテ機殿ノ現狀

ヲ下問セシニ、今尙ホ神祠アリテ、祭祀ヲ修メ、神麻績機殿ニハ神役人ハナケレドモ、脇田平右衛門久明トテ古家存スレバ、補任セラレ度由ヲモ請ヘリ、則チ神服織機殿ヲ修シ、公裁ヲ經テ、翌十二年四月十四日永年間廢滅セシ神御衣祭ヲ再興シ、大少神部ヲ補任シ、其ノ祭祀ノ用途ヲ定メ、現米三石五斗ノ采地ヲ購ヒテ、二石ハ神服織神部、一石五斗ハ神麻績神部ノ進退トシ、又古代神部等ガ所役トシテ、服織戸麻績戸ノ徵納ヲ以テ、神御衣祭ノ時ニ勤メ來シ、饗膳ハ宮廳ニテ辨ジ、且ツ下行錢等ヲモ下付シテ、二季ノ祭祀ヲ奉仕セシムル事トセリ、是ノ時ニ當リテ安濃津藤堂家ノ臣、朱雀頼母忠國、須知彦之丞正矩、郡縣ヲ巡視シテ斯ノ地ニ來リ、由緒アル機殿ノ衰頹ヲ視テ大ニ慨嘆シ、竊ニ建言スル所アリテ、享保三年五月十三日藤堂家ヨリ、兩機殿ニ各各田三十石ノ修理料ヲ寄セ、專ラ力ヲ盡シシカバ、元祿九年ヨリ僅々四十二年ノ後ナル、元文三年本宮別宮殿舎攝末社神地覺ヲ見ルニ、神服織機殿ニアリテハ、八尋殿鎮守神殿ヲ増大シ、末社壹宇ヲ再興シ、神麻績機殿ニアリテハ、鎮守神殿ヲ増大シ、八尋殿及ビ末社七宇ヲ建立シテ、體面ヲ一新セリ、然ルニ其ノ後修理料ニ不足ヲ生ゼシタメ、文政十年ヨリ機殿以下假建トナリ、天保七年ノ烈風ニ、兩機殿大小屋宇二十四顛倒セシカバ、神部右門脇田左門ノ兩神部ヨリ、宮廳ニ金員借用出願ノ顛末、神宮

編年紀ニ詳記シ、且ツ明治三年内宮禰宜ヨリ、神祇官出張所ニ呈出セシ、兩機殿勘例ニモ、享保三年五月十三日ニ造替ノ御料ヲ充テラレ、毎歲玄米九石六斗ヲ以テ、累年積蓄ヘテ式年ノ造替連綿ス、サレド近頃諸價騰貴ニ依テ、去シ丁卯^{〇慶應三年}秋、鎮守ノ神殿御門御垣ノミヲ造替シテ、八尋殿攝社等ニ及ビ難ケレバ、兩所ノ織殿朽腐シテ、昨秋^{〇明治二年}既ニ顛倒スト載セテ、再ビ衰微ニ至リシカバ、明治四年七月神宮御改正ニテ更ニ設置セラレ、神宮司廳ヨリ翌五年四月七日、皇大神宮神服神麻績機殿並攝社、右去天保中元津縣知事藤堂氏ヨリ、假造替有之候以後、小破之節々修覆ヲ加ヘ來候處、即今大ニ破損候條、至急御造替ニ致度トテ、仕樣見積帳ヲ添ヘテ、教部省ニ具申シ、七月ニ至リテ、營繕之儀ハ大藏省ヨリ、度會縣ヘ相達置候條、同縣ニ打合セ可申事トノ指令ヲ得タリシモ、或ル事情ノ爲ニ、全部新造ニ至ラザリケレバ、再應教部省ニ迫リ、六年六月竟ニ度會縣ニテ造替ヲ遂ゲ、其ノ後各社土木モ地方廳ノ手ヲ離レ、全ク神宮ノ主管ニ歸シタレバ、造替若シクハ修繕ヲ爲シツツ現今ニ及ベルナリ、元來本社ハ、八尋殿ノ附屬社トモ云フベキ、御機殿鎮守神社ニシテ、其ノ祭神ニ就キテハ、傳記區々ナレドモ、要スルニ神服等ノ遠祖ヲ本殿ニ祭祀シ、昭穆ノ次第ニ依リテ、順次ニ末社ヲ増立セシニ過ギズ、伊勢御機殿略起ニ、服太神宮正殿二座、八千千姬命、

天御梓命トアリ、又神宮編年記弘化四年十二月、山田奉行所ニ、神服機殿鎮守服大神、又八千千姫命ト注シ、兩所機殿勸例ノ頭書ニ、鎮守神殿ハ、康永元年八月少神部神服連公景氏言上文ニ載セタル、天御梓神原書ニ天鏡神尊トアリ、ヲ祭祀セシ神社ニテ、延喜神名帳ナル官社ノ外ニシテ、皇大神宮機殿ノ鎮守社ナルベシト云ヘリ、然ルニ度會縣宮社檢査録ニハ、祭神二座神名各不詳トアルハ、當時神服等ガ其ノ祖先ヲ祭レル社ナル事ヲ憚リテ、不詳ニ歸セシメタルモノニテ、現今モ神靈二座ニ坐セレバ、一柱ハ神服ノ祖神、天御梓命ニシテ、一柱ハ人面等ノ祖神、八千千姫命ニ坐ス事論勿カルベシ、末社八字ハ、祭神及ビ創立年代詳ナラネドモ、類聚大補任ニ、文永六年己巳九月、神服機殿鎮守神社御裝束幌紛失、攝社四宮、寅宮、笛宮、幌紛失トアリテ、右ノ三字ハ文永時代既ニ存立スレドモ、其ノ他ハ古記ニ所見ナシ、又鎮守神殿ノ左右ナル、末社二字ハ、機殿事跡雜録ニ、八幡春日トシ、御機殿略起ニハ、東寶殿西寶殿ト記シ、度會縣宮社檢査録ニモ、寶殿二字トアレドモ、其ノ實ハ神服等ガ本宮ニ擬セムトシテ、鎮守ノ左右ニ之ヲ増立シ、東西寶殿ト稱セシモノナルベシ、其ハ御鹽殿神社ト形跡ノ相似タレバナリ、

○神麻績機殿神社 飯南郡機殿村、大字井口中鎮坐

祭神

神麻績機殿鎮守神

殿舍

正殿 物神立、造萱葺、金銅面

瑞垣御門 扉猿頭門

瑞垣 板袖打楹

鳥居 造神明

八尋殿 物神立、造萱葺、金銅面

玉垣御門 扉猿頭門

玉垣 板連打子

齋館 柿切葺

右神宮司應造替

壹座

壹宇

壹間

參基

壹宇

壹重

○同末社神麻績機殿神

祭神

神麻績機殿鎮守御前神

八座

殿舍

正殿

神明造、板葺、内二字南面、二字東面、四字西面

八宇

右神宮司廳造替

本社ハ、神御衣祭ニ供進ノ荒妙奉織、御機殿鎮守ノ神ヲ奉齋セル社ニシテ、神服織殿神社ト相對セル事既ニ同神社ノ條ニ記セルガ如シ、抑モ皇大神宮及ビ荒祭宮ニ和妙荒妙供進ノ次第ハ、延喜伊勢太式ニ、四月九日神衣祭、太神宮和妙衣廿四疋略、中醫絲頸玉手玉足玉緒帛襪緒等絲各十六條、縫絲六十四條略、中荒妙衣八十疋、中荒祭宮和妙衣十三疋、醫絲頸玉手玉足玉緒帛襪緒等絲各八條、縫絲四十條略、中右和妙者服部氏荒妙者麻績氏、各自潔齋始、從祭月一日、織造至十四日供祭、其儀太神宮司禰宜内人等、率服織女八人、並著明衣各執玉串、陣列御衣之後、入太神宮司宣祝詞訖、共再拜兩段、短拍手兩段、膝退再拜兩段、短拍手兩段、一拜訖退出、即詣荒祭宮、供御衣如太神宮儀、但再拜兩段、短拍手兩段退出、令集解ニ、孟夏神衣祭、謂伊勢神宮祭也、此神服部等齋

戒潔清以參河赤引神調糸、織作神衣、又麻績連等績麻以織敷和衣、以供神明、故曰神衣、以上釋云、伊勢大神祭也、其國有神服部等、齋戒淨清、以三河赤引神調糸、御衣織作、又麻績連等、麻績而敷和御衣、織奉、臨祭之日、神服部在右、麻績在左也、敷和者、宇都波多也、此常祭也、トアリ、然シテ、倭名鈔ニ、伊勢國多氣郡ノ郷名ニ、麻績美乎字トアルハ、倭姫命世記ニ收ムル所ノ古文諸述抄、歸正抄、風土記、逸文考證等ニ、號麻績郷者、郡北在神地、奉大宮荒妙衣、神麻績氏人等、別居此村、因以爲名ト見エタルガ如ク、荒妙奉織ヨリ起リテ、神麻績連ト姓氏ニ負ヒシ、其ノ氏人ノ居住地ナルヨリ、郷名トナリシナリ、此ノ氏族ノ系統ニ就キテハ、新撰姓氏錄右京別ニ、神麻績連天物知命之後也ト見エ、古語拾遺ニ、長白羽神伊勢國ト注シ、舊事本紀天紀ニ、天乳速日命、廣瀨神麻績連等祖、又天八坂彦命、伊勢神麻績連等祖トアリテ、區々ニ亘レリ、然レド古史成文ニハ、天物知命及ビ天八坂彦命ヲ、長白羽命ノ亦名ナリト爲シ、太神宮本記歸正抄ニハ、舊事紀云、天八坂彦命伊勢神麻績連等祖トアリ、是ゾ正シク伊勢ト云ヒ、神麻績連トアレバ、此人ノ祖神ナルベキ、サレバ此末葉ノ人等、往昔皇大神ニ陪從シテ、長田郷ノ機殿ニシテ、荒妙ノ神衣ヲ織奉リ、其後不絶多氣郡麻績郷ニ住シテ、神麻績殿ニ奉仕セシナリト云ヘリ、麻績家系圖ニ、天八坂彦命ヲ始祖トシテ、傍ニ天八坂彦命ハ、垂仁天皇ノ御弟ト注セバ、日本

書紀崇神天皇ニ次妃尾張大海媛生八坂入彦命ト見エタル、崇神天皇ノ御子ニ附會セ
 ルニテ信據スベカラズ、然レド三代實錄清和天皇紀貞觀五年八月十九日ノ條ニ伊勢國多氣郡百姓外
 少初位下麻績部愚麻呂麻績部廣永等十六人、復本姓中麻績公、愚麻呂等自歎云、豐城
 入彦命之後也ト見エタレバ、崇神天皇ノ皇子ヨリ出デシ、皇別ノ麻績氏モ有アリシ
 ナリケリ、今モ舊ノ麻績郷ナリシ、上御絲村ニ大字中海ノ存セルハ、此ノ中麻績公ノ
 住セシ地ナリ、祝詞講義ニ、神服連神麻績連二氏ノ多種アルハ、朝廷ト神宮トニ分レ
 テ奉仕セシ由ヲ説ケルハ、實ニ然ル事ナリケム、斯クテ又神麻績ノ氏人等ガ、御機殿
 ノ附近ニ鎮守神殿ヲ造立シテ、祖神ヲ祭リシハ、神服織機殿神社ト同一ナレバ、其ノ
 祭神ハ、天八坂彦命ナルベキヲ、伊勢御機殿略起ニ、上御機殿麻績太神宮正殿一座、麻
 績屋姫命トシ、神宮編年記弘化四年十二月山田奉行所ノ尋問ニ、神麻績機殿鎮守麻
 績大神、又麻績屋姫命ナリト云ヘルハ、機殿儀式帳ニ、機殿立長田郷、是處立社號麻績
 社、亦號河崎社、是大神御靈也、稱麻績屋姫命、トアルニ依リシナレドモ、元來此ノ書ハ
 麻績氏ノ注進セルモノニヤ、該機殿ノ起原ノミヲ載セテ、神服織機殿ノ事ニ及バザ
 レバ、恐ラクハ右ノ大神トアルハ、神人等ガ其ノ祖ヲ私ニ稱ヘタルニテ、皇大御神ノ
 御事ニハアラザルベシ、其ハ上ニ掲ゲタル山田奉行所ニ答申書ニモ、麻績大神、又麻績屋姫命、

トアルヲモ一證トスベシ、然レバ麻績屋姫命トハ、天八坂彦命ノ苗裔ニシテ、荒妙奉
 織ニ從事シテ、神麻績氏人ガ、神衣供進ノ基ヲ開キシ、中興ノ祖神ナル事アケシ蓋シ
 神麻績機殿ハ、中世以降殿舎悉ク荒廢ニ歸シ、只鎮守ノ小祠ノミ遺レルヲ、其ノ後八
 尋殿ヲ造立シテ、現今ハ兩機殿一様ノ形式トナレルモノニテ、其ハ神宮編年記元祿十六
 年四月十日ノ條ニ、脇田平右衛門ヨリ、長壹丈五尺ノ御機殿造立ノ料金、借用ヲ本宮ニ請願
 ノ始末アリテ、元祿十二年神御衣祭再興ノ當時ハ、未ダ御機殿ノ設ケナカリシヲ證
 セリ、八尋殿スラスノ如キ状態ナルヲ以テ、末社ノ建設ハ最近ニテ、享保六年ノ著ナ
 ル、兩機殿雜事考證ニ、當時造立ノ神麻績機殿には、末社今は廢絶す、其舊跡石疊六處
 あり、當時此等の間尺も、亦何の比より然る事をしらす、兩機殿の造替の事、中古以來
 神部等の末孫、如此經營して、神靈安座ましますは、實に神の然らしめ玉ふならんト
 アリテ、享保十二年十一月、兩機殿神遷ノ際、神服織機殿ニ擬シテ悉ク造營ヲナシ、遂
 ニ現今ノ體裁ヲナセリ、但シ維新前ハ津藩ヨリ修造セシガ、神宮改正ノ後ハ、神宮司
 廳ニテ造替ヲ執行シ、明治三十七年一月、接續民有地壹反五畝拾八步ヲ購入シテ、城
 内ヲ擴張セリ、

○御鹽殿神社 度會郡二見町大字莊村鎮坐

祭神

御鹽殿鎮守神

參座

殿舍

鳥居	御鹽燒所	鳥居	瑞垣	瑞垣御門	鳥居	瑞垣	正殿
造神	登切	造神	板袖	扉頭	造神	板袖	打立
明	葺妻	明	打繰	付頭	明	打繰	高蓋
				門			御葺
							階付
							南面
							金物

壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹	壹
基	宇	基	重	間	宇	基	重

御鹽汲入所

登切葺妻 右神宮司應造替

壹宇

本社ハ、兩宮御料ノ御鹽殿鎮守ノ神ヲ奉齋セル所ニシテ、古代ハ御酒殿由貴殿等ノ如クナリシヲ、後ニ神殿ヲ造立シテ現今ノ如クナレリ、元來御鹽殿トハ、御鹽燒物忌日別朝夕大御饌御料ノ御鹽ヲ濱ノ御鹽燒殿ニテ燒キ、其ノ荒鹽ヲ御鹽殿ニ運ビテ堅鹽ニ製シ、毎月三箇度、神宮ニ調進ノ例ナレバ、右ノ二字ヲ惣稱セル名ナリ、蓋シ本殿ハ、太神宮本記皇大神二見ニニ、大若子命其處、御鹽濱並御鹽山定奉支トアルニ權輿シ、既ニ延曆時代ニハ、等由氣太神宮儀式帳ニ、御鹽燒物忌无位神主乙繼女、右人行事定任日、後家雜罪事祓淨氏、立忌館造即御鹽殿仕奉氏、御鹽燒氏、朝御饌夕御饌爾、日每供奉、又三節祭時、湯貴乃御鹽爾、燒儲備供事略、父無位神主虫麻呂、右人行事與物忌共副仕奉、又御鹽山木平、御鹽殿爾、切運氏、荒鹽爾、燒儲氏、御鹽塙作儲氏、物忌爾、令燒且、朝御饌夕御饌爾、日別奉進、又濱御鹽燒殿、並廻垣修理掃淨仕奉ト見エ、皇太神宮儀式帳ニモ、御鹽燒物忌無位神主稻刀自女、父從八位上神主牛養、右二人ト食定補任之日、後家雜罪事祓淨供奉職掌、朝夕御饌並處々神宮御饌鹽燒物忌敬供奉トアリテ、御鹽燒物忌等供奉ノ狀況明カナリ、大神宮儀式解ニ、今も二見の御鹽殿まで御鹽燒

て、三節祭に本宮に持参る、外宮へは朝夕の御饌料を上るに、月々に供進ス、これ古の御鹽燒物忌同父の奉りしなり、今の世物忌父子は絶たれど、○外宮ニハ存在シテラド、彼役人これを供奉なり、かくいちぢるき勤にて、古今違はぬ職掌なるに、いかで他の物忌の如く、申文上り判任符等授る事の絶たるは亂世よりの流例、且は鳥羽城九鬼氏二見郷を奪ひしより事絶たるなりトアルニテ、其ノ沿革ノ一斑ヲ知ルベシ、明治廿二年度兩宮諸殿舎古儀丈尺見込帳ノ附箋ニ、御鹽殿二字廻垣等ハ、物忌同父ノ造立修理スル舊例ナル事著シ、其造替ノ料ハ二見郷ニシテ料田ヲ定置キ、其租米ヲ以テ修造ニ宛タリケム、二見神役人等所藏、建仁元年十一月可解云、太神宮司解申請祭主裁事、請殊任官符公判等旨被裁許、二見御厨惣檢校權禰宜能範訴申、御鹽殿造進料田租米狀云云トアルヲ以テ證スベシ、後世ニ至リテハ、御鹽燒物忌同父ニ任ズルモノ、唯宮中神事ニノミ預リ、御鹽殿ニシテ御鹽儲備ノ事ニ堪ヘズ、是ヲ以テ二見郷住人ニ、御鹽所司職ト號スル任用ヲ始メ、外宮ノ廳宣ヲ下シテ、其勤ヲナサシム、永和二年九月ノ補任神役人中今ニ保存セリ、仍テ御鹽調進ノ料田御鹽殿造營料田等ノ租米ヲ所司等進退シ、物忌同父等ノ職掌ニ代テ奉仕セリ、其趣正和、正平、文中、延文、貞治、文安等ノ古文書ニ見ユ、然ルニ天正慶長頃ハ、鳥羽藩九鬼氏ノ爲ニ、郷内悉ク掠領セ

ラル、依テ彼所司等ノ後孫等百余輩一黨シ、公式ニ愁訴シ、終ニ寛永十年六月、二見郷二千石餘ノ地ヲ、神領ニ還附ノ朱印狀ヲ賜ハル、其時幕府老職ノ執達書ニ、御鹽之宮此度造營有之、以來及破損者、從六ヶ村可修理之ト下知アリテ、コノ舉ニ乗ジテ現今ノ如ク、御鹽殿並神殿東西ノ寶殿垣門鳥居等ヲ、造加シテ建テタルナリ、爾來廿一年毎ニ還附ノ料田租米ヲ以テ、六ヶ村散在ノ御鹽所司職ノ末孫等神役人ト稱シテ、御鹽殿及神殿等ヲ造營シ來ル所ナリ、○中宇治藤波氏御鹽殿ニ關係セシハ、二見郷刀禰職ヲ買得シテ、家職トスレバナリ、宮廳ニ係ル事ニアラヌヲヤト云ヘリ、然レドモ鎮守ノ神殿、即チ現今御鹽殿神社ノ創立ハ、徳川時代ノ新造ト認ムベカラズ、蓋シ寛永ノ當時神殿ノ構造及ビ裝飾ヲ大ニシ、東西寶殿ヲモ加造シテ、神宮改正ノ後ニ專ラ本宮ニ擬シ、二見郷ノ名社タラシメムトスルノ、計畫ニ出デタルハ、事實ニ照シテ明カナレドモ、其ノ時既ニ神社ノ存立セシ事ハ、承應四年四月御鹽殿造替ニ付キ、今一色村三村宗左衛門ノ、神遷ヲ行ハムトセシニヨリテ、内宮八禰宜藤波氏次ト葛藤ヲ生ジ、其ノ後復同宮長官藤波氏富ト同事件ノ争アリテ、氏富ヨリ山田奉行所ニ呈出セシ陳辨書ニ、二見御鹽殿御造替之砌者、從我等家代々神遷執行仕事、古今定例舊記分明御座候、○中建保六年御鹽殿就御造營、我等之先祖荒木田氏良長官、令勤仕神

事候舊記懃御座候。○中 正和年中 仁 我等先祖氏顯御鹽殿令勤仕神事候記文御座候。
 略○中 慶長十五歲長野内藏允殿兩宮御奉行之時節御鹽殿致被損候故御造營被成進
 候其刻茂以右之節目我等親左馬助氏吉仁被仰付日時等茂考神遷執行仕候雖然自
 身者依爲權禰宜同家五禰宜氏昇於以御正體奉戴氏吉神事令執行候其證據共御座
 候。○中 寬永十五歲花房志摩守殿御代御鹽殿就御造替如先規我等三禰宜之時分御
 地曳柱立御上棟萱葺御遷座之日時相考於京都御神寶調萬事神宮秘密之奉仕式正
 之御神遷令執行。○中 十六年 仁 御鹽殿式年之神事如往古再興仕度由諸役人申付神
 慮尤可爲相應與存於神宮長官禰宜中勘記文每年九月廿一日自我等家神事令執行
 候トアルニテ知ルベシ右ハ神宮編年雜事記ニ載セタル公文書ニテ信據スルニ足
 ル資料ナレドモ正和ノ建保六年ヲ去ル一百年ニシテ慶長十五年ノ正和ヲ隔ツル
 事實ニ三百年其ノ奉仕年代ノ隔絶セル點ニ就キテハ聊カ疑團ナキ事能ハズ且ツ
 又鴨長明ノ伊勢記ニ二見の浦に出ゆく道に小松原の中に鳥居あり社は見えぬを
 尋ぬれば名を御鹽殿となん申とアリテ建保六年以前ニハ鎮守神社ハナカリシナ
 リ又金鏤隨筆ニ宇治藤波家ニ御鹽殿ノ古文書アリテ萱ブキ御殿四面玉垣鳥居等
 トアリ此ノ文書ハ貞治承久頃ノ古物ナリトテ古代ヨリ藤波家ハ御鹽殿奉仕ノ關

係連綿トシテ更ニ外宮ニ關係ナシト云ヘルハ妄斷ナル事ニテ信用スルニ足ラザ
 ルハ上ニ記セル古儀丈尺見込帳ノ附箋ニテ明カナリ然シテ本社ノ祭神ハ神宮元
 祿勘文ニ御鹽殿南面在庄村北二見郷中百鹽筒翁命ト見エ又與玉傳記ニ今謂此於
 片田但爲六座之神天照大神孫田彦大神天押即立其所於御鹽殿以末代不改之御鹽命大田命鹽筒翁命倭姫命是六座神也
 然後陸奥國鹽釜明神勸請於此所也故喻片鹽又謂不老鹽又謂化身藥鹽トアリ但シ
 與玉傳記ニハ虛傳混入シテ容易ニ信從スベカラズト雖鹽筒翁ヲ祭神ト云フニ至
 リテハ元祿勘文ト一致シテ動カスベカラズ加以紀事珠ニ載セタル檜垣七禰宜常
 副家ノ神系圖ニ後成恩寺殿首書云鹽土翁同鹽燒始二見御鹽殿神也トアリ後成恩
 寺殿ハ即チ一條兼良公ノ謚號ニシテ公ノ薨去ハ文明十一年四月二日ト尊卑分脈
 ニ見エタルバ當時斯ノ如キ古傳ノ存セルニ依リテ書記セラレシ事ヲ思フベシ又
 三座ノ神靈ヲ鹽筒翁命トノミ稱ヘタルハ斯ノ神ハ伊弉諾尊ノ御子ニシテ日本書
 紀通釋ニ鹽土老翁一書に鹽筒ともあり同じ事なり老翁はただ尊みても云稱なれ
 ども此は實に翁にて在けむと記傳に云れたるが如しさて記傳には鹽土は一柱の
 神名に非ず凡べて物をよく知識る人を云稱なりと云れたれど重胤云此は伊弉諾
 尊檜原御禊の段に生坐る底筒男中筒男表筒男三神を一神としたる御名なり云武郷住

吉神代記云、西國見丘あり、東國見丘あり、皆大神の御本體の假に現人神と現れ玉ふ御
 名を、鹽筒老人と申奉れるなり、ますく、老鹽筒の鹽と云は、潮の事にて、海の底と表
 とを總て云なり、其は其成出し所を海底、又は潮中湖上とあるにて知らる、さて同時
 に成坐る、底津少童命中津少童命表津少童命三神は海神と坐せば、海中の主宰に坐
 す事、海宮遊行章の趣にて明らかなり、然るに海上の事に就ての御事跡の多く、此神
 に係れるは如何と云に、少童命と此神等とは、體と用との差別に異ならず、君臣の義
 には非れども、少童命は皇孫尊の如く、此神等は御前の事執持て、政ごつ人の如し、ト
 見エタルガ如クナルベシ、

○饗土橋姫神社 宇治山田市、大字
今在家町鎮坐

祭神

宇治橋鎮守神

殿舎

正殿

瑞垣御門

神明造、板葺、東面、板葺、頭門

壹座

壹宇

壹間

瑞垣

板葺、打敷、造神、明

壹基

右造神宮使應當度限造替明治四十二年

本社ハ、宇治橋ノ西方ナル攝社大水神社ノ附近ニ在リテ、大橋鎮守神ヲ奉齋セリ、慶
 光院舊記、御裳濯川橋起原ニ、垂仁天皇廿六年、天照皇大神、內宮五十鈴川上ニ御鎮座
 之時、宇治大橋御造立、則名天浮橋ト古老云、此橋者大和姫命奉救造立、橋本造社、名曰
 橋明神、自爾以來、至人皇廿六代武烈帝、十三度大橋造立有之ト見エ、神樂館古文書ニ
 モ、之ニ類似ノ記事アレ、事實ト齟齬セル事ハ、大神宮故事類纂ノ按文ニ、明記セル
 ガ如シ、神拜次第秘抄ニハ、當橋宇治橋之西在神社、號曰橋姫社、祭祀之神名、悉分明、或謂
 祭倭姫命於此祠、是亦未見記文也、此處元云津長川原而、務皇座八神之祭、奠於此地、具
 載神事記、是因爲祭神之地、一旦立社後、號橋姫社、是亦在橋前之社也トアリテ、倭姫
 命、即チ八所皇神ノ祭場ニシテ、八座ノ神ヲ祭レル祠宇ナルヲ、宇治橋ノ關係ヨリ、後
 世ニ橋姫社ト俗稱セシモノナラム歟ト云フニアリ、元來斯ノ地ハ、道饗祭ノ舊趾ニ
 シテ、同年中行事記二月十二日津長ニ、饗土二本櫻下ヲ經テ、津長ニ參ルト載セタル

地ナレバ、其ノ名稱ヲ糞土橋姫神社ト唱ヘシモノナラム、且ツ又地勢ノ變轉セシハ、倭姫命世記鈔ニ、貞享四年ヨリ以往百二三十年前ハ、宇治川ノ流橋姫社ノ後ヨリ、不動堂ノ裏ヲ通り、木下屋ノ邊ヲ流通テ中村ヘ流シカモ、百年餘リ以來河筋今ノ如クニ寄シト宇治衆ノ慥ナル物語ナレバ、往昔ハ今ノ津長社ノ下ニモ、御船泊留侍ラン歟トアルニテ知ルベシ、然シテ本社ノ創立年代ニ就キテハ、中啓間合草ニ、橋姫社慶長九年造立ナリ、秀頼公ヨリ雨森出雲守安輝寺喜兵衛二人奉行ス、當宮ノ制法不按内之故、春日作ナリ今ニ誤リキタル、神宮編年記萬治二年四月六日ノ條ニ、天和四年戊午五十鈴川橋、御裳濯川橋、並鳥井同橋姫社從秀頼公御建立略、中慶長十一年丙午、右之兩橋、並鳥井同橋姫社從秀頼公御建立トアリテ、當時創立ノ如ク傳ヘタレドモ、既ニ氏經神事記文明九年四月廿八日ノ條ニ、大橋之橋姫御前社、奉造替就其爲橋祈禱、十人禰宜中ニ申十萬度之御被勤仕略、中伴御被萬度宮中奉納、九萬度橋姫社ニ、予經奉納ト見エタレバ、慶長ノ新設ト云フベカラズ、然レド文明造立ノ祠宇ノ形式ヲ、元和、慶長年間大橋造替ト共ニ、山城宇治橋姫社ニ倣ヒテ、春日作ニ變更セシヲ、寶永ノ造替ヨリ神明造ニ復シテ、現今ニ及ベリ、蓋シ橋姫ハ、和漢三才圖會山城國ニ、橋姫社、在宇治、川橋本祭神未詳、俗傳曰住吉大明神、夜通于當社、於今不時激浪有驚耳云云ト見エ、且ツ又勢州古今名所

集に、宇治の大橋長さ五拾二間二尺、東西の欄干のぎぼうしから金にて、天明と云銚物師其ぎぼうしの造料を式法有て賜り、板柱は檜木にて大工に定りて、是も造料引付有て、公方より御下行あり、神慮の威光有難き事とぞ、去年戊の年炎上に、此大橋も焼落ければ、先例に任せて、山入御造營の儀式仰出さる、急卒の功をばげますことに成ぬ、時に奉行石川氏隅州其下代大井五兵衛橋造作之事を監す、今の折節天下火災しげく、山山の材木も取用る事、心のままならざるに依て、橋の丈尺少減しても可然かと相計處に、大井氏夢見えて、一小女來て忽ちに、大蛇と化し大さ橋のごとし、夢心おそろしくたましひもきゆる斗也、翌日の夜も亦同し夢を見る、爰に於て大井氏橋を減する事をさし置、いにしへの如く奉行せし也、是橋姫の靈なるべし、と聞人肝をけし了ぬ、此橋より西に橋姫の社は、も焼失せる故に、橋と同しく建らるべきと也、此社も井垣鳥居以下、古法の如く成べし、是又山城の宇治の橋姫と、同神にてや侍らん、又續日本紀に、山城の宇治橋は、道照法師が始てかけけるよし見え侍れば、山城の橋姫、此時よりまつり初て、其後伊勢へ勸請せしか、又勸請せずとも、橋に付ての神靈を、爰にまつらん事さも有なん、いづれも式外の社也トモアリテ、橋姫トハ、橋ノ守護神ヲ祭祀セル女神タル事知ルベシ、然レバ當社モ大橋ニ關聯シテ、永享ノ頃迄ハ

神宮ノ所管ナリシガ、徳川時代トナリテ、祭事ハ神宮ニ、工事ハ宇治年寄會合所ノ掌ル所トナリテ、兩屬ノ姿ナリシヲ、明治五年教部省ノ達ニヨリテ、地方ノ無格社トナリ、二十二年神宮式年造替ニ際シ、神宮ノ所管ニ復シ、造替及ビ修繕ハ、造神宮使廳ノ擔當スル所トナレリ、然ルニ四十年十二月國道路線改修ノタメ、社地其ノ中心ニ當ルヲ以テ、三重縣知事ハ、代地壹百貳拾貳坪八合八勺ヲ供シ、四十二年三月二十日移轉奉遷ヲ行ヘリ、現在地即チ是ナリ、

○大山祇神社 宇治山田市、大字、鎮坐

祭神

大山祇神

殿舎

正殿 神明造、板葺、南面

玉垣御門 板葺、頭門

玉垣 板葺、打子

壹宇

壹間

壹重

鳥居 神明造

貳基

右神宮司廳造替

本社ハ、宇治橋ノ東方ニ在リテ、大山祇神ヲ奉齋シ、一ニ山神社ト稱セリ、神宮元祿勘文ニ、山神社社末、南面、在本宮地内、北御修葺、大山祇神トアリテ、從來式外末社トシテ、本宮ノ管轄ナリシガ、其ノ創立年代ハ詳ナラズ、然レドモ皇太神宮建久年中行事記正月七日、山神祭事、井田村也、今日七日河原神事、以後自酒殿酒一瓶、菓子一籠、贊一喉、小帖紙一帖、被奉彼神其後祭禮也、又三度御祭並六節會之時、同自酒殿度別米二升、請預件社禰宜山守、調備供也、同月十一日、旬次山神、巖社ト見エ、内宮元亨三年遷宮記、範明神主、岩井田ニ、物忌父兼藤神主申云、酉下尅許參山神之處、範明神主同子息出、風爐令歸參之時、令行合之條實正也、又同假字遷宮記ニ、四月十一日、日中よりあめくだる、今日造宮使をまひきのため、に山へ入せ給略、中むまにて、しもたち、ふゆをの神主がたちよりして、山の神のみち、しまみちへかかりて入せ給ト載セ、氏經神事記寛正三年八月ニ、山神御神樂壹貫貳百下行代始例也、副神樂百文臨時トアルニテ、拜祭ノ儀ハ古來連綿トシテ、絶エザル事見ツベシ、内宮子良年中諸格雜事記ニ、大山祇神供進略、中山神館請トアルモ、同神社ノ祝部ナルガ故ニ、供進品ヲ神宮ヨリ請ケテ、神社ニ供奠セシニテ、後

ニハ其ノ俗姓ヲ山神館ト稱スルニ至レルナリ蓋シ神系ハ古事記ニ生山神名大山津見神トアリテ伊弉諾伊弉冉尊ノ御子ニテ古事記傳ニ山津持にて山を持坐神なりと師説なり奥に又種々の山津見あるは分て持神是は凡て持神なる故に大と稱すかト解カレタルガ如ク岩井田村ハ即チ古代神路ノ山口ナレバ神宮御造替ニ當リテ先ツ斯ノ神ヲ祭リテ山口祭ヲ行ハレシヲ中世以降式年造替ノ大典廢絶セシヲ以テ再興ノ後地域ノ變遷ニ伴ヒテ右ノ祭事ヲ巖社ノ附近ニテ行ハルル事トナリシヨリ竟ニ當社トノ關係ヲ絶テリシモノナラン歟外宮別宮土宮ノ附近ナル山口祭場ニモ古來大山祇神社アリテ右ト同一ノ關係明カナリシヲ明治五年教部省ノ達ニヨリテ縣社箕曲中松原神社境内ニ移轉セシヨリ兩宮共ニ御杣山ノ山口ノ神祝祭ノ本義自然不明ニ歸セシハ實ニ遺憾ニ堪ヘザル所ナリ然シテ本社モ外宮ノ大山祇神社ト同時ニ神宮ノ管轄ヲ脱シテ地方廳ニ屬シ宇治館町ノ産土神トナレルヲ氏子等ノ請願ニヨリテ神宮司廳ハ金一千六百圓ヲ下付シ三十二年十二月神宮所轄ニ復セシナリ

○子安神社 宇治山田市大
字館町鎮坐

祭神

木華開耶姬命

殿舎

正殿

神明造、板葺、南面

玉垣御門

板葺、頭門、扉付

玉垣

連子板打

右神宮司廳造替

壹 宇

壹 間

壹 重

本社ハ大山祇神社ノ西方ニ在リテ其ノ御女木華開耶姬命ヲ奉齋セリ神宮元祿勘文ニ子安神社末南面在山神社地内西御修葺トアリテ其ノ實ハ神人ノ私營ナルベケレドモ慶長六年執印一福宜園田守是ノ神拜式ニ山神子易神ト見エテ近世式外末社ノ中ニ入リテ神宮ノ管轄トナレリ神宮典略ニ子安とは俗に産の安を云語なれば後世に山神のちなみをもて此社を設しなるべし今も山守の福宜の造熟按に陰陽家流に鬼子母神を子安神とも云へば此神を俗に祭て神書に附會せたるを後に咲耶姫を實に祭る事となりけんかしたアレドモ斯ノ神ヲ子安神ト稱ヘテ安産

ヲ祈ルモ、敢テ不當ノ義ニハアラス、其ハ古事記ニ、木花之佐久夜毘賣參出白妾妊身、今臨産時是天神之御子、私不可産、故請爾詔、佐久夜毘賣一宿哉、妊是非我子、必國神之子、爾答曰、吾妊之子、若國神之子者、産不幸、若天神之御子者、幸、即作無戸八尋殿、入其殿内、以土塗塞而方産時、以火著其殿而産也、故其火盛燒時、所生子名火照命、次生子名火須勢理命、次生子御名火遠理命、亦名天津日高日子穗穗手見命、○日本書紀ト見エタルニテ明カナリ、斯ノ如ク猛火ノ中ニテ、三柱ノ御子ヲ産ミ給ヒテ、御身ノ恙ナカリシ異靈ヲ仰ギテ、其ノ御靈ヲ子安神トシテ、祭祀セルハ世ニ渺カラヌ例ナリ、蓋シ本社ハ大山祇神社ノ御前社ナルヲ以テ、明治五年大山祇神社ト共ニ、地方廳ノ所轄ニ移リ、三十二年十二月同社ト共ニ、神宮ノ所管ニ復セシナリ、

豐受大神宮所管社

○御酒殿神豐受大神宮 御酒殿鎮坐

祭神

御酒殿神調御倉神一座、御座、御座

參座

斯ノ神ハ、本宮外院ナル御酒殿ノ守護神トシテ奉齋セル事、皇大神宮御酒殿神ト同一ナリ、抑モ本殿ハ延暦儀式帳ニ、御酒殿壹院、御酒殿壹間、長二丈五尺、廣一丈、ト見エテ、兩宮及ビ諸神ニ、供進ノ神酒ヲ釀造スル所ニシテ、御酒殿院ノ主殿ナレバ、其ノ鎮守神ヲ祭祀シ、且ツ神器ノ類ヲモ收藏セリ、本朝世記仁平三年七月ニ、豐受宮同十五日卯時許、外院酒殿、北方所在、槻木一支、無指風、雨難折、懸三間、檜皮葺酒殿上、東方一間、破損事、勘仲記弘安十年正月ニ、嘉應元年八月祭、主親隆朝臣言上云、豐受宮酒殿北方所在、槻木朽損、伐退之間、可有事、恐哉云云、弘安九年參詣記ニ、御殿ノ北ニ大ナル楠木ノ下ニ御坐ス、酒殿ト申ス、檜皮葺ノ御倉ニハ神體御座ス、古老口實傳ニ、一禰宜勤役事、中略、酒殿神幌並調御倉神幌、覆布同記ニ、酒殿者神居殿也、故預出納外雜人、輒無出入者也、又人用雜物等不納、置之祭器置方角在之、貞和御傍記ニ、天平賀外宮八百口、○中酒

殿五口、應永九年及比同十二年外宮頭工等引付ニ、百貫文さかどの、慶長遷宮引留ニ、
 豐受皇太神宮遷宮次第宮數之事、本宮略中酒殿ト見エ、掌祀啓微ニ、此神殿酒ヲ年
 中三度、二月五月九月ノ吉日ニ祭レルナリ、然シテ酒殿ハ、大宮衰廢ノ時ダニ猶ホ亡
 ビズ、假初ナガラ存ゼシカド、何時ヨリカ古跡トハ、二丈許モ東北ニ去テ建テリ、トア
 リ慶安三年ニ、造宮奉行石川大隅守兩宮造營費ノ餘金ヲ以テ、御酒殿以下數宇ヲ改
 造シ、爾後官費ヲ以テ時々造修シテ、明治維新ニ及ベリ、是ヲ以テ二十二年度ヨリ、造
 神宮使廳ニテ之ヲ行ヒ、四十二年造替ノ時、神宮ノ稟請ニヨリテ、舊地ノ傳説アル現
 今ノ地ニ移轉セリ、然シテ本殿ノ祭神ハ、大治御形記ニ、酒殿神一座、形石坐、豐宇賀能
 賣命略中丹波、國竹野、郡奈具、社、爾坐神是也トアリテ、倭姬命世記、御鎮座傳記、神名秘
 書、御鎮座本縁ニモ、同神トセリ、此ハ丹後風土記ニ見エタル、彼ノ天女善爲釀酒、飲一
 盃、吉萬病悉除之トアル、豐受大神ノ御靈ニ坐セル、豐宇賀能賣命ヲ造酒神ト齋祀セ
 ルニテ、内宮御酒殿神モ、御鎮座本縁ニハ、斯ノ神ヲ祭ルト注セリ、故ニ祭儀モ古來鄭
 重ニテ、延曆儀式帳正月朔ニ、禰宜内人物忌等皆悉參集、神宮拜奉略中次御酒殿拜、同
 帳御巫内人ニ、御酒殿始且宮廻神、惣二百余前仕奉三年中ト見エ、古老口實傳日十二月神
 條事ノニ、一禰宜參酒殿祝詞申也ト朱書シ、且ツ又天正ノ檜垣兵庫家神事記日七月ニ、

總御膳參宮如常、酒殿拜所仁立雙フ、又十一日酒殿ヨリ御白殿忌屋殿拜有又十二月
 二條酒殿拜所ヨリ、一禰宜者御倉ヘ御參也略中告刀有酒殿忌屋殿御白殿皆拜有トア
 リ、外宮年中行事今式十二月晦日燈ニ、一禰宜略中到酒殿前不入殿内、載節一重與、神
 殿前、又設餅、入突膝於餅上、而讀祝詞略中神拜各歸齋館、元文四年外宮年中祭祀行事
 大略ニモ、酒殿に參る節、饌供し置き、一禰宜祝詞を宣る、各拜し云云ト見エタルニテ
 知ルベシ、又御同座ノ一柱ハ調御倉神、一柱ハ御竈屋神ニテ、宇賀能美多麻乃神ト、保
 食神ニ坐ス事ハ、大治御形記、神名秘書、御鎮座本縁倭姬命世記、御鎮座傳記ニ明記シ
 テ共ニ、豐受大神ノ御靈ヲ祭レルナリ、其ハ外宮政所年中行事燈油ノ祝詞ニ、豐受乃
 皇大神乃酒殿調御倉御竈屋仁坐須、宇賀乃魂乃神等乃廣前仁恐美、恐毛申略中、天都
 御膳乃黒木、白木、大神酒於長御膳遠御膳與、御神酒造兒、大御氣造兒、豐宇賀能賣命、宇
 賀乃御魂、保食神等ト見エタルニテ、明カナリ、按ズルニ御竈屋トハ、齋館院ノ御饌炊
 殿今忌火ノ如ク聞ユレド、然ルニハアラズ、齋内親王ノ御膳院ナル、御炊殿ヲ謂フニ
 テ、其ハ外宮嘉祿山口祭祀ニ、嘉祿三年亥十月十五日辛酉、外宮山口祭略中、官下祭物並
 友光等奉作祭物、相共令持作所略中、祭物同色節内人等、進向廳館請預、持參齋王御膳
 殿調備祭物供物トアリテ、山口木本二祭ノ供物ヲ、其ノ院ニシテ調備セシモノナレ

バ、諸祭モ亦然シソ有ケメ、神宮雜例集年中行事ニ條ニ端午外宮神事、御巫内人於御竈屋役之、申詔刀在直會前後、打手、同書六月十八、月讀社祭事、御外宮攝社、御巫内人、於、トアリテ、中世迄ハ此ノ殿舎モ存立セシヲ、廢絶ノ後ニ、御酒殿ニ神靈ヲ奉遷セシモノナルベシ、又調御倉ハ、明治五年十一月ニ神宮ヨリ教部省ニ稟申シテ、御器御倉ト同時ニ破却セシカバ、爾後其ノ神靈ヲモ、御酒殿ニテ祭祀スル事トハナレルナリ、

○四至神豐受大神宮

祭神
四至神石壘南面

四十四前

斯ノ神ハ、大宮ノ廻ニ鎮坐シテ、其ノ境界ヲ守リ給ヘル神等ニテ、九丈殿ノ南方ニ石壘ヲ構ヘ、石神ヲ安シテ、合祭セリ、延曆儀式帳二月ニ、月内取吉日、所管諸社十六處、並宮廻神二百餘前、略、中平春年祈祭供祭、又九月内取吉日、所管神社、及宮廻神、略、中祭供奉、禰宜内人等巡勘供奉、但諸社祝告刀中、宮廻神、御田、又御巫内人職、御酒殿始、氏宮廻神總二百餘前祭仕奉、年中、ト見エ弘安九年參詣記、外宮ニ、内外二宮時ニアタリテ

參詣ノ神祇兩機殿式内式外ノ攝社四至ノ御神眷屬ノ神靈總ノ拜侍ルベシ、是口傳故實也、トアルニテ當時各處ニ就キテ、巡拜セシ者ト知ラレタリ、然レモ此ノ時既ニ、宮中ニ四十四前ノ祭場ヲ、設置シテ合祭セシモノニヤ、大治御形記及ビ倭姬命世記ニ、四至神等、二宮同前也ト見エ、内宮ノ條ニ、四十四、御鎮座傳記ニ、崇祭諸神社、四至之神等、皇大神緣也ト見エ、内宮ノ條ニ、宮中、四至、神名秘書ニ、四至神四十四前、略、外社之也トアリ、蓋シ斯ノ神祭祀ノ起原ハ、大宮地ノ四至ヲ定メラレシ時ナルベキハ、神宮元祿勘文、内宮ニ、四至神、略、中件、諸神、倭姬内親王之祭祀、ト注シタルニ準ジテ知ルベシ、然ルニ何時ヨリカ、此ノ祭場ヲ上世ノ末社ノ遺趾ナリ、ト云フ説ノ起リシタメカ、漸次廢亡シテ、維新前ニハ外院ニ十六所ノミ存立シ、職掌人ノ奉仕セシ次第ハ、掌祀啓微ニ詳ナリ、依リテ明治四年神宮改正ノ後ハ、九丈殿ニテ合祭セシガ現今ハ十六所ノ一ナル、廻神ノ石壘ニテ祭祀セリ、

○上御井神社豐受大神宮
祭神

豐受大神宮所管社

上御井鎮守神

壹座

殿舎

覆屋 神明造、井樓、組板、北、面

壹宇

端垣御門 門、柱、頭

壹間

端垣 袖打、板打

壹重

玉垣 板打、連打

壹重

鳥居 造神、明

壹基

右造神宮使廳當度限造替〇明治四十二年度

本社ハ、大神宮ノ御料水守護ノ神靈ナルガ故ニ、別ニ神殿ヲ造ラズシテ、御井ヲ上御井神社、又忍穂井神社ト稱セリ、抑モ本社ノ起原ハ、神宮雜例集及ビ皇字沙汰文ニ收ムル所ノ大同本記ニ、皇大神皇御孫命天降坐時、天牟羅雲命御前立天降仕奉時、皇御孫命、天牟羅雲命乎召詔久、食國乃水波、未熟荒水、在利介故御祖命御許、爾參上、此由申、天來止、詔即天牟羅雲命參上、天御祖御前、爾皇御孫命乃申上給事、乎子細申時、御祖命詔久、雜例奉其牟羅雲命參上天在禮止、水取政遣、天在利介何神加奉下止、其牟羅雲命參上來止、詔即天忍石乃長井乃水乎、取八盛、天誨給久、此水持下、天皇大神乃御饌、爾八盛、又皇御孫

命乃御水仁八盛獻、天遣水波、天忍水止云、天食國乃水乃於、爾灌和、天獻初、又御伴、爾天降奉仕神等八十支、乃諸人、仁斯水乎、令飲詔、天下奉、支、略、〇其後豐受神宮乃坤方、乃岡片岸、爾新堀御井、且天忍井水乎、乎入加、且當朝之水、爾和合、且末之世、乃御膳調備料、爾移置給水也、ト見エタル、神代以來ノ歴史アル、大神宮御饌ノ御料水ニシテ、高千穂宮ヨリ、丹波ニ移シ、竟ニ現今ノ御井ニ移シシ、外宮御鎮坐ニ關聯セル靈水ナリ、其ハ御鎮座本紀ニ、即時日向高千穂宮、乃御井定崇居焉、奉仕矣、自爾以降、但波真名井、乃石井、爾鎮移居、水戸神奉仕、其後從真名井、乃原、遷于止由氣宮、乃御井居止焉、ト見エ、元長神祇百首ノ注ニ、真名井ノ水ハ、自天上降坐ス、始ハ筑紫日向ノ高千穂ノ山ニ居置給フ、其後丹波與佐之宮ニ移シ居置給フ、豐受大神、勢州山田原ニ御遷幸、仍彼水ヲ藤岡山ノ麓ニ居祝奉リ、朝夕ノ大饌料トナストアルニテ、著明シ、故ニ此ノ御井ニ事變アレバ、其ノ旨ヲ上奏シ、勅裁ヲ經テ處理セシメラレシ事例ハ、神宮雜例集中、右記、氏經日次記ニ散見セリ、就中氏經記、長祿三年十一月七日ノ條ニ、外宮忍穂井ノ水干ニヨリテ、兩宮禰宜等ヲシテ、祈謝セシメラレシ詔勅ノ請文ヲ掲ゲタリ、然レバ古來本社ガ如何ニ、朝家ノ尊崇ヲ受ケツツアリシヤヲ想像スルニ足ラム、然ルニ大日本史、神祇ニ、台記ノ別記ニ見エタル、中臣壽詞ヲ正傳トシテ、意本同一事、一主朝家、一主神宮而言之、故所傳不

同也。但天牟羅雲與天忍雲根、名字相類、本記恐誤、ト云ヒテ、神宮所傳ヲ信ゼザリシハ、頗ル速斷ニ失セリト云フベシ、然テ社名ノ舊記ニ見エタルハ、長徳三年田社檢録ニ、上御井社在御井、大治御形記ニ、御井社、神名秘書ニ、御井神社、神宮雜例集ニ、御井社、古老口實傳一冊立勳ニ、廿年一度宮中末社ト記セル中ニ、上御井社ト見エ、貞和御傍記平天賀外宮八ニ、造替六社神、各五口、上下御井、風宮、北御門社、各五口トアリテ、式年神宮造替宮中末社ノ一トシテ、祝部ヲモ定メテ奉仕セシメキ、加以延曆儀式帳二月ニ、月内取吉日所管諸社十六處、並宮廻神二百餘前、御井二所、御田神所々小社八處乎、春年祈祭供奉、又九月十五、大物忌父、御炊物忌父、御巫内人等、御井參向且、祭仕奉、又御巫内人ニ、朝御饌夕御饌爾、仕奉、御井、並高宮御井神祭仕奉、年中ト見エ、外宮年中行事今式及ビ子良館祭奠式等ニモ、近世祭祀ノ狀況ヲ記セリ、サレド本社ト、下御井神社トハ、性質ノ異ナル所アリテ、御井又ハ忍穂井ト唱フル時ハ、天津神水ヲ指シ、御井神社若シクハ御井神ト唱フル時ハ、鎮守神ヲ指セルモノナルヲ、動モスレバ御井神ニ、天津水ト記セルモアリテ、中古ヨリ混同ノ説アレド、二宮諸社名式、神境紀談、伊勢兩神宮末社記、享保十三年書上等ニ、祭神ヲ神產巢日神ノ子孫、天御雲命ノ子ナル、天牟羅雲命亦名天ト注セシハ、當レルニテ、麻奈井神社考ニ、御炊大夫の家來なる、加藤義章は

毎年日向國にまかる故に、高千穂宮の御井はいかにと質問せしに、義章が云、日向國臼杵郡高千穂山の禁に、於志保井と稱せる井あり、其傍に天二上命を祭る、神祠もあり、ト見エタルモ、傍例ナガラ一證ニ供フベキナリ、斯ク來歴ニ富メル神社モ、應仁以來衰頽シ、社殿モ廢滅セントセシヲ、文祿五年之ヲ造替シ、慶安三年造宮奉行石川大隅守ノ、御酒殿ト共ニ公營ト爲シテ、瑞垣ヲモ造設シ、寛文中益々修補ヲ加ヘ、延寶四年上部貞芳、造替ニ盡力セシヨリ、現今ノ形式トナレリ、然ルニ明治五年六月教部省ノ達ニ、度會縣ノ管轄トナリシカバ、忌火屋殿ノ附近ニ、新ニ御井ヲ掘リテ、忍穂井ノ水ヲ移シ、御饌ノ御料ニ供進セシニ、奇異ノ事アリシニヨリ、暫時ニシテ之ヲ廢止シ、翌年四月教部省ニ稟申シテ、神宮所管ニ復シ、二十二年度ヨリ造神宮使廳ニテ、式年毎ニ修造スル事トナレリ、

○シモノ下御井神社 豐受大神宮 城内鎮坐

祭神

シモノ下御井鎮守神

壹座

豐受大神宮所管社

二四五

殿舎

覆屋 切妻板

玉垣 連打板

壹宇

壹重

右神宮司廳修造

本社ハ、神宮御料水ノ守護神ナルガ故ニ、別ニ神殿ヲ造立セズ、下御井神社ト稱シテ、御井ヲ祭祀スル事、上御井神社ト異ナル所ナシ、元來此ノ御井ハ、多賀宮ノ御料水ナルヲ以テ、上御井神社ニ對シテ、下御井神社又ハ少宮トモ稱セリ、長徳年中田社檢録ニ、下御井社在高宮後、古老口實傳一編廿年一度宮中末社ノ中ニ、下御井社ト見エ、貞和御傍記天平賀外宮ニ、造替六社神、各五口、上下御井、風宮、北御門、各五口ト記シ、外宮宮人ノ舊記ニ錄セル、神樂歌多賀宮ノ今様ニ、風少宮ノ流水はしやうが池にぞたへたるト云ヒ、外宮古神拜式ニ、月夜見宮遙拜、次ニ立テ左ヘ回リ、拜山神少宮トアリテ、古來本宮ノ所管社トシテ、廿年毎ニ神宮ニテ造替ノ神社ナリキ、延曆儀式帳二月ニ、月内取吉日所管諸社十六處並宮廻神二百餘前、御井二所、御田神所々小社八處乎、春年祈祭供奉、又九月十五、大物忌父、御炊物忌父、御巫内人等、御井附參向氏、祭仕奉、又御巫内人職朝御饌夕御饌附仕奉、御井並高宮御井祭仕奉、年中トアリテ、祭祀ノ儀

モ上御井神社ニ違フ事ナカリシニ、中世以來御井ニハ參向セズシテ、多賀宮正殿ノ東ニ石壇ヲ構ヘ、御巫内人及ビ同宮物忌等祭典ヲ修行シテ、御井トノ關係ヲ絶チ、寛永十七年西面ナリシヲ東面ニ改メ、又延寶七年別宮物忌ノ訴ニヨリテ、神宮ヨリ覆屋ヲ造リシカド、其ノ後頽廢ニ歸セムトセシヲ、嘉永二年五月御巫内人清直同志ヲ勸誘シテ、雨覆ノ小祠ヲ建テタリ、即チ現今ノ覆ハ、此ノ私營ニ依レル、假作ノ形式ニシテ、古儀ハ上御井神社ノ如クナルベキナリ、太神宮諸雜事記永承五年ニ、伴神事違例條々中、永承二年春比ヨリ、御饌料乃御井水早失已了、仍土宮乃御前乃水汲天御饌ヲ備進也トアリテ、一朝上御井神社ニ事故アレバ、則チ本社ノ水ヲ以テ、御料ニ充テ奉ラシメ給ヒキ、此レニ依リテ按ズレバ、上御井ヨリ天津水ヲ分カチテ、是ニ移サレシモノナルベシ、然ラザレバ皇大神ノ大御饌ニ進ルベクモアラズ、且ツ神名秘書ニ、天忍石長井水是也、在上下二社トアルヲモ思ヒ合スベキナリ、故ニ祭神ヲ二宮諸社名式、神境紀談、伊勢兩神宮末社記、享保十三年書上等ニ悉ク、天牟羅雲命ト注シテ、上御井神社ト同神ナリト云ヘリ、本社モ明治五年六月地方廳ノ管轄トナリシヲ、六年四月教部省ノ伺ヲ經テ、神宮所轄ニ復舊セリ、

別宮所管社

○瀧原宮所管若宮神社 瀧原宮域

祭神

若宮神

壹座

殿舎

正殿

鐵神明造、葺面、金物、葺面

壹宇

瑞垣御門

扉、頭門、付

壹間

瑞垣

板、袖、打、緑

壹重

鳥居

造神明

壹基

右造神宮使廳造替

本社ハ、一ニ天若宮ト稱シ、未官帳式外ノ神社ニシテ、瀧原宮ニ專屬シ、神宮元祿勘文ノ瀧原宮ニ、若宮末社南面在瀧原ト載セタル、同宮ノ所管社ナリ、蓋シ其ノ創立年代ニ就キテハ、之ヲ詳ニスル事能ハザレドモ、安貞二年内宮遷宮記瀧原並宮ニ、廿三日十月二曉遷御行事始、其儀宮司權大司禰宜先於例所之若宮御前參集、皇太神宮建久年中行事

記寛正加筆、六月廿三日ニ、其後神拜先瀧原、次並宮、次河島、次長由氣、次天若宮、其後下向、氏經神事記、永享八年十二月ニ、次三角柏御神酒ニ預後瀧原並宮神拜各在手、次河島長由介、若宮神拜退出ト見エタルヲ以テ、鎌倉時代既ニ存立ノ形跡アリテ、永享寛正年代ニハ、本宮ヨリ參向ノ奉幣使、拜祭ノ事實モ亦明ラカナリ、然レドモ、祭神ノ所傳ニ至リテハ、元祿勘文ニ、祭祝未考トアリテ之ヲ詳ニセズ、野後村古老ノ傳ニ、天水分神ヲ祭ルト云ヘレド、恐ラクハ若宮ノ名稱ヨリ、起レルモノニテ、其ノ然ル所以ハ、古事記ニ、速秋津日子速秋津比賣二神、因河海特別而生神、名沫那藝神、中次天之水分神トアルニヨリテ、中世以來瀧原二宮ヲ、速秋津日子速秋比賣二神ナリトノ附會說ニ伴ヒテ、其ノ御子水分神ナリト傳ヘシナルベシ、瀧原ノ地ニ縁故アル、水分神ヲ、天若宮ト稱シテ、祝祭セリト云フモ、一理ナキニハアラチド、文獻ノ徵スベキモノナケレバ、斷定シ難シ、兩宮諸殿舎古儀丈尺見込帳ノ附箋ニ、若宮社ヲ幕府ヨリ、長由介社ヲ神宮ヨリ造替スルハ、寛文以降ノ流例ナリトアリテ、徳川時世トナリテ、官營ニ加ヘラレシカバ、明治二十二年度神宮式年遷宮ノ際ヨリ、造神宮使廳造替部ニ編入サレタリ、

○瀧原宮所管長由介神社 瀧原宮城

祭神

長由介神

壹座

殿舎

正殿

神明治七年前、板葺、西面、明

壹宇

玉垣御門

板葺、頭門

壹間

玉垣

板葺、打子

壹重

鳥居

造神、明

壹基

右造神宮使廳修繕

本社ノ來歴ハ、若宮神社ト略同一ニシテ、建久年中行事記寛正加筆及ビ氏經神事記ニ見エタルニテ、○若宮神社ノ條參見スベシ寛正時代既ニ、存立ノ神社タル事ヲ知ルベシ、神宮元祿勘文ニ、長由介神社瀧原宮城祭祝未考トアリテ、其ノ祭神ヲ詳ニセザレドモ、長由介川島祭神考ニ、抑も此社古ハ長由介神社とも、川島神社とも稱して、一社兩名なるべし、其の然る所以ハ、天照皇大神瀧原宮に御鎮座の時、御饌津神豐受大神を祝祭

りて、由貴大御饌に供進の、御饌調備の神事を執行はれし、御饌津神の祭壇なり、長由介の長ハ、延喜式祝詞及台記の別記に載せたる中臣壽詞に、長御食能遠御食とありて、長も遠も共に祝言なり、由介ハ由貴と相通じて、齋忌の義なるハ、日本書紀に、齋忌此云、齋既とありて、齋忌み清まはり仕奉る、御饌の名稱なるべし、又川島ハ御前の川中なる島に、石壘を構へて、御饌津神を祭りしより、其の場處に就きて云へる名ときこえたり、皇大神内宮御鎮座の後ハ、御川の中島に、御饌津神の石壘を構へて、由貴大御饌の供御調備の神事を行へり、其の次第ハ皇大神宮延曆儀式帳に詳記し、建久年中行事記及元文中行事にも、載せられたるにて知るべしと有も、延曆時代とは、河流の變遷によりて、中古祭場を中島より、現在地御川北に移されしも、調備の祭儀は今も異なる所なし、彼是を併考るに、長由介神社或ハ登由介神社にはあらざる歟、長を登の假字に用ひし例ハ、長女柏を、登古良米加之波長を、登古之奈倍と訓めり、尙ほ能く考ふべし○本文トアリテ、一説ニ供フベキナリ、又當社造替ノ古儀詳ナラネドモ、寛文以降ハ、神宮ヨリ造替シ、明治七年神殿ヲ西面ニシ、且ツ玉垣御門一間、玉垣一重ヲ増シ、二十二年度ヨリ造神宮使廳修繕部ニ入レリ、

○瀧原宮所管川島神社 社由介神

祭神

川島神

壹座

本社ハ長由介神社ト來歴異ナル所ナケレドモ、寛正以後社殿廢類シテ、其ノ所在地
 ダニ詳ナラネバ、寛文度モ造立セラレズシテ、竟ニ明治維新ニ及ベリ、神宮元祿勘文
 ニ、河島神社末社在瀧原地内、祭祀未考當時中絶ト見エ、明治三年度會縣宮社檢査録ニ末社二字
 在域内原宮瀧若宮神社長由介神社トノミアリテ、川島神社ヲ載セズ、神宮司廳祭典課
 日誌明治七年十月七日ノ條ニ、瀧原宮所攝河島神社、方今社殿無之候へ共、建久年中行事ニ、既ニ
 相見エ候社ニテ、舊地ハ瀧原宮ノ南方ニ、御瀧ト申所ト奉存候、仍同宮域内鎮座長由
 介神社ト御同座ト仕、神饌之儀右長由介神社同前ニ相見込申候トアルニテ、是ノ時
 新ニ長由介神社内ニ、鎮祭セシ事明カナリ、蓋シ社地ニ就キテハ、川島ノ名稱ニ因リ
 テ、種々ノ説モ起リシカド、何レモ精確ナルモノニアラズ、其ハ野後中興來歴覺ニ、河
 島神社御造營中絶ニ而御座候、御屋敷所モ不覺、文化五辰年中川長官從二位經高卿
 仰ニ、はぶが野大瀧御山之東に、古川と云有、此御山川中なれば、河島神社之地可成歟

と、御物語に付、右御山見廻り候得共、神社之跡と見え候所は不相見、一の鳥居より東
 北之方、御山中に木之生ぬ所あり、昔之御宮所に而、白石埋り有之故と申傳も有ト云
 ヒ、大神宮儀式解ニ、河島社はいづこにや定かに知がたし、瀧原宮の宮地、中世の圖を
 見れば、瀧原宮御前の南の邊に、河島社と記せどいかなるにや、瀧原宮御前なる川島
 社といひ來るは、昔かの社の遙拜所をかまへたるが、今はそれを直に川島社とあや
 まるにやト云ヒ、又舊瀧原宮より、西南と覺ゆる方に御瀧あり、予も經參れり、大
 岩五六箇あり、その中東北と覺ゆる方なる大岩の上に、深壹尺許徑貳尺計の凹あり、
 水溜れり大旱すといへども、此水不涸といへり、此瀧川の前に又流ありて、此間島な
 り、されば川島の名もある歟ト見エタリ、右ハ必竟地名ニ拘泥セル考ニテ、祭祀ノ本
 義トハ異ナル所アルニ似タリ、斯ノ如ク從來其ノ社地ダニ判明セザルヲ、神宮典略
 及ビ五鈴遺響ニ、河島社、長由介社、若宮ト擧ゲテ、三社現存ノ如ク記シシハ、杜撰ナリ、
 尙ホ祭神ニ就キテハ、儀式解ニ、いづれの神を祭るにや、已上の三社○若宮、長由介、川島、共に瀧
 原宮に因ある神を祭りしなるべしトアリテ、其ノ所傳詳カナラザルナリ、

○伊雜宮所管佐美長神社 志摩國志摩郡磯部村大字

祭神

神乎多乃御子神

壹座

殿舍

正殿 神明造、板葺、高欄御階付、東面

壹宇

瑞垣御門 板葺、頭門付

壹間

瑞垣 板葺、打緣

壹重

鳥居 神明造

貳基

右造神宮使應造替

○同御前社 佐美長神社、城內鎮坐

祭神

佐美長御前神

四座

殿舍

正殿 神明造、板葺、南面

四字

右造神宮使應修繕

本社ハ一ニ粟島坐神乎多乃御子神社、又ハ大歳社ト稱シテ、古來伊雜宮附屬ノ神社ナルハ、皇太神宮延曆儀式帳六月ノ例廿ニ、佐美長神社一處、御前四社、此三節祭使附充奉、從太神宮司供奉調度七種、但御饌稻、波伊雜宮乃稻廿束下充奉ト見エ、又康永年中伊雜宮遷宮記ニ、佐美長神社祭物行事、御膳稻廿束從伊雜宮下宛行、木綿一斤、天枚釜一口、在一口酒杯四口、窻戶一口、已上物從太神宮充行ト見エタルニテ知ルベシ、然ルニ延喜名神式ニハ、答志郡三座、小二座、粟島坐伊射波神社二座、並同島坐神乎多乃御子神社トアリテ、別社ノ如クナレドモ、是ハ伊雜宮ヲ神名式ニテハ、伊射波神社ト稱セシト、同一ノ事例ニシテ、神宮ニテハ、佐美長神社ト云ヒ、官社トシテハ、神乎多乃御子神社ト稱セシナルベシ、又大歳社、或ハ穗落社ト唱フルハ、倭姬命世記ニ、鳥鳴聲高聞、且晝夜不止、器此異、止宣、豆、大幡主命舍人紀麻良、乎、差使遣令見、彼鳥鳴處、罷行見、波、島國伊雜方上、葦原中在、稻一基、生本、波一基、爾為、且、末、波、千穗茂也、彼稻、乎、白真名鶴、昨、持、且、廻、乍鳴、支、此見顯、其鳥鳴聲、止、支、○中、彼稻生地、乎、千田、止、號、支、○中、彼鶴、真鳥、乎、號、稱、大歳神、同處祝宛奉也、ト見エタル、佐々牟江ノ事蹟ニ依リテ、偽作セル一章ニ基ヅケルニテ、正シキ名ニアラズ、神名帳考證ニ、同島坐神乎多乃御子神社、今云穗落社、在伊雜宮南五町許、乎多落田之略語、大歳神社亦作穗落在伊雜宮之東南、向東、穀靈也、考諸社例、稱

御子者部類神也、穀靈大歲神^略○中倭姬命世記云、出雲神子、出雲建子命、一名伊勢都彥神、一名櫛玉命、其子大歲神トアリテ、乎多ヲ落田ノ略語トナシ、穗落ト同義ナルベシト云ヒテ、伊勢都彥神ノ子、大歲神ヲ祭ル社ナリトノ考ナレド、此モ亦世記偽作ノ事項ヲ根據トシテノ考證ナレバ、信從シ難シ、蓋シ伊雜ノ地ハ、天牟羅雲命ノ後裔、玉柱屋姬命ノ子孫ナル、伊佐波登美神ノ經營ニヨリテ、發達セシ郷土ナルヲ以テ、斯ノ神及ビ子孫ノ靈ヲ、本社及ビ御前社ニ鎮祭セシモノナルベシ、社殿ノ配置上ヨリ研究スレバ、本社ハ東面ニシテ、御前社四宇ハ悉ク其ノ前方ニ南面併立セリ、此レ大祖昭穆ノ次第ニ據リテ、祭祀セルヨリ起レルニアラザル歟、果シテ然ラバ、其實ハ磯部氏人ノ祖先、世々ノ靈祠ニシテ、神名式ニ、神乎多乃御子神社ト云ヘルモ、其ノ祖玉柱屋姬命ヲ、伊射波神社祭神ノ一座トセルヨリ、此ノ社ヲ御子社ト稱セシモノニテ、名實尤モ明ラカナリト云フベシ、然レドモ、大歲ノ社號モ延曆儀式帳ニ、或ハ佐美長又大歲トアリ、大治御形記、神名秘書ニ、大歲神一座靈形石座ト註シ、皇太神宮建久年中行事記^{寛正加筆、六月廿五日伊雜宮祭祀ノ條}ニ、次西方ニ進大歲神^略○中廿六日早旦大歲御前ニ參神拜ト見エ、氏經神事記ニ、寛正七年十月晴八日大歲社造營事、自地下就申、城大夫注進在狀、使鳥居大夫則返事^略○中應仁三年八月雨四日大歲社顛倒、任例可被造進之由、在御返

事、同日七郷村人當年以租米造進仕、此旨可被心得之由也^略○中廿八日大歲社造營在地爲沙汰之由、政所奉書遣、並地下へ爲在地役之間、不可引租米之間、下知同奉書廿七日之日付トアリ、且ツ又磯部世古氏所藏足利時代ノ古文書ニ、大歲社ノ神體ヲ、御前社ニ遷座ノ事見エタルバ、其ノ當時迄ハ、御前社モ現今ノ如キ、小祠ニハアラザリケム、土俗傳フル所ノ一説ニ、當社殿ノ北方ニ、權化ノ谷ト云フアリ、昔シ此ノ谷ニ大歲神、白毛アル靈石ニ化現シ給フニヨリテ、神體トシテ崇祭レリ、伊雜宮御田植ノ古歌ニ、權化谷ノ白毛石、ト云フハ即チ是ナリト云ヘリ、此ハ上ニ引ケル世記ノ次文ニ、其神皇大神之坐、朝熊河後之葦原中石^{詳志}坐トアルヨリ出デタル、俗説ニ過ギザレドモ、カカル事ヨリシテ、忽チ愚俗ノ信向ヲ惹起シ、寛文事件ニ際シ、高宮又ハ猿田彦宮ト妄稱シテ、内宮荒祭宮ニ擬セムトセリ、是ヲ以テ明治四年神宮改正ノ後、斷然大歲社名ヲ廢シテ、佐美長神社ノ舊稱ニ復シ、多年ノ誤解ヲ一掃セシナリ、抑モ當社ハ延曆及ビ延喜時代、既ニ存立ノ堂々タル官社ニシテ、御事歴モ亦上ニ叙述セルガ如クナルニ、地方神人等ガ一時ノ誤解ヨリ、種々ノ傳説ヲ流布シテ、却リテ神德ヲ損ジ、既ニ祭祀ノ本義ヲ失フニ至レルハ、頗ル遺憾ニ堪ヘズ、サレド神宮典略^略ニ、舊より公より造營の例にはあらず、在地の人の私力をもて、沙汰する事なりけん、ざるを寛

文中伊雜宮再興の時より、此社も混ひて公より沙汰せらるる如く成にけん、此社
關御階あるも、村人の私力にて、造替仕へ奉りしま、今は式年に造替ありて、別宮の例
 まに、建られしならんか、委しく伊雜宮條に云へり、
 今は式年に造替ありて、別宮の例
 と違ふ事なしと云へり、如く、寛文以降官營トナリテ、式年遷座アリシカバ、神宮元
 祿勘文ニ、大歲社末社南面、在伊雜ト見エ、明治三年度會縣宮社檢査録ニモ、伊雜宮ノ
 攝社トシテ記載セリ、但シ御前社ハ同勘文ニモ見エズ、宮社檢査録ニモ、内人造替ト
 アレバ、從來神人ノ私營ナルヲ以テ、去シ二十二年度ヨリ、造神宮使廳ニ於テ本社ハ
 造替シ、御前社ハ修繕スル事トナレリ、

諸殿舎

兩宮諸殿舎ハ、太神宮諸難事記ニ、抑朱雀三年以往之例、二所太神宮殿舎御門御垣等、
 彼宮司相待破損之時、奉修補之例也、而依件宣旨、定遷宮年限、又外院殿舎倉四面重々
 御垣等、所被造加也トアリテ、此ノ時ヨリ内院外院ノ殿舎ノ規模ヲ擴張セラレ、又位
 置等モ確定セラレタリ、其ノ殿舎並ニ數量ニ至リテハ、延曆二十三年奏上ノ兩宮儀
 式帳ニ詳ナリ、其ノ後遷宮ノ都度、造替ノ殿宇門垣ニ異動ナカリシ事ハ、兵範記、辨官
 抄等ニ就キテモ見ルニ足レリ、政權武門ニ移リ、兵馬恠惚ノ世トナリシヨリ、神領ハ
 武士ノ押領スル處トナリ、用途漸ク缺乏シ、遷宮ノ大典スラ弛廢スルニ至リ、内宮ハ
 寛正三年ヨリ天正十三年マデ、外宮ハ永享六年ヨリ永祿六年マデ、共ニ百二三十年
 間、造替ヲ行ハレザリシガ故ニ、殿舎ノ廢頽非常ニシテ、正殿スラ朽損ヲ極メ、自餘ノ
 殿舎ハ其ノ位置サヘ失フコトトナリヌ、然ルニ天正遷宮以後、漸次復舊ノ歩ヲ進メ、
 寛文遷宮ニ至リ、祭主ニ景忠宮司ニ精長禰宜ニ氏富、滿彦、山田奉行ニ八木宗直、桑山
 貞政アリ、内外協心シテ、大ニ再興ノ事業ヲ致シ、爾後ノ有司モ力ヲ盡シシカド、猶全
 キヲ得ズ、明治二年ノ遷宮ニ際シ、外玉垣、板垣ヲ再興セラレ、尋ギテ齋王候殿、即チ四
 丈殿ヲ東御敷地ニ再興セラル、此ニ於テ大宮院ノ殿舎ハ、稍延曆ノ舊ニ復ス、其ノ沿

革ハ各殿舎ノ下ニ略述セリ、諸殿舎ノ大半ハ、式年造替ナレドモ、其ノ中修繕ノ分モアリテ、其ノ箇所ニ記セルガ如シ、

皇大神宮殿舎

○正 殿 尺神明造、葺葺、高欄、御階、付金、銅、金物、打立、行、三丈六寸、九寸、妻、一丈八尺、高、二丈、一尺、三寸、七分、南、面 壹 宇
幄 舎 妻切、一丈、板、五尺、行、一丈、八尺、高、一丈、八尺 壹 宇

皇大神宮儀式帳ニ、大宮一院正殿一區トアリ、正殿トハ和名類聚鈔ニ、大極殿正殿、院名也、豐樂殿豐樂院、正殿トアリテ、一院中ノ本殿ヲ云フ、即チ天照坐皇大神ヲ奉齋セル大也、宮ナリ、古代御造替ノ制ハ、明ラカナラザレド、太神宮諸雜事記ニ、白鳳十四年乙酉九月十日、始二所太神宮仁被奉神寶廿一種、亦中外院殿舎四面重々御門、鳥居等、始被作加、官符二所太神宮殿舎御門垣等破損時、宮司令修補承前例、自今以後廿年一度新宮造替可奉遷御、宜長例者也トアリ、又二所太神宮例文ニ、太神宮御遷宮持統天皇四年也、被定置廿トアリテ、天武天皇ノ朝ニ、式年ヲ定メラレシヨリ規模増大トナリ、今日ノ壯巖ヲナセリ、屋上ニ千木、蟬木ヲ上グ、四方ニ大床ヲ廻ラシ、御階及ビ高欄ヲ附ケ、高欄ニ五色ノ玉二十七箇ヲ居エ、御橋ニモ亦六箇ヲ居ウ、此ノ玉ハ儀式帳ニハ載セザレドモ、延喜式ニ高欄上座玉十八枚、御橋玉六枚ヲ載ス、長曆二年遷宮ノ時、高欄上座玉十八箇ニ更ニ二箇ヲ加ヘ、二十箇トナス、其後五色玉七箇ヲ加ヘ以テ、現今ニ至レ

リ、御床下ニ御柱ヲ奉建ス之ヲ心御柱、又ハ齋柱ト稱ス、頗ル神祕ノ儀ニシテ、方一異
 狀アル時ハ、上奏ノ後之ヲ整理シ奉リ、又假殿遷宮ヲ行ヒテ、修繕ヲ行ヒシ事モアリ
 キ、又幄舎一字ヲ正殿ニ附屬セシメ以テ、兩儀ノ祭典ノ用ニ供ス、神宮改正ノ後、明治
 七年同定ノ上、柿葺ノ祭舎ヲ御前及ビ御橋ノ左右ニ建設シ、祭儀ヲ執行セシカドモ、
 多數ノ殿舎ヲ正殿ニ接近セシムルハ不慮ノ虞モアリ、且ツ舊儀ニアラザルヲ以テ、
 明治二十二年式年御遷宮ヨリ、取疊ノ幄舎ニ改メラル、即チ現今ノ様式是レナリ、

○東寶殿

神明造、葺葺、金銅金物打立、御階付、行二丈一尺、妻一丈四尺、高一丈四尺九寸、南面

壹宇

○西寶殿

同上

壹宇

延喜式ニ財殿ト稱ス、正殿ノ後東西ニ並立ス、故ニ東西寶殿ノ名アリ、皇太神宮儀式
 帳ノ條ニ、即禰宜御鎗給大物忌^乎先率立^且內院參入、次太神宮司、次大内人等、明曳御
 調糸參入、然即大物忌父開東寶殿御調糸進入畢、又^{九月}條ニ大物忌父開東幣帛殿御馬
 鞍具進上畢トアリ、又建久年中行事^{九月}條ニ官幣錦綾八端、二神主東寶殿參昇奉納之、
 三神主西寶殿參昇奉納御鞍同時也トアリ、又兵範記^{仁安三年}內宮ニ東寶殿壹宇件

殿所奉納、臨時奉幣使參宮時、被進納綾兩面、纏網、神服麻績、兩機殿神部勤進、二季神御
 衣、毎年六九兩月御祭時、宮司勤進、荷前御調絹絲等併燒失、西寶殿壹宇件殿所奉納往
 古御神寶、並毎年九月御祭時、被進納官下御鞍等併燒失トアリテ、即チ東寶殿ニハ、幣
 帛神御衣等、又西寶殿ニハ、古神寶御鞍等ヲ奉納スル所ナリ、寛正三年御遷宮ヨリ以
 降、百廿餘年間御造替ノ中、絶ト共ニ造立ナカリシヲ、天正十三年御遷宮再興ノ時ニ
 造營アリシナリ、但シ常基古今雜事記ニ、一禰宜荒木田守通ガ、豐受大神宮東西寶殿
 ハ正殿ノ前ニアルヲ以テ、當宮モ後ニアルヲ改メテ前ニ建ツベシトノ説ヲ提出セ
 シカバ、折中シテ正殿ト並べ建テシ由ヲ記セリ、然ルニ明治二十二年ニ至リテ、從來
 ノ位置ニ復セリ、辨官抄^{外宮}條ニ東西寶殿^{二字也、在正殿之前、于午也、トアルニ據レバ、}
 位置ハ異ナレドモ、構造ハ當宮モ亦同狀ナリシナラン、

○瑞垣

袖板打、延長五十五丈七尺五寸、高一丈五寸

壹重

○同南御門

神明造、葺葺、金銅金物打立、行二丈二尺五寸、妻一丈、高一丈二尺九寸、二分五厘、扉付

壹間

○同北御門

猿頭御門、金銅金物打立、扉付、丈四尺、高一丈一尺九寸、扉付

壹間

此ノ御垣ハ御内ヨリ第一ノ御垣ニシテ、皇太神宮儀式帳ニ、瑞垣廻長四十九丈高一丈南御門ハ長一丈五尺、弘一丈高九尺北御門ハ長一丈三尺高九尺トアリ、共ニ現今ノ丈尺ニ異ナレド、寛正遷宮記ニ、御前狹隘ニヨリ、御門ノ位置ヲ南方ニ一丈轉ゼシコト見エタルガ、其ノ後復擴張セシナラム、殿舎考證ニ、今瑞垣東西徑十五丈南北徑十四丈四尺、都廻長五十八丈八尺、除南門二丈二尺五寸、北門一丈五寸、トアリテ、約現今ノ寸尺ニ同ジ、又北御門ハ瑞垣ノ北方ニアリ、

○蕃 垣 七袖板打、延長十二丈、
尺三寸、無扉、弘一丈一尺、
壹 重

○同 御 門 九頭門、高八尺、
尺三寸、無扉、弘一丈一尺、
壹 間

皇太神宮儀式帳ニ、一玉垣、長十丈、稱ス、瑞垣ト内玉垣トノ中間ニアル御垣ナリ、五ノ字ノ誤脱アリテ、長五十四丈ナラントノ説アレド、信ズルニ足ラズ、建久九年假殿遷宮記ニ、南面木柴垣玉串御門、東西脇如蕃垣御門、在左右少垣各二丈三尺、付北方開間各五尺トアルニテ、其ノ制ヲ窺フベシ、現今ハ瑞垣御門左右ノ瑞垣ヨリ曲折シテ、内玉垣御門ノ柱ニ附屬セリ、

○内 玉 垣 十連子板打、柱付、延長八尺、
七丈七尺五分、
壹 重

○同 南 御 門 二神明造、
二丈四尺、
壹 間

○同 北 御 門 四頭門、
四丈一尺、
壹 間

○同 東 掖 門 一頭門、
一丈三寸、
壹 間

○同 西 掖 門 九頭門、
九丈二寸、
壹 間

皇太神宮儀式帳ニ、二ノ玉垣、廻長六丈、稱ス、現今ノ丈尺ト合ハズ、寛正遷宮ノ節一丈南ニ延長セシ以來、又何時カ増加セシナラン、殿舎考證ニハ、六十五丈五尺トセリ、正遷宮ト共ニ中絶セシヲ、殿舎考證ニ、依寛文七年十月廿日大司精長朝臣申請、同九年再興之トアリ、建久年中行事ノ條ニ、懸力稻事玉串御門左右玉垣懸也トアリテ、神嘗祭ニ供スル拔穂ハ、此ノ玉垣ニ懸クル例ナリキ、南御門ハ儀式帳新宮遷奉御裝ニ、玉串門帳一條、又同書記、
年中行事ノ條ニ、第三御門之左右置進トアリ、即チ御内ヨリ三重ナル故ニ、第三御門ト稱シ、又、
新年祭、即宮司之手捧持太玉串二枚、
宇治大内人自版位發受取、
同就本坐而捧持、即禰宜召大物忌父、令進第三御門之左トアリテ、大宮司禰宜

ノ太玉串ヲ奉納スルガ故ニ、玉串御門トモ稱セリ、又ノ山向物忌第三御門東方一列八枝八重數六十四本、右方亦如左員、並高四尺枝別木綿懸之トアリテ、此ノ御門ニ八重榊ヲ附ケラレシガ、正遷宮ノ中絶ト共ニ絶エタルヲ再興シテ、中重鳥居ニ附クルコトトナレリ、其ハ神宮典略ニ、こは後世に第三重御門の事を心得兼て、鳥居を建置しに、其西方に榊垣をそへ、元祿年中に又東方をそへしより、今の如く成しなりト見エタリ、又御金物ハ、内宮禰宜年表明治二年ニ、内玉垣御門也、金銅増准瑞垣御門金物トアリテ、詳細ハ知り難ケレド、現今ノ様式トナレルコトハ疑フベカラズ、北御門及ビ東西腋門ハ此ノ御垣ニ附屬セリ、

○中重鳥居

神明造、弘一丈五尺、八寸高一丈七尺、

壹基

此ノ鳥居ノ左右ニ八重榊ヲ附クルガ故ニ、八重賢木鳥居トモ云フ、然レド儀式帳及ビ延喜式ニ見エザルヲ以テ、殿舎考證ニ、接近世失此鳥居之名、至今天八重榊在鳥居左右傍、據帳則爲第三御門也ト云ヘルヲ、神宮典略ニ、こは後世に第三重御門の事を心得兼て、鳥居を建置しに、其西方に榊垣をそへ、元祿年中に又東方をそへしより、今

の如く成しなり、故に八重榊鳥居と云なり、
又同書ニ、建久年中行事ヲ引キテ、八重榊鳥居とも、南方の鳥居ともなきは、此建久の頃までなかりしなるべしトアリテ、中世ノ新造ト認定セリ、或ハ假殿ノ遺制ノ現存セルナラントノ一説モアリ、

○四丈殿

神明造、堂葺、行四丈、妻二丈、六尺高一丈二尺三寸一分、

壹宇

皇太神宮儀式帳ニ、齋内親王侍殿ニ作り、又齋王候殿、御子宿殿、御子殿トモ稱シ、四丈殿トハ神宮改正ノ後命ズル所ナリ、儀式帳六月例ニ、齋内親王以十七日午時參入坐且、川原殿與留且、手與仁移坐且、參入、到第三重東殿就御坐トアリ、延喜式亦同ジ、即チ本殿ノ事ナリ、故ニ齋内親王侍殿等ノ名アリ、永享遷宮記ニ、齋王候殿、舞姬候殿、數宇會不及沙汰令荒廢トアリ、又寛正造内宮記ニ、齋王候殿未作之間、爲讀合木屋一字、以黒木丈間六壺打之トアリ、其ノ後假建ニテ、御裝束神寶讀合等ノ行事ヲナシシガ、大神宮儀式解ニ、慶安遷宮の時再興造建ありて、後朽損に隨ひ、或は造替、或ハ修覆せらるトアル如ク、慶安度ノ遷宮ハ、西ノ御敷地ナリシ故ニ、西ノ御敷地ニ本殿ヲ再興ア

リシママニ、東ノ御敷地ノ時ニモ、猶其ノ御殿ヲ用キル事トナリ居リシナリ、然ルニ明治二年遷宮ノ節外玉垣板垣ノ御再興アリシカバ、一箇所ニテハ不便ナルヨリ、東ノ御敷地ニモ、假殿ヲ稟請シテ、築造セラレタルヲ、更ニ恒例ノ祭祀ニモ使用ヲ請ヒテ、据置トナリシカドモ、危造ナルヲ以テ、明治五年六月神宮大宮司北小路隨光ヨリ、再興並ニ改稱ヲ申請シ、八月指令ヲ得テ、再興セラレ、爾後御遷宮毎ニ造替ノ事トナレリ、現今モ御裝束神寶讀合ハ更ナリ、雨儀ノ祭典ノ中重ノ行事及ビ一月十一日御饌奉典ノ儀式ヲ行フナリ、儀式帳ニ此ノ殿ニ、蕃垣一重ヲ附ストアレバ、當時此ノ北ニ石壺アリシヲ支障センガ爲メナルヲ、今ハ位置モ變更セルニヨリ再興アラザルナリ、

- 外 玉垣 母木、子木、丸柱、犬垣、附屬、延 壹重
- 同 南御門 神明造、葦葺、金銅金物、打立、行二丈五尺、妻一丈三寸、高一丈三寸五分、扉付 壹間
- 同 東御門 丈兩、葺木、形、弘二丈、高一丈二尺四寸二分、扉付 壹間
- 同 西御門 同上 壹間

○同 北御門

同上

壹間

皇太神宮儀式帳ニ、三玉垣廻百二丈ト見エタリ、寛正造内宮記ニ、去永享三年十二月廿日御遷宮、中東西寶殿、外幣殿、御倉、御門、鳥居、御垣等、少々連々雖有造進、重々之玉垣、南鳥居齋王候殿、舞姬候殿、其外數字要頂之諸殿舍、不被造進トアリテ、永享三年以前ヨリ已ニ廢頽シ、寛正ニモ寛文ニモ其ノママナリシヲ、明治二年ノ遷宮ニ至リ、祭主ノ沙汰ニヨリテ、現今ノ如ク再興セラル、南御門ハ、太神宮諸雜事記、建久年中行事ニ、四ノ御門ト稱ス、八箇請屋日記第四御門ニ、御戸弘サ三尺一寸九分二まいトアレバ、寛正マデハ御扉アリシナラン、其ノ後中絶セシヲ、明治二年ニ至リ、御扉並ニ金物ヲ再興セリ、東西北ノ御門ノ形式ニ就キテハ、常庸卿公文所當用錄明治二年三月七日ノ條ニ、御再興御垣一條右者昨日粗御談申候通、三輪之制作ニ而者御同前不相好候間、外玉垣御鳥居ニ致シ、龜垣猿頭御門ニ決定致シ候ハバ、神宮之制作ニ相叶可然哉ニ被存候、御同意候ハバ、祭主殿へ御同様申上度候間、乍御面倒、御方ニ於而書面御草稿御認可被下候トアリテ、兩宮協議ノ上申請ヲセシカド、終ニ採用ニ至ラズシテ、今日ノ如ク造立セラレシナリ、

○南宿衛屋 切妻造、栴、東面

壹宇

○北宿衛屋 同上

壹宇

皇太神宮儀式帳ニ宿衛屋四間、又^年中行事正宮守護奉宿直歷名進宮司番畢事申司
禰宜^長上番上宿直人、大内人、番諸内人六人、戸口三人、中番下番宿直並如上番、右以十日
爲一番仕奉如件ト見エ、^{二月以下}延喜式ニ凡二所太神宮者禰宜^長大内人毎旬率物
忌父並小内人戸人等番宿直トアリテ、職掌人當直スル所ナリ、神宮典略^{宿衛屋ニ、}
て在處は、荒垣南北御門の左右に並び建しなるべしトアレ、御垣ノ四方即チ御門
ノアル處毎ニ、一字ヅツ建設セシナラン、其ハ豐受大神宮ハ三方ニノミ御門アルヲ
以テ蕃垣モ參重トシ、宿衛屋モ三間トセリ、是レ御門ノ傍ニ在リシ證ナリ、辨官抄^外
條ノニ、内玉垣之中無屋トアリ、兵範記仁安三年十二月皇大神宮炎上ニ關ル禰宜注進
ニ、燒却及ビ燒殘ノ殿舎ヲ列記スレ、宿衛屋ノ目ナケレバ、或ハ仁安以前ニ中絶セ
シモノノ如クナレド、其ノ後文永三年御遷宮沙汰文ニ、五位六位十二人宛被差定訖、
結番祠官參本宮齋王候殿、舞姬候殿瑞垣御門、所奉守護トアルヲ見レバ、鎌倉時代ノ
中頃迄ハ存在セシモノナラン、寛文遷宮ノ時再興アリシトノ説アレ、天和元年炎

上ノ際宿衛屋アリシ事見エズ、神宮改正迄内玉垣御門ノ西ニ番直所ト稱スル壹宇
アリシガ、何時ノ創建ニ關リシ物トモ知リガタシ、然レバ大神宮儀式解ニ、其後世亂
て古の如くならず、永正記文三句番文帳など委く見ゆれど、實は古の形もて認るま
でにて、實に宿直はつとめざる趣に見ゆ、^{○中}權禰宜小内人等當番には、夜のみ見廻
りて日夜宿直はせず、別に宿直役人を定、晝夜守護せしむるなりトアリ、明治二年御
垣ノ再興ニヨリ、外玉垣御門前ニ南宿衛屋ヲ建設セラレ、十六年一月ニ北宿衛屋壹
宇建設ノ許可ヲ得テ、十七年九月落成シ、又當直ノ制モ神官及ビ雇員日夜交替當直
ノ勤務ニ從フ事ト定マリテ、現今ニ及ベリ、

- 板垣 三横板、延長百一丈、高一尺 壹重
- 同南御門 冠一丈、木鳥居、形無、高九尺 壹宇
- 同東御門 同上 壹宇
- 同西御門 同上 壹宇
- 同北御門 同上 壹宇

皇太神宮儀式帳ニ、板垣トアリテ大宮院ノ外廓ナリ、神宮雜例集及ビ辨官抄ニ、荒垣ト稱ス、又南御門ハ御屋根ナク扉モナカリシカバ、冠木鳥居ト稱シテ、切開ケノ如キモノナルガ故ニ、儀式帳等ニ、御門又鳥居トモ舉ゲラレザリシナリ、寛正遷宮以後板垣ハ中絶ノママナリシヲ、寛延遷宮ノ時、西鳥居ハ現存セシカバ、南東北三方ノ鳥居ヲノミ再興セラレ、寛文九年遷宮ノ節、大神宮司精長ヨリ、板垣再興ノ事ヲ稟請スト雖、成立セザリシニ、明治二年ニ至リ、祭主ノ沙汰ニヨリ、現今ノ如ク再興セラル、三方ノ御門ハ寛延以來鳥居ナリシヲ、此ノ時ヨリ、金銅ノ金物ヲ附シテ、現今ノ如クナレリ、

○蕃

塀

横板一丈、高一丈

四重

御門ノ障蔽ノ爲メニ板垣ノ外ノ四方ニ樹立セラレタルナリ、皇太神宮儀式帳ニ見エザルヲ以テ、或ハ古來無カリシナラントノ説モアレド、等由氣太神宮儀式帳ノ板垣ノ次ニ、蕃垣參重ヲ舉ゲ、顯廣王記治承二年十月ノ條ニ、太神宮御前屏柱押金泥心經、番直宮掌見付之トアリ、建久年中行事ニ、屏垣ト見エタレバ、皇太神宮儀式帳ニハ全ク脱落

セシナリ、中世御垣ト共ニ廢絶セシヲ、明治二年ニ祭主ノ沙汰ニヨリ、玉垣及ビ板垣ト共ニ再興セラレテ現今ニ及ベリ、

○第一 鳥居

神明造、根卷石付、弘一丈八尺、高一丈九尺

壹基

江家次第ニ、參入大神宮、至御裳瀝河行祓、於一鳥居外脱、劔トアリ、中右記承久二年二月ノ條ニ、未剋許著内宮、於一鳥居外、先解劔、留隨身ト見エタルハ、宮中ノ最初ノ神門ニテ、延喜式ニ、凡二所太神宮内、不得帶兵仗參入トアルニ依リテナリ、神宮改正前迄ハ、單一鳥居トモ稱セリ、儀式帳ニ鳥居ハ全部所見ナシト雖、大神宮諸雜事記ニ、貞觀中已ニ外宮一鳥居ノ事見エタレバ、蓋シ當宮モ是レト異ナルコトナカルベシ、

○第一 一鳥居

神明造、根卷石付、弘一丈七尺、高一丈七尺七寸

壹基

此レモ儀式帳ニ所見ナシ、江家次第ニ、參大神宮略○於第二鳥居用鹽湯大麻ト見エ、中右記承久二年二月ノ條ニ、於二鳥居外、大麻鹽湯皆如初入トアリテ、敕使ノ下馬及ビ御鹽

大麻ハ此所ニテ行ハルルコト、今猶ホ古ノ如シ、皇族ノ下乗モ此所ナリ、等由氣太神宮儀式帳ニ、惣宮廻防往離ノ事アル如ク、當宮ニモ建造セラレテ、或ハ此鳥居ヲ西門トセシニハアラザルカ、其ハ大麻御鹽及ビ下乗等ヲ此所ニテ行フヲ以テナリ、

○外幣殿

神明造、堂葺、御階付、行一丈五尺、妻一丈二尺、高一丈二尺、九寸四分、南面

壹宇

皇太神宮儀式帳ニ、東宮坊並皇后宮幣帛並東海道驛使之幣帛及國々處々之調荷前雜物等納外幣殿トアリ、又辨官抄ノ外幣殿一字也、在于正殿後、瑞垣玉垣等外也、納此殿後、瑞垣玉垣等外也、トアルヲ見レバ、舊神寶ヲモ納メシナリ、現今モ猶ホ古神寶ノ類ヲ納ム、皇太神宮建久年中行事六月十六日御ニ、外幣殿前東寄、鋪設調北上西向、御稻御倉開以出納等、方々御稻任負數奉下、政所神主件札整進、由貴殿出納給之トアリ、又建久元年皇太神宮遷宮九月十六日、參集新宮御倉前、禰宜之坐、西玉垣之副自道、敷長筵著之、北面上、立役人外幣殿東方ニ候トアリテ、延曆ノ後ハ御垣中ニ入りテ、御稻御倉等ト併立スル事トナレリ、兵範記仁安三年十二月、皇太神宮ニモ、内院ノ殿舎中ニ納レタリ、大神宮儀式解ニ、此院延曆ノ比ハ大宮總板垣の外にありしゆゑに、此院に玉垣一重あり

けるを、其後荒垣をひろめられて此内とせしなりト云ヘリ、然ルニ慶安二年西御敷地ノ西南ニ再興セラレタレ、舊地ニアラザルヲ以テ、明治二十二年ニ舊記ヲ考覈シテ現今ノ地ニ移轉セリ、其ノ構造ハ、辨官抄ノ外幣殿ニ載スルガ如ク東西寶殿ト同ジ狀ナリシニ、何時シカ變轉セリ、

○御稻御倉

神明造、堂葺、金銅一物、打立、御階付、行一丈八尺、妻一丈二尺、高一丈、東面

壹宇

沿革ハ所管御稻御倉神ノ條ニ記セリ、

○由貴御倉

神明造、柿葺、行六尺、妻四尺、高七尺七寸五分、南面

壹宇

瑞垣御門

猿頭門、弘五尺、高六尺五寸八分、附付

壹間

瑞垣

袖編板打、延長四尺三寸八寸、高五尺

壹重

蕃堀

橫板嵌、弘六尺、高六尺三寸五分

壹重

右修繕

皇大神宮殿舎

沿革ハ所管由貴御倉神ノ條ニ記セリ、

○御酒殿

殿

一切妻造、柿葺、庇付、行二丈四尺、妻一丈二尺、高一丈一尺三寸、南面

壹宇

蕃

塀

横板、嵌、弘七尺、高七尺五寸

壹重

右修繕

沿革ハ所管御酒殿神ノ條ニ記セリ、

○御贄調舎

舎

切妻造、板葺、高九尺

壹宇

木

柵

雨覆付、延長十丈七尺、高七尺六寸

壹重

右修繕

皇太神宮儀式帳ニ、御贄清供奉御橋一處、長十丈、弘二尺、石壘一處、方四丈、太神宮正南御門在伊鈴御河當此御門流二俣也、此中島爾造奉石壘、此止由氣太神乃入坐御坐也ト見エテ、其ノ行事ハ、皇太神宮建久年中行事六月月次ニ、御饌物之中、國崎神戶所進餽奉

差料申及机忌刀白御饌奉取出、豐受宮奉祝石壘副奉昇居、物忌父等暫祇候、但三色物忌父兄部者西方東向別立、申云御搔鹽令成御侍也、中於件御座所彼匏以忌刀奉切、差申奉削懸壁御鹽、又清酒作内人白志御饌御河水入合奉、其後參入内院トアル如ク、月次祭又ハ神嘗祭由貴御饌ノ節ハ、必ズ豐受大神御坐ノ前ニテ、調理ノ式ヲ行ヒテ之ヲ御前ニ奉奠スル例ナリ、然ルニ雨儀行事ニ差支アルヲ以テ、六年三月ニ舊齋王御輿宿ヲ現地ニ移轉シテ御贄調舎ト稱セリ、

○忌火屋殿

殿

切妻造、柿葺、南面

壹宇

瑞

垣

袖七寸、板打、延長四丈三寸、高六尺六寸

壹重

蕃

塀

横板、嵌、弘九尺、高六尺七寸

壹重

右修繕

皇太神宮儀式帳ニ、御膳宿一院、殿二間トアリ、殿舎考證ニ、按忌火屋殿帳當宮爲御膳宿院トアリテ、即チ現今ノ忌火屋殿是ナリ、大同本記ニ、倭姬命戴奉度會宇治乃五十鈴宮令入坐鎮、理賜時、爾度會神主等先祖大若子命、平大神主、止定給、其女子兄比女、乎

物忌定給、宮内爾御饌殿乎造立、其殿爾為天披穂田稻乎、令披穂拔天、大物忌大乎彌奈止○、字一本大共為令、春炊供奉トアリ、是レ忌火屋殿ノ濫觴ニシテ、皇太神宮建久年中行事六月、次ニ、方方御稻等之中、一御方者於忌屋殿奉春、大物忌子良先奉仕、至于二三荒祭御方者於主神司殿奉春、然後各於忌火屋殿奉炊トアリテ、今モ猶ホ御饌ヲ炊キ奉ル殿舎ナリ、足利時代ニ中絶セシヲ、文正元年神宮ニテ假建ヲナセシコト、假殿遷宮引付ニ見エタリ、蓋シ此ノ殿ハ、仁安三年十二月正殿炎上ノ節、暫時ノ假殿ニ充テ奉リシ事實モ、兵範記ニ見エタレバ、外院殿舎中、最モ重キヲ置カルル殿舎ナリト知ルベシ。

○五 丈

殿

切妻造、板葺、行五丈六尺、妻一丈九尺、高一丈四寸四分、南面

壹 宇

皇太神宮儀式帳ニ、直會殿一院、九丈殿一間、五丈殿一間、四丈殿一間トアル、直會院中ノ一殿ナリ、故ニ一之殿、又一殿トモ稱ス、延喜式ニ、使率神祇史一人先申叙位之由、即就直會院第一殿トアリ、儀式帳二月、祈年ニ、即使並太神宮司外直會殿就座○、中正殿幣帛奉入即罷出耳、使並宮司直會給、又皇太神宮建久年中行事神嘗祭ニ、次着一殿坐

跡上坐正親次中臣次忌部次占部也、○中直會饗膳畢トアリテ、祭典奉仕ノ後、直會ノ饗膳ヲ行フ所ナリ、神宮元祿勘文一殿ニ、諸神事集會之所、又雨儀之時行於伴殿ト見エテ、今モ猶ホ雨儀ノ修祓、遙拜式、大祓等ノ諸式、又攝社以下遙祀ノ祭典、及ビ遷宮ニ關スル諸祭ノ饗膳ハ、此殿ニ於テ行ハル、神宮典略五丈殿ニ、此モ寛正より後には絶たるか物に見えずトアリテ、正遷宮中絶ト共ニ絶タリケン、天正遷宮ニハ木作始饗膳ヲ一禰宜ノ齋館ニテ行ヘリ、其ノ後再興アリケルニヤ、慶安遷宮ニ五丈殿造替ノ爲メ、舊殿破却ノ事見エタレバ、慶長寛永中ニ再興アリシナルベシ、明治七年七月神宮祭主ヨリ増尺ノ事ヲ上申シテ、現今ノ如クナレリ、但シ直會院ノ中ナル九丈殿及ビ主神司殿ハ中絶ノママナリ、

○内

御

厩

神明造、切妻、柿葺、南面

壹 宇

右修繕

皇太神宮儀式帳ニ、御厩一間、又御馬飼内人外從七位上磯部清人○、中御馬飼丁番別御馬令飼、延喜式ニ、凡二所太神宮櫛飼御馬各二疋、簡幣馬内恒令養飼トアル所ナリ、

中右記長承二年五月一日ノ條ニ、内宮禰宜等申請、中御厩屋在、内院、仍有火事、恐、外院禰宜館邊、爾可被立之、予申云、隨祭主申可被行也、トアリテ、舊來ハ内院ニアリシヲ、此時ヨリ移轉セラレケルカ、但シ外宮儀式解ニハ、内院ヲ中院ノ誤トシ、兵範記、建久假殿遷宮記ニモ中院ト見エタリ、大神宮儀式解ニ、此厩は内の御厩ともいふ、その舊跡正殿の西御倉院の邊なるべしトアリ、氏經神事記文明元年ノ條ニ、神馬退落ニヨリ牽進ヲ請ヒ、臨時ニ牽進セラレタル文アリ文明二年ノ條ニ、右今月廿七日、權御馬飼丁等、不相隨ヲ請開御厩之戶、出御馳廻宮中トアルヲ見レバ、此ノ頃迄ハ御馬モ共ニ存在セシナリ、禰宜家古文書ニ、永祿三年ニ牽進ヲ請フ文アレド、牽進ノ事見エズ、サレバ諸事ノ衰退ニ從ヒ中絶セシヲ、慶應元年神嘗祭再興ノ節、御厩モ西御敷地ノ西方ニ東面ニ再興セラレ、幣馬一頭ヲ飼養セラル、内宮禰宜年表明治二年ノ條ニ、幣馬二匹内一匹、察御馬青毛立、内御厩養飼之、去慶應元年青毛一匹、今度又一匹、各置内御厩、權飼之也ト見エテ、是ノ時更ニ一頭ヲ加ヘラレタリ、爾後幣馬牽進ノ事ハ廢止セラレシカドモ、退落ニ從ヒテ宮内省ヨリ牽進ノ事トナリテ御厩ハ明治四十三年現今ノ地ニ移轉セリ、

○外 御 厩

神明造切妻、柿柱、南面

壹 宇

右修繕

皇太神宮儀式帳、禰宜齋館院中ニ厩一間アリ、大神宮儀式解ニ、此厩は中世よりの記録に見ゆる外御厩なるべし、御澤の北の邊なる現存の御厩なり、中内御厩にむかへて外御厩といふは中世よりの事なり、大御神の御馬を禰宜の厩に立置べきことわりもなければ、齋館院内に有れど、禰宜の厩にはあらざるにやトアリテ、現在ノ外御厩ヲ舊來ノ御厩ニ配スル如クナレドモ、正保四年一禰宜經寄ヨリ、再興ヲ申請セラル文書アレバ、古ノ御厩ハ既ニ廢絶セシモノト知ラル、神宮編年記寛保二年ニ、久野三郎左衛門殿、城主、田丸、被牽進候神馬、承應二年五月十七日、闕如ニ付、同年六月十四日、久野千松殿、被立替候トアルヲ見レバ、承應二年ニ退落ノ御馬ハ其ヨリ七年前即チ正保四年ニ牽進セシモノニテ、其ヲ飼養スベキ料ニ、一禰宜ヨリ御厩ノ事ヲ申請シテ、再興セラレシモノナルベシ、夫ヨリ延寶五年ニ、姫路城主松平氏貞、享二年ニ名古屋城主徳川氏ノ牽進アリシノミニテ、他ハ退落ノ時ニ、田丸城主久野氏ヨリ牽進ノ例ナリシガ、文久二年久野氏牽進ノ御馬、明治十六年ニ退落ノ後ハ、宮内省ヨリ牽進ノ事トナレリ、

○御

井 皇大神宮西

屋 切妻、板葺、行四尺二寸、妻三尺二寸二分

垣 通子板打、延長五丈一尺二寸

壹 壹 宇 重

右神宮司廳修繕

神宮編年記延寶九年十一月ノ條ニ、扱御正體之儀、予氏富奉戴之、御政印之水の上之山陰にし、て、古殿之御船代を敷覆、神奉遷之トアリ、舊來内宮政印ヲ行フニ、此ノ水ニテ練リタル、赭土ヲ用キシニヨリ、御政印ノ水ト稱ス、建久年中行事ニ、一神主束帶、自余衣冠、自鳥居參廳舍、○中前政所代、前出納等、御政印御鎰箱入持參、前政所代自東第一間前立、于時政所神主立向乍箱請取宮中向三度拜、後長官御前持參、長官是請取宮中向三度拜之トアリテ、其ノ執扱ヒ神靈ニ異ナル事ナケレバ、此ノ水モ亦最モ尊重セラレテ、神宮改正ノ後ハ、御料水ニ用キルコトモアルナリ、

豐受大神宮殿舍

○正

殿 神明造、葺、高欄御階、金銅金物打立、行三丈三寸、尺六寸、妻一丈九尺、高二丈一尺一寸一分、南面 壹 宇

幄 切妻、板葺、行一丈八尺、妻一丈五尺、高一丈 壹 宇

等由氣太神宮儀式帳ニ、大宮一院正殿壹區トアリ、一院ノ本殿ヲ正殿ト稱スルコト、並ニ式年御遷宮ノ制度等ハ、皇大神宮ノ條ニ述ベタルガ如シ、豐受大神ヲ奉齋セル大宮ナリ、太神宮諸雜事記康平二年ノ條ニ、六月廿四日造物所長上等下向、是則准太神宮例、豐受太神宮正殿御金物可被奉莊也トアルハ、兩宮諸殿舍古儀丈尺見込帳ノ附箋ニ、神宮典略ニ雜事記ヲ引テ、康平二年ニ始テ御階高欄等ヲ造加ノ如クイヘルハ、其記文ヲ委ク見ザル謬説ナリ、○中内宮正殿ニ准ジテ、外宮正殿並ニ高欄御階男柱等ノ金物ヲ始テ莊奉ラレシヲ謂フナリト云ヘルガ如ク、此ノ時御金物ヲ加ヘラレシナリ、其ノ數量形狀、木材ノ丈尺切組ノ仕様等、僅少ノ異同アレ、皇大神宮正殿ト大略同シ構造ナリ、

又幄舍ハ、正殿ニ附屬セシメテ、雨儀ノ祭典ノ用ニ供ス設置ノ由來皇大神宮ニ同シ、

○東 寶殿 五神明造、葦葦、金銅金物打立、刻三寸三分五厘、北面壹宇

○西 寶殿 同上 壹宇

延喜式ニ財殿ト稱ス、辨官抄ニ東西寶殿ニ字也、在正殿之前、于午也、トアレバ、古儀ハ南北ノ棟通りニテ、東寶殿ハ即チ西面、西寶殿ハ東面ナリシナリ、又構造モ現今ハ普通ノ神明造ナレバ、以板組上トアルヲ見レバ、御儀殿ト同ジ形式ナリシナラム等由氣太神宮儀式帳祭ノ條六月次ニ、内院參入、次太神宮司次大内人三人、明曳御調糸持參入、然太神宮司波内院御門内跪侍、禰宜波開東寶殿御調糸進入員卅絢、又祭ノ條ニ、大内人波西寶殿開、且御馬鞍調度進上畢トアリ、辨官抄ニ、幣絹絲納東寶殿、幣錦奉納正殿、東西寶殿是倉敷、可尋在瑞籬内トアリテ、東寶殿ハ幣帛並ニ調糸ヲ、西寶殿ハ御鞍等ヲ納ムル殿舎ナリ、應永送官符ニ、東西寶殿ノ金物ヲ載スレドモ、永享遷宮ノ後廢絶セシヲ、永祿六年ニ現今ノ如ク再興セラレシナリ、

○瑞 垣 袖板垣、延長五十一丈七尺、高九尺五寸一 壹重

○同南御門 妻神明造、葦葦、金銅金物打立、行二丈二尺、壹間

○同北御門 杖狼頭門、金銅金物打立、弘一丈一尺、高九尺、壹間

此ハ御内ヨリ第一ノ御垣ニシテ、等由氣太神宮儀式帳ニ、瑞垣一重、長一丈十トアリ、又神嘗祭ノ條太神宮司波内院御門内跪侍トアルハ、即チ南御門ニテ、此レヨリ内ヲ内院ト云フ、故ニ此ノ名アリ、永享遷宮召立文ニハ、第一御門御幌二人ト見エタリ、康曆遷宮記ニ、新宮瑞垣御門柱根、自本宮者三尺寄給之間寶殿止、相近、同御門モ三尺寄北事同前也、可爲何様哉、作所毛不被存知、工毛不知、任東宮之寸法、自古穴三尺寄南、自昨日掘之、言語同斷地堅候也、止申之、予元引見記錄之處、西宮瑞垣御門並同北御門三尺寄北事、祖父長官嘉元記分明之間、令指南了ト見エテ、東西御敷地ニヨリ、三尺南北ニ支吾アリ、且ツ方向モ亦異ナリシヲ、明治二十二年ヨリ、東西御敷地トモ同シ事ニ定メラレ、四十二年ヨリ並立造替ノ事トナリシガ故ニ、心御柱ヲ除クノ外諸殿舎御門御垣等ノ位置モ、多少變更ノ影響ヲ受ケタリ、北御門ハ瑞垣ノ北方ニ附屬ス、

○蕃垣御門 杖狼頭門、無扉、弘一丈一尺、高一丈二尺六寸一 壹間

等由氣太神宮儀式帳ニ所載ナシ、一ニ猿頭御門ト稱ス、外宮儀式解ニ、こは下文に蕃垣三重各長二丈とある内の一重なるを、御垣を御門に改められしなり、中右記天永二年四月九日、伊勢豐受宮蕃垣御門顛倒とあれば、御扉もありし事知れたるを、今は御扉も絶て檀のみ存せりトアレドモ、蕃垣ヲ蕃垣御門ニ混ズベキ理由モナク、儀式帳ハ板垣ノ次ニ掲ゲ、又應永廿六年送官符ハ、瑞垣南御門、北御門、蕃垣御門、四御門、荒垣鳥居ト掲ゲ、且ツ鋪拾貳口、牒釘覆金伍枚、肱金貳枚トアリテ、其ノ御扉付ナルコトモ想像ニ足ル、以上記載ノ如ク順序ヨリ見ルモ、亦御扉ノ存在ヨリ見ルモ、蕃垣御門ト稱スルハ内玉垣御門ニアラザルカトノ説モアリ、但シ現今ノ形式トナリシハ、永祿六年遷宮ノ再興ニヨリテナリ、

- 内 玉 垣 連子板打、扣柱付、延長六丈二寸、高八尺
 - 同 南 御 門 神明造、葦葺、金銅金物打立、行三丈一尺、妻一丈四尺、高一丈四尺、扉付
 - 同 北 御 門 猿頭門、金銅金物打立、五尺、高一丈二尺、一寸五分
 - 同 東 掖 門 猿頭門、透扉、弘六尺、一寸六分
- 壹 重
壹 間
壹 間
壹 間

等由氣太神宮儀式帳ニ、玉垣二重、一重延長六丈二寸、高一丈、一重トアリ、御内ヨリ第二重ノ御垣是ナリ、又九月ニ拔穂稻、平波内院持參入、正殿乃下奉置、懸稅稻、平波玉垣、爾懸奉ト見エタリ、頭工日記ニ、永享遷宮ノ節、玉垣二重注文ノ事アレバ、此ノ後ニ廢絶シタリケン、寛文九年遷宮ノ節、大神宮司精長申請シテ再興ス、既ニ蕃垣御門ノ條ニ記セルガ如ク、中世ニ蕃垣御門ト稱セシハ、即チ此ノ御門ナリト一説アリ、又儀式帳六月月次ニ即大物忌父發、太神宮司並禰宜二人所捧持、太玉串、受取、第二御門内方進置トアリ、故ニ江家次第ニ、令立宮司禰宜等所持之玉串於玉串御門掖ト見エテ、玉串御門ノ名既ニ公稱セララル、外宮儀式解ニ、亂世の頃より千木堅魚木も金物も絶たりしに、寛文七年十月、大神宮司精長朝臣申請テ、同九年遷宮の時再興あり、○中御扉は亂世にも在り、寛永の頃ほひまでも有けるを、いかなる故にや、寛永六年遷宮の時取除テ、寛文九年にも再興なく、寛延二年遷宮の時再興あれども、御扉の金物は今に無しトアリ、智彦卿公文所日次、延享四年ニ、玉串御門御扉御金物之儀、此度御扉一、一所ニ御願申上候而者、先達而御物入無之由申上候と相違致し候、故先御金物をは相願不申工面に一決トアリテ、金物ハ再興ヲ願ハザリシ故ニ、御扉ノミ再興セラレタリ、爾後御金物再興ノ事ハ書類ニ見エザレ、内宮禰宜年表、明治二年ニ、内玉垣御門

玉串御門也、金銅增加准瑞垣御門金物トアレバ、此、時同様ニ再興アリシモノト覺ユ、其ハ明治二十二年ニ有形ノママニ造替アリシ様ナルニテ知ルベシ、北御門ハ玉垣ノ北方ニ附屬ス、寛文ニ御垣ト共ニ再興ス、東掖門ハ南御門ノ東ニアリ、寛文ニ御垣再興ノ時ハナカリシニカヤ、外宮儀式解ニ小門、明和新規トアリテ、明和遷宮ニ新設セシナリ、

○中重鳥居

神明造、弘一丈四尺九寸、高一丈五寸

壹基

等由氣太神宮儀式帳ニ見エズ、此ヲ小鳥居トモ稱ス、殿舎考證ニ江家次第ヲ引キテ、第三御門ナリト云ヘレド、長秋記長承三年六月土宮ノ條ニ、伴社本自有鳥居而内垣内無有鳥居之例、今度可立鳥居之否事トアルニ據レバ、御垣内ニハ鳥居ナキ例ナリ、故ニ是亦皇大神宮八重櫛鳥居ト同ジク、假殿ノ遺制ナリトノ説アリ、

○四丈殿

神明造、葦葺、行四丈、妻二丈、高一丈一尺、六寸六分

壹宇

等由氣太神宮儀式帳ニ、齋内親王殿ニ作り、又齋王候殿、御子宿屋トモ稱ス、四丈殿ハ神宮改正ノ後ニ改メシナリ、延喜式月次祭ノ條ニ、齋内親王參入度會宮至板垣門東頭下興入、外玉垣門就座於東殿トアリ、儀式帳モ之ニ同ジ、即チ齋内親王御參向ノ時ニ入坐ス、殿舎ナリ、又勅使部類承久二年二月三日ノ條ニ、予使々參進著御子宿屋數半帖爲子座、是依雨儀也トアル如ク、現今モ雨儀ノ行事及ビ遷宮ノ節、御裝束神寶讀合等、此ノ殿内ニテ行フコト一ニ皇大神宮ニ同ジ、正遷宮ノ中絶ト共ニ此ノ殿モ廢絶セリ、慶安遷宮ノ節ニ内宮ノ分ハ再興アリシカドモ、外宮ハ再興ナカリシヲ、天和三年ニ申請シ、元祿五年ニ至リテ、徳川家綱ノ母ノ寄附ニテ西ノ御敷地ニ建築シタレド、爾後ハ修繕ノミニテ、殿舎ノ様式モ違ヒタレバ、明治二年遷宮ノ節ニ申請セシニヨリ、營繕司ニテ東御敷地ニ假建ヲ設ケラレテ、神宮改正ノ後ニ漸ク再興セラレシコト、既ニ内宮ノ條ニ云ヒシガ如シ、

○外玉垣

母木、子木、丸柱、犬垣、附屬、延長八丈九寸、高一丈

壹重

○同南御門

神明造、葦葺、金銅、打立、行一丈四分、妻一丈三寸、高一丈四分

壹間

○同東御門 雨覆冠木形、弘二丈、高一丈二尺七寸

壹間

○同西御門 同上

壹間

○同北御門 同上

壹間

等由氣太神宮儀式帳ニ、玉垣二重、廻一重、廻長六丈六寸、高二丈、一重トアリ、御内ヨリ第三重ノ御垣ナリ、永享以降中絶、永祿ニモ再興ナク、慶應三年ニ至リ、祭主ノ沙汰ニテ現今ノ如ク再興セラル、南御門ハ、延喜式祭ノ條、六月、次ニ、十六日平且齋内親王參入度會宮、至板垣門東頭下與入、外玉垣門トアリ、應永送官符ニモ、四御門ノ御金物見エ、頭工日記ニ御戸弘三尺一寸九分トアレバ、御金物モ御扉モ現存セシヲ、其ノ後廢絶シ、寛文ニ御門ノミ再興セラレタレド、御扉モ御壁板モナク、柱ノミ十二本立テルヲ以テ、俗ニ二十所御門ト稱セシガ、明治二年ニ御垣ト共ニ御扉金物ヲモ再興セラレタリ、東西北ノ御門ノ形式ハ、既ニ内宮ノ條ニ辨ゼシガ如シ、

○御饌殿

殿

神明造、井樓組、金銅金物打立、刻御階付、葺、行一丈九尺五寸、妻一丈三尺、高一丈四尺五寸五分、五厘、南面、南北御扉付

壹宇

蕃

堀

横板、嵌、弘一丈八尺、高一丈

貳重

等由氣太神宮儀式帳ニ、天照坐皇大神始卷向玉城宮御宇天皇御世、國々處々大宮處求賜時、度會乃宇治乃伊須須乃河上乃大宮供奉、尔時大長谷天皇御夢、爾誨覺賜、天吾高天原坐、且見志真岐賜、志都真利坐、然吾一處耳坐、甚苦、加以大御饌、安不聞食坐故、爾丹波國比治乃真奈井、爾坐我御饌都神等由氣大神、我許欲、誨覺奉、尔時天皇驚悟賜、且即從丹波國令行幸、度會乃山田原乃下石根、爾宮柱太高、知立天原、爾知疑高知、且宮定齋仕奉始、是以御饌殿造奉、且天照坐皇大神乃朝乃大御饌、夕乃大御饌、且日別供奉トアリテ、豐受大神ノ御鎮坐ノ根源實ニ茲ニアリ、然ルニ太神宮諸雜事記ニ、神龜六年正月十日御饌物依例於豐受神宮調備、從彼費參於太神宮之間、宇浦田山之追道死男爲鳥犬被喰、肉骨分散途中、然而忽依無遁去之道、件御饌物、平賚徹、天合期供進已了、爰同年二月十三日天皇俄御藥、仍令卜食、中同三月十三日、依右大臣宣奉、敕下、敕使且被謝遣、件不淨之由、中其後依宣旨卜定、豐受神宮新建、立御饌殿、可令供奉太神宮朝夕御饌之由、神祇官陰陽寮共ト申既了、仍官司千上蒙別宣旨、致不日功豐受宮外院建立御饌殿一宇、瑞垣一重、自爾以降於件殿供進朝夕御饌物、今號御饌殿是也トアレ、且天皇ノ御不豫ノ事正史ニ見エズ、又神龜六年ニハ右大臣

ナキノミナラズ、左大臣長屋王モ二月十日ニ誅セラレ、又附屬ノ瑞垣ハ永享以後、正宮ノ御垣廢絶ニヨリ、特ニ御饌殿ノ爲メニ造立セシモノナルヲヤ、然レバ此ノ雜事記ノ所傳ハ全ク誤謬ニシテ、御饌殿ノ創立ハ豐受大神宮御鎮坐ト同時ナル事ハ儀式帳ノ證スル所明確ニシテ、毫モ疑フベカラザルナリ、明治己丑遷宮公文類纂ニ、明治十八年三月神宮宮司鹿島則文ヨリ、御饌殿ニ屬スル周圍ノ御垣御門鳥居ハ、等由氣太神宮儀式帳及新任辨官抄等ニ記載ナキ上ハ、是レ蓋中世外御垣廢絶後特リ御饌殿屹立シテ四方放開、神明ニ對シ甚不敬ニ付設置シタル事ト存候、○中彼御饌殿ニ屬スル周圍ノ御垣ヲ廢止スル上ハ、御饌殿ニ屬スル鳥居亦之ヲ廢シ、固ヨリ彼板垣切明ケノ如キハ、勿論閉塞致サズ候、ハデハ不都合ノ義ト思考仕候也、ト祭主宮ニ進言セシ事見エ、十月山縣内務卿ノ達アリテ、中世建造ノ御垣、御門、鳥居ハ廢止セリ、又蕃塚二重ハ北御門ヨリ、御饌奉仕ノ儀式顯露ナルヲ以テ、二十二年十月ニ申請シテ新ニ建造シ、現今ノ様式トナレルナリ、

○外幣

殿

七神明造、刻御階付、壹肆、金銅金物打立、行一丈四寸、妻一丈高一丈三寸五分、南面

壹字

等由氣太神宮儀式帳ニ、幣帛殿壹字トアリ、内院ノ外ニアルヲ以テ外幣殿ト稱ス、舊儀ハ、三后皇太子ノ幣帛ヲ納ムル事、既ニ内宮ノ條ニ云ヒシガ如シ、又辨官抄ニ外幣殿一字也、在正殿後瑞垣玉垣等外也、茲トアリテ、古神寶等ヲ納ムル所ニシテ、古ハ東殿、神寶幣帛納此殿、作棟如東西寶殿西寶殿ノ如ク井樓組ナリキ、太神宮諸雜事記長曆四年ノ條ニ、七月廿六日夜子時西風俄吹、豐受太神宮正殿、東西寶殿瑞垣、御門等、拂地顛倒給既畢、○中仍御氣殿忽洗淨、天以同廿七日戌時、天正殿並三所相殿、乃御體、奉遷鎮畢、○中外幣殿、洗淨、天朝夕御膳、奉備トアリテ、御饌殿ニ故障アル時ハ此ノ殿ニテ、朝夕御饌ヲ奉奠スル例ナリ、

○南宿衛屋

切妻造、棟、東面

壹字

等由氣太神宮儀式帳ニ、宿直屋三間トアリ、又同書年中行事並月ニ、宮守護奉宿直人記正月ノ條夫歷名進太神宮司申番長大内人等上番宿直人十六人、禰宜一人長大内人一人番長、小内人三人、戸人八人、○中番下番宿直事如件ト見エ、二月以下延喜式ニ、凡二所太神宮禰宜、番長大内人、每旬奉物忌父並小内人、戸人等分番宿直トアル如ク、御垣内守護ノ爲メ

ニ職掌人ノ當直スル所ナリ、神宮典略ニ、荒垣の外南方に二間、北方に一間有しならんトアレドモ、非ナリ、元來板垣ハ三ヶ所ニロアリ、東御敷地ノ時ハ、南西北ニロヲ造リ、西御敷地ノ時ハ、南東北ニロヲ造ルガ故ニ、其ノロヲ障蔽スル藩屏モ三重ナリ、然レバ其ノ三方ニ建設セシ事知ルベシ、類聚大補任建曆元年造宮使隆繼ノ條ニ、今度造加宿直舎壹宇四間嘉應始造立、建久不造之、今度可造之由、依仰募別功造進之トアルハ、内宮ノ例ニヨリテ、四宇ヲ申請セシナラン、或ハ當時板垣ノ四方ニロヲ開キシモ知ルベカラズ、然ルヲ近世ハ、外宮儀式解ニ、今に當宮玉串御門ノ南東に一間今大宮番有テ、禰宜家丁ら晝夜守り居るのみにして、毎旬番文に禰宜以下別宮内人までの歴名を注して御政印を行ひ、大宮司に進といへども、其實なく、御儀勤番の禰宜物忌父等、その齋館に宿するのみなり、甚恐きことぞかしトアルガ如クナリシニ、明治二年御垣ノ再興ニヨリ、外玉垣御門前ニ、南宿衛屋ヲ建テラレ尋ギテ、北宿衛屋ヲ設ケラレテ、神宮交替シテ當直スルコト、既ニ内宮ノ條ニ述ベシガ如シ、

○板

垣

横板、延長、百十丈、四尺五寸、高一丈

壹重

○同

南御門

冠木鳥居形、無扉、金銅執甲打立、弘一丈八尺、高一丈八尺四寸

壹宇

○同

東御門

同上、弘一丈四尺四寸、高一丈四尺四寸

壹宇

○同

西御門

同上

壹宇

○同

北御門

同上

壹宇

等由氣太神宮儀式帳ニ、板垣壹重トアリテ、大宮院ノ外廓ナリ、神宮雜例集、辨官抄ニハ、荒垣ト稱ス、南御門ハ、御屋根モ扉モ無カリシカバ、辨官抄ニ、件荒垣有鳥居トアリ、儀式帳六月次ニ、十六日平旦齋内親王參入坐、到板垣御門、且御與留、且ト見エ、延喜式ニモ、板垣門アリ、又冠木鳥居ト稱セシハ、御垣廢絶シテ鳥居ノミ屹立セシ時代ナリ、元來古制ハ、板垣ノ貫ヲ上ニ掲ゲテ通用ニ充テシ迄ニテ、御門トハ稱スレ、其ノ數ニハ入ラザリシガ故ニ、儀式帳ノ大宮院ノ建設物ノ内ニハ載セラレズ、諸書ニ御門トモ鳥居トモ、區々ノ名稱トハナレリシナリ、御門御垣共ニ永享以後廢絶シ、寛文七年、大神宮司精長再興ヲ申請シ、明治二年ニ至リ、祭主ノ沙汰ニヨリテ、現今ノ如ク御垣及ビ東西北ノ鳥居並ニ御金物モ、再興セラレシナリ、

○蕃

塀 横板一丈、高二丈

參重

等由氣太神宮儀式帳ニ、蕃垣參重ト見エタリ、殿舎考證ニ之ヲ一重ノ誤トシテ、内宮ノ如ク齋王候殿ノ附屬ナリト云ヒ、外宮儀式解ニハ一重ハ齋王候殿前、一重ハ瑞垣御門前一重外玉垣御門内ニアリシナリトアレニ然ラズ、其ハ假殿遷宮要須記ニ、鳥居六基、南面四基○中略、在北二基、柴垣、在ト見エ、古老口實傳ニ、服氣禰宜者御饌道以北、端石仁副天步行經北屏外也、トアルニテ板垣御門外ナル事明瞭ナルヲヤ、其ノ位置ハ、東御敷地ニテハ西南北ニ、西ノ御敷地ニテハ東南北ニアリシ事、宿衛屋ノ條ニ云ヘルニテ知ルベシ、此レモ御垣ト共ニ廢絶セシヲ、明治二年ニ現今ノ如ク再興セラレシナリ、

○第一鳥居

神明造、弘一丈八尺、高三丈八尺、三寸

壹基

太神宮諸雜事記貞觀十五年ニ、九月十六日朝仁外宮一鳥居之許トアリ、等由氣太神宮儀式帳ニハ載セラレザレニ、當時ヨリ已ニ建テラレシナラム、江家次第ニ、參豐受太神宮第一鳥居下帶鉞人者脱之、此内トアリ、此ハ宮中最初ノ神門ニテ、延喜式ニ、凡二

所太神宮内不得帶兵杖參入トアルニ依ル事既ニ内宮ノ條ニ云ヒシガ如シ、

○第二鳥居

神明造、弘一丈八尺、高三丈八尺、三寸

壹基

江家次第第一鳥居ノ條ニ、至第二鳥居下内人二人一人持鹽湯、著衣冠、一人灑鹽湯、獻大麻ト見エ、中右記水久二年二月三、至二鳥居外内人二人出來、先一人取大麻了懸意、次一人灑鹽湯トアリテ、今猶ホ此レヲ行ヒ、敕使皇族ノ下乗所ナルコト、既ニ内宮ノ條ニ述ベシガ如シ、此ハ元來等由氣太神宮儀式帳ニ、總宮防往籬貳百七拾餘丈トアル、防往籬ノ東門ナルガ故ニ、大麻御鹽ノ行事、及ビ下乗ノ儀モ此ノ處ニ於テ行ハルナルベシ、

○北御門口鳥居

神明造、弘一丈八尺、高三丈八尺、三寸

壹基

應安遷宮記六年十一月十一日ニ、同十四日夕有御事始神事、祭主忠直朝臣東略○自北鳥居被參也、於例所有手水トアリ、是レ此ノ鳥居ノ見ユル初ナリ、永正記ニ、御饌供進中不神

拜略○中於外宮者内御馬北鳥居邊候也トアリ、第二鳥居ノ條ニ云ヘル、防往籬ノ北門ナルベシ、然ルヲ多賀宮ノ鳥居ナリトノ俗説アレド、取ルニ足ラズ、

○御酒殿 一切妻造、二重板葺、行一丈九尺一寸、南面 壹宇

右修繕

沿革ハ所管御酒殿神ノ條ニ記セリ、

○五丈殿 切妻、柿葺、行六丈三寸四分、妻二丈四分、高一丈七寸四分、 壹宇

右修繕

等由氣太神宮儀式帳ニ直會所壹院、五丈殿二間、一長四丈、廣一丈六尺、高一丈九丈殿一間、廣一丈、直會御門、長一丈二尺、廣一丈、高一丈、見ニ延喜宮太神式祭ノ月次ニ退就解齋殿給酒食、江家次第使ノ條ニ著直會殿、西、北、南、東、兼居使以下酒肴、辨官抄ニ、一殿一宇、五箇間、

並公卿敎使中臣神祇官殿部著之九丈殿神部以下著也トアリテ、祭典奉仕後、直會ノ饗膳ヲ行フ處ナルガ故ニ直會所トモ稱シキ、抑モ五丈殿ト稱セシモノ二間アリテ、一ヲ一殿ト云ヒ、一ヲ主神司殿ト云ヒシガ、中世廢絶セシヲ以テ、一殿ノ行事ハ九丈殿ニテ行ヒキ、故ニ殿舎考證ニ按直會一殿中絶、故一殿之行事假於九丈殿行之、俗誤以九丈殿爲一殿ト云ヘリ、遷宮ニ關スル諸祭ノ饗膳ハ、豐受大神宮慶長正遷宮記ニ、當一殿之北立假小屋、各參著于件假小屋、○中酒三獻有之、又寛永外宮正遷宮子良館記祭ノ條ニ、直就一殿北木屋假木屋兼日營作之トアリテ、一時假殿ヲ作リテ行ヒシナリ、其一殿ハ、九丈殿ヲ假稱セルニテ、假木屋ハ即チ五丈殿ナリ、寛文六年ニ五丈殿再興ヲ出願シ、天和三年ニ再願ノ書面ハ返付セラレシカド、神境紀談ニ、五丈殿ト御門トハ絶テ、九丈殿ノミ殘リシニ、大樹君ノ御母堂桂昌院殿御寄進トシテ、五丈殿一宇ヲ再興ナサレ、元祿四年造營ノ功成就シケリトアリテ、其ノ一宇ノミ再興セラレ今一宇ノ主神司殿ト稱セシ五丈殿ハ、竟ニ再興ニ至ラズ、現今ノ五丈殿ハ、雨儀祭典ノ修祓ヲナシ、又遷宮ニ關スル諸祭典ノ饗膳ヲ行フ事、猶ホ舊ノ如シ、

○忌火屋殿

切妻造、二重板葺、南面

瑞垣

一軸、板打、延長六丈三尺、高一丈五尺六寸五分

壹宇
壹重

右修繕

等由氣太神宮儀式帳ニ、御饌炊殿一間トアリ、外宮儀式解ニ、御饌炊屋上ニ出、毎日朝夕の大御饌を調備奉る所にて現に在り、其所も新任辨官抄に、在廳東調備御膳所也とあるが如し、○中此殿の中間に板壁を作隔てて、東を御白殿と云ひ、西を忌火屋殿とも御炊殿とも常には云へりトアリ、現今モ舊儀ノ如ク、日毎朝夕ノ御饌ハ勿論諸祭典ノ御饌ヲ調理ス、但シ建物ハ、明治二十二年迄ハ稍舊様ヲ存シタレ、四十二年度ニ至リ修繕ヲ加ヘテ現形ノ如クナレリ、當宮モ内宮ト同ジク、外院、殿舎中ニテ重キヲ置カレタリ、其ハ中右記元永二年五月九日ノ條入夜參内是依可行軒廊御卜也、○中祭主卿申、豐受宮御白殿忌火屋殿去四月一日辰刻、不知名虫多出來、恠異可占申トアルヲ見テモ知ルベシ、

○御

厩

神明造、切妻柿葺、東面

壹宇

右修繕

等由氣太神宮儀式帳ニ、御厩壹間、又御馬飼内人無位神主豐繼、右人行事ト定任、日後家雜罪事祓淨、且、常板立御馬二疋此率、已戶人夫並多氣郡司貢上丁飼仕奉、○中三節祭並年祈幣帛御馬奉時御馬口曳仕奉トアリテ、幣馬ノ中ヲ飼養セシ事、既ニ内宮ノ條ニ云ヒシガ如シ、元長神祇百首ニ、譬ヘバ度會宮ノ御神馬退轉已ニ一百八十餘年ニモヤ成ヌラン、于時寛正六年己酉秋九月十四日ニ御馬下リ座トアリ、此ニ據リテ寛正六年ヨリ百八十餘年逆推スルトキハ、弘安ノ頃ヨリ既ニ中絶セシナラムカ、然ルニ一禰宜朝榮卿日次文化十三年十月條ニ、山田奉行ノ間ニ對シ、延曆外宮儀式帳を始め、延喜大神宮式、其外舊記等に、往々書載御座得者、上代より存在顯然之儀に而何頃迄と申儀者、應永年中迄者、頭工日記と申舊記ニ書載有之候、其後之舊記文等に者絶而所見無御座候トアリ、孰レガ是ナラム、兎ニ角一時中絶セシヲ、寛正六年ニ御馬ヲ牽進セラレシガ、再度中絶シタリケン、神宮引付天和三年ノ條ニ、御馬屋之儀は滿彦之時分も、三殿ヘ奎之助殿懇意故被願滿彦と内談有祭主殿へも滿彦御懇意故被得御意、下野殿○山田へも被申上候得共、舊例御尋ニ付、神宮吟味候へ共、不分明候に付、打過候へば相談不極事申候、○中何たる子細を以、何時木馬改申候も、知れ不申候トアリテ、天和

豐受大神宮殿舎

ノ頃既ニ中絶シ、木馬ヲ置カレタリ、然ルニ文化十二年ニ至リ、更ニ外御厩再興ヲ計リ、十三年正月、御再興仰出サルル旨、祭主ヨリ達セラレ、次テ御厩ヲ建設シ、御馬モ到著セシニ、山田奉行ヨリ問答、後十四年十二月ニ至リテ、突然中止セラレ、御厩モ撤却ノ不得止ニ至レリ、弘化三年八月、徳川氏ヨリ、兩宮ヘ御馬一頭ツツヲ獻進セラレ、現今ノ處ニ一頭ヲ飼養スベキ、御厩ヲ建設シタリシニ、慶應元年ニ至リ、幣馬一頭ヲ飼養スルコトトナリシ故ニ、更ニ東御敷地ノ東北隅ニ、參道ヲ隔テテ御厩ヲ建設シ、明治二年ニ又一頭ヲ増進セラレテ、二頭ヲ併飼スルコトトナリヌ、明治七年徳川氏獻進ノ御馬ハ、病斃セシニヨリ、木馬ヲ置カレシニ、此ノ木馬モ廿三年ニ撤却シ、四十五年ニ至リ、弘化年中建設ノ御厩ヲ撤却シ、二頭併飼ノ御厩ヲ現今ノ處ニ移轉修造セリ、

遷宮諸祭

太神宮諸雜事記ニ、朱雀三年九月廿日、依左大臣宣奉、勅伊勢二所太神宮御神寶物等、於差敕使被奉送畢、色目宣旨狀、備二所太神宮之御遷宮事、廿年一度應奉、令遷御立爲長例也トアリテ、即チ式年遷宮ノ起原ナリ、依リテ皇太神宮儀式帳ニ、常限廿箇年一度新宮遷奉等、由氣太神宮儀式帳ニ、限常廿箇年一度遷奉新宮造之、延喜式ニ、凡大神宮廿年一度造替、正殿寶殿及外幣殿、度會宮及別宮餘社、皆採新材構造、自外諸院新舊通用、又凡大神宮年限滿應修造者、遣使○中其使供給充用神稅、丁匠役封戸人夫糧食使用神稅ト定メラレキ、斯クテ初度ハ、二所太神宮例文ニ、白鳳十三年庚九月、太神宮御遷宮、持統天皇四年也、自此御宇造替遷宮、被定置也、朱鳥二年壬外宮御遷宮、同御宇御遷宮、但大伴皇子謀反時、依武天皇之御宿願也、廿年一度御遷宮長例宣旨了ト太神宮諸雜事記ニ、同天平九年十二月、諸別宮同奉遷、廿年一度御遷宮長例宣旨了ト見エテ、即チ天武天皇ノ御宇ニ制定セラレナガラ、持統天皇ノ御宇ニ至リ、始メテ行ハセラレシナリ、其ハ通海參詣記ニ、自今以後ハ廿年ニ一度新宮ヲ造替シテ、遷御シ奉ルベシ、宜爲永例ト也、其中東西ニ宮地ヲ定置テ、廿年ヲ限テ所奉造改也、略其後持統天皇四年庚東宮ヲ造テ始テ遷御アリ、略中外宮ハ持統天皇六年壬始メテ東ノ宮所ニ遷シ奉ル、トアルガ如ク、宮所ヲ東西ニ定メ、代ル々々造替ヲ行ハレテ、

現今ニ及ベリ、爾後十九年目又ハ廿一年目ナリシ事モアリシカド、大凡ハ二十年目ニ行ハレタリキ、然ルニ政權武門ニ移リシヨリ、神領ハ武士ニ押領セラレ、用途缺亡シテ、僅ニ役夫工米ヲ徵シテ、式典ヲ舉グルニ至リ、綱紀弛廢シ、康曆遷宮ハ廿八年目、寛正遷宮ハ三十二年目ニ行ハレシガ如キ、大錯亂ヲ生ジ、内宮ハ寛正六年ヨリ天正十三年マデ百二十二年間、外宮ハ永享六年ヨリ永祿六年マデ百三十二年間、遷宮中絶セシハ、實ニ恐懼ノ至リナリシガ、爾後ハ大ナル異動ナク、寛永六年ノ遷宮ヨリ廿一年目ノ例トナリテ現今ニ及ベリ、其ノ式月式日ハ、延喜式ニ九月十四日粧、飭度會宮、十五日奉徒御像、同日粧飾太神宮、十六日奉徒御像トノ制ナリキ、然ルニ承元三年八月ニ内宮、嘉元二年十二月ニ又内宮遷宮ヲ行ハレシヨリ、錯誤ヲ生ジテ、二月十月ニモ行ハレシ事アリ、天正遷宮ニ至リ、内外兩宮ニテ式日ノ前後ヲ争ヒ、内宮ハ十月十三日、外宮ハ十月十五日ニ行ハレシヨリ、式月式日ノ制ハ全ク變更セラレキ、明治二十二年ノ遷宮ニハ、内宮十月二日、外宮十月五日ト仰出サレ、四十二年モ同日ニ行ハレキ、抑モ遷宮ノ諸費ハ、神祇令義解ニ、凡神戶調庸及田租者並充造神宮及供神調度トアレ、延喜式ニ用神稅不足用正稅ト見エタルガ如ク、實際神稅ノミデハ、不足セシヲ以テ、兵範記仁安四年ノ條ニ、但寶龜、延曆火災之時、寄五ヶ國被造營トアリ、又伊勢

大神宮炎上、中内院正殿以下殿舎、御垣門等、早仰伊賀、伊勢、美濃、尾張、參河、國司、宣令造營トアリ、又遷宮例文ニ、茲太政官配符被下諸國、運上役夫工功、糧於萬民ト見エテ、神稅ノミニモ依リ難キヲ以テ、不足ノ填補ヲ他ノ國稅ニヨリ、是ヲ役夫工米ト稱セリ、此ノ制ハ寛正三年遷宮マデ行ハシガ、百數十年間ノ遷宮中絶ト共ニ廢滅シ、永祿遷宮ハ、慶光院ノ勸進ニ成リ、天正遷宮ハ、織田信長ノ寄進ニ依リ、慶長以降ハ總ベテ徳川幕府ノ獻進ナリシヲ、明治廿二年度ヨリ、國費ヲ以テ行ハルル事トナリテ、現今ノ盛儀ヲ見ルニ至レリ、是レニ關スル前後ノ諸祭ハ、多少ノ興廢アレドモ、此ニ舉グルハ現行ノ諸祭ノミニテ、其ノ他ハ之ヲ省略セリ、凡ソ神宮造替ハ、天武天皇ノ御代制定セラレシヨリ、式年、臨時ヲ合セテ、皇大神宮ハ六十二回、豐受大神宮ハ五十八回、假殿遷宮亦數十度行ハレテ、祭儀ノ沿革多クナリト雖、凡繁雜ニ涉ルヲ以テ、只、遷宮ノ年月日ノミヲ別表トシテ掲グ、

山口祭

兩宮延曆儀式帳ニ、取吉日山口神祭用物並行事ト見エ、神宮雜例集ニ、或云、太神宮廿年可被造替者、十七年孟冬祭山口並木本神等、初探正殿心柱ト見エテ、御杣山ニ坐ス神ヲ山口ニテ祀リ、伐木ノ事ヲ安全ナラシメンガ爲メノ祭儀ナリ、造宮ニ關スル御用材ハ、古來宮域ニテ伐採セルヲ以テ、祭儀モ亦宮中ニテ行ヘリ、故ニ内宮ハ城内ナル石井神社ノ舊地、外宮モ同ジク土宮ノ傍ナル祭場ニテ行フ、今猶ホ忌物、神饌、白鷄、鷄卵ヲ供シ、五色ノ幣帛ヲ四方ニ立テ行フナリ、抑モ此ノ祭ハ、神宮雜例集ニ云ヘル如ク、前遷宮ヨリ十七年目、即チ遷宮ノ四年前ニ行ヘリシガ、當時ハ二十年目、寛正五年十二月山口祭記ニ、抑山口祭事、以前御遷宮之年紀不依延引、自山口祭之年廿年目ニ被行定例也トアルニヨリ、寛正三年遷宮ハ延引ノ爲メ、十八年前、文安二年ニ行ハレシガ如キ、變態ヲ生ジキ、然ルニ永祿遷宮ニハ、天文廿四年即チ九年前ニ行ハレ、爾後ハ四年乃至六年前ナリシヲ、元祿二年ノ度ニ、天和二年ニ行ハレシヨリ、八年前トナリテ現今ニ至レリ、此ハ遷宮ニ關スル諸祭典中ノ第一ニ行ハルル嚴儀ナルヲ以テ、日時ヲ宣下セラレ、五丈殿ニテ饗膳アリ、

木本祭

皇太神宮儀式帳ニ、山口祭次取吉日爲正殿心柱造奉、率宇治大内一人、諸内人等、戶人夫等、入杣木本祭用物如左、其柱名トアリテ、心御柱ノ用材一本ニ就キテノ祭ナリ、等由氣太神宮御杣山ハ、嘉元二年度ヨリ後ハ、他山ニテ撰フ事トナリタレドモ、心御儀式帳モ同シ、御杣山ハ、嘉元二年度ヨリ後ハ、他山ニテ撰フ事トナリタレドモ、心御柱ハ猶ホ宮域ニテ取ルニヨリテ、其ノ木本ニテ祭レリ、祭物及ビ行事ハ、略々山口祭ニ同ジ、祭儀終リテ、其ノ木ヲ伐リ、内宮ハ御稻倉ニ、外宮ハ外幣殿ニ納メテ、遷宮ノ年ヲ待ツナリ、近來外宮ニテハ、心御柱祭ノ前夜ニ伐採セシカドモ、明治二十二年度ヨリ舊儀ノ如ク山口祭ノ夜ニ行フ事トナレリ、此レ亦日時ヲ宣下セラル、

御杣山木本祭

嘉元二年度以後、御杣山ヲ宮域外ニ定メラルル事トナリシヨリ、起レル祭ニテ、其ノ撰定セラレシ御杣山ニテ行フ、故ニ造神宮使廳ノ官吏並ニ小工ノミ參加ス、其ノ儀ハ山口祭ト異ナル所ナク、御杣山ノ神ヲ祀リテ伐木工事ニ異變ナカラン事ヲ祈ル

ナリ、日時ハ神宮ヨリ伺ヒテ定メラル、日時宣下ヲ記サザ
ル諸祭ハ此ニ同シ

御樋代木奉曳式

御杣山ニテ伐採セシ御樋代木ヲ、大湊貯木場ニ回漕シ、内宮御料ハ五十鈴川ヲ上シ、
四郷村大字北中村ヨリ、神宮及ビ造宮ノ吏員數名式列ヲ整ヘテ供奉シ、役夫ヲシテ
川筋ヲ曳上サシメ、大宮ノ御前ヨリ曳揚ゲ、大宮司以下ノ神官、及ビ造宮吏員奉迎シ
テ、修祓ヲ行ヒ、東寶殿ノ床下ニ納メ、外宮御料ハ、宮川ヲ上シ、宇治山田市大字中島町
ヨリ車ニ積載シテ、内宮ニ同ジク、式列ヲ整ヘ、役夫ヲシテ宮中ニ曳キ入レシメ、北御
門口ニテ修祓ヲナシ、大宮司以下ノ神官、及ビ造宮吏員奉迎シテ、西寶殿ノ床下ニ納
ム、舊來内宮ハ慶光院ノ手ニヨリ、豐濱村大字磯村ノ人民、外宮ハ春木大夫ノ手ニヨ
リ、宇治山田市大字本町ノ人民奉曳セシヲ、明治二十二年度ヨリ、造神宮使廳ノ役夫
ニテ共ニ之ヲ奉曳セシム、

御木曳初式

御正殿ノ御棟持ニ充ツベキ巨材ヲ、人民勞力獻納ノ第一著トシテ、奉曳スルナリ、内
宮ニアリテハ、舊宇治六郷ノ人民、五十鈴川ヲ奉曳シ、手洗場ヨリ曳上ゲ、二鳥居ニテ
大宮司以下ノ神官奉迎シ、修祓ヲ行ヒ、正宮御料ハ、五丈殿ノ前ニ、其ノ他ハ各別宮ノ
古殿地ニ安置シ、外宮ニアリテハ、市内大字小川町、本町、中島町、八日市場町ノ人民、車
ニ積載シテ奉曳シ、北御門口鳥居ニテ、大宮司以下ノ神官奉迎シ、修祓ヲ行ヒ、正宮御
料ハ五丈殿ノ前ニ、自餘ハ各別宮ノ古殿地ニ安置ス、

木造始祭

御造替ノ工事ヲ始ムル儀式ナリ、又手跡始トモ稱ス、五丈殿ノ前ニ、御棟持柱ノ御料
材ヲ安置シ、造神宮技師技手神饌ヲ供シ畢リテ、正宮ノ方ニ向ヒテ拜シ、後御木ヲ打
チ工事始ノ式ヲ行フ、豐受大神宮ニテハ、明治二年度マデ、内玉垣御門ノ前ニテ行ヒ
シガ、二十二年度ヨリ、五丈殿ノ前ニ改メラレタリ、此レハ古ハ行ハザリシモ、遷宮例
文ニ初メテ見エ、爾來頗ル嚴儀トナリ、嘉祿山口祭記ニ、可令行木作始之由被勘下日
時云々、指非宣下爲造宮所沙汰被取下歟トアルヲ、慶長度ヨリ始メテ、日時ヲ宣下セ

ラレ、五丈殿ニテ饗膳ヲ行ハルル等、山口祭ノ如シ、

鎮地祭

地鎮祭又地曳祭トモ稱ス、忌物、神饌、白鷄、鷄卵ヲ供シ、五色ノ幣帛ヲ敷地ノ中央及ビ四隅ニ建テ行フ、宮所ヲ敷キ坐ス神ヲ祭リ、忌鎌ヲ執リテ草刈ノ式ヲ行ヒ、忌鍬ヲ執リテ地均シノ式ヲ行フナリ、皇太神宮儀式帳ニ、右祭告刀申地祭物忌父仕奉、所侍造宮使中臣忌部然祭奉仕畢時、地祭物忌以淨鎌且宮地草刈始、次以忌鍬且宮地穿始奉トアリ、等由氣太神宮儀式帳ニモ日時ハ宣下セラル、見エテ地祭ヲ皆裁ニ作ル

假御樋代木伐採式

遷御ニ際シテ、御體ヲ納メ奉ル假御樋代及ビ假御船代ノ用材ヲ採ルニ就キ、御杣山ニテ造神宮使廳吏員之ヲ行フナリ、先ヅ技手御料木ノ修祓ヲ爲シ、神饌ヲ奉奠シテ、伐採シ荒薦ニテ裹ミ更ニ修祓ス、

立柱祭

正殿ノ御柱ヲ立ツル式ニテ、古代ハ地鎮祭ト共ニ行ハレキ、兩宮儀式帳ニ、禰宜大物忌波忌柱立始、然後諸役夫等柱堅奉トアリテ、建築行事ノ第一著ナリ、造神宮主事吏員ヲ率キ、大宮司以下ノ神官參列シ、先ヅ造神宮屬神饌ヲ奉奠シテ、屋船神ヲ祭リ、小工正殿ノ御柱ノ本ニ進ミ、中ノ柱、四隅ノ柱、東西ノ柱ト順次ニ槌ヲ以テ打チ固ムルナリ、日時ハ宣下セラル、

御形祭

正殿東西ノ妻ノ短柱ニ、御形ヲ穿チ奉ル式ニシテ、皇太神宮儀式帳ニ、宮造奉畢時、正殿東西妻御形穿初仕奉トアリテ、等由氣太神宮儀式帳モ同シ古代ハ、正殿ノ建築已ニ畢リテ、後ニ奉仕セシガ、近年ハ完成セザル前ニ、行ハルル事トナレリ、先ヅ神饌ヲ奉奠シテ、屋船神ヲ祭リ、火結神ヲ鎮メ、造神宮技師技手等進ミテ、短柱ニ御形ヲ穿チ奉ルナリ、

上棟祭

正殿ノ御棟木ヲ揚グル式ニテ、遷宮例文ニ造宮使參也神拜、東方著座也、禰宜西舊跡石壺也、略中次立御棟持、次上棟木然後祭棟也トアリ、先ヅ御棟木ニ白布二條ヲ懸ケ、弓矢並ニ白幣ヲ飾リ、大宮司ヨリ、造神宮主事ニ正殿ト瑞垣トノ位置ノ舊規ニ相違ナキヤヲ告グ、主事之ヲ技師技手ニ傳ヘテ、測量セシメ終リテ、小工御棟木ノ綱ヲ博士木ニ結ブ、次ニ大宮司以下ノ神官立チテ、引綱ニ手ヲ掛ケ、御棟木奉揚ノ式ヲ行ヒ、小工壹員千歳棟、萬歳棟、曳々億棟、外宮ニテト呼グ棟上ノ小工之ニ應ヘ御棟木ヲ打チ固メ、圓餅ヲ投シ、造神宮屬神饌ヲ奉奠シテ、屋船神ヲ祭ルナリ、日時ハ宣下セラル、

檐付祭

正殿ノ御萱ヲ葺キ初メ奉ル祭ニテ、造神宮屬神饌ヲ奉奠シテ、屋船神ヲ祭り、技手萱葺役夫ヲ率キ、正殿ノ南檐端ニ、御萱ヲ葺キ奉ルナリ、

葦祭

遷宮例文ニ、葦祭神事奉、上左右泥障板、氏經神事記ニ、御鯉木ヲ上祭、葦トアレドモ、近來ハ正殿ノ葦覆ノ波金物、千木ノ逆輪ヲ打奉ル、祭儀トナレリ、長官守雅記ニ、先工老等は、先達新宮御内に參入して、御階の六段めに、打初の金物六枚を銚奉ト見ニ、朝喬卿公文所常用録ニ、御階三段目波金物三枚銚トアルガ如ク、内宮ハ御階ノ六段目ニ、外宮ハ三段目ニ、金物等ヲ飾リ神饌ヲ奉奠シテ、屋船神ヲ祭り、火結神ヲ鎮メ、造神宮技手小工ヲ率キテ、其レヲ打チ奉ルナリ、

御戸祭

又御戸立祭トモ稱ス、遷宮例文ニ、其後御戸祭備祭物、於折敷頭別一前充御戸闕上ニ三所供之申、詔刀トアリテ、正殿ノ御扉ヲ造リ奉ル祭ナリ、神饌ヲ奉奠シテ、屋船神ヲ祭り、造神宮技手大床ニ昇リテ、御扉ニ御鑰穴ヲ穿チ奉ル、但シ近世清純トモ稱セリ、

御船代祭

御船代ノ用材ノ伐採及ビ奉彫奉納ノ式ナリ、皇太神宮儀式帳ニ、次取吉日爲造御船代木、率宇治大内人一人、諸内人等、戸人、夫、杣山木本祭略、中、右如之祭告刀申、御巫内人畢時、山向物忌先以忌餘、且木本切始、略、中、御船代料材自杣出時、前追運進正殿地之トアル如ク、先ツ宮山祭場ニ五色幣ヲ立テ、忌物神饌ヲ奉奠シテ、杣山ノ木本ニ坐ス神ヲ祭リ、草木ヲ刈リ、正宮並ニ相殿神、別宮ノ御料木ノ伐採ノ式ヲ行ヒ畢リテ、東寶殿ニテ造神宮技師技手、正宮並ニ相殿神ノ御船代奉彫ノ儀式ヲ行ヒ、神官之ヲ新宮正殿ニ奉納ス、

洗清

新宮ヲ洗ヒ清ムル式ナリ、山口祭ヨリ御船代祭ニ至ルマデノ諸祭ハ、造宮吏員ニテ祭儀ヲ行ヒ、神宮官吏ハ參列ニ等シカリシヲ、御船代祭限リ造宮吏員ノ手ヲ離レテ、洗清ヨリ專ラ神官ニテ祭儀ヲ行フナリ、遷宮例文ニ、正殿奉洗又御船代奉洗ト見エ、元亨三年皇太神宮遷宮記ニ、物忌等著布衣洗清殿内、所令掃除御橋塵トアリ、先ツ禰

宜正殿ヲ開キ、假御幌ヲ懸ケ、權禰宜宮掌洗清メ、用具ヲ殿内ニ傳進シ、禰宜ハ御槌代、御船代、御玉奈井、御床及ビ殿内ヲ、權禰宜ハ大床、御階等及ビ東西寶殿、外幣殿、御饌殿ヲ洗清ム、

心御柱奉建

兩宮儀式帳ニ、禰宜大物忌、忌柱立始、然後諸役夫等柱堅奉トアリテ、古ハ立柱祭ト同時ニ行ヒシヲ、遷宮例文ニ、奉立心御柱祭物次第行事ト見エ、又建久元年遷宮記ニ、奉立心御柱トアレバ、此ノ頃ヨリ分カレシナラン、内宮ハ御稻御倉、外宮ハ外幣殿ニ納メアル、御料木ヲ飾リ奉リテ、齋柱トナシ、夜中正殿ノ床下ニ、五色ノ幣ヲ立テ、忌物神饌ヲ奉奠シテ、宮所ヲ知リ坐ス神ヲ祭リ、大神ノ御心ヲ常磐堅磐ニ鎮メ奉リテ、正殿ノ御床下ニ、齋柱ヲ建テ奉ル行事ニテ、禰宜一祝詞ヲ奏シ、權禰宜一宮掌ニテ奉仕ス、頗ル神秘ノ行事ナリ、

杵築祭

兩宮儀式帳ニ爾時役夫ト合地土正殿地持運置即禰宜内人等築平詠儼然後日舉幕正殿隱奉トアリテ御殿ノ成功ヲ祝シ且ツ御柱根ヲ固メ奉ル式ナリ日時ハ宣下セラル先ツ造神宮使以下五丈殿ニテ饗膳アリ次ニ大宮司以下白布明衣ヲ懸ケ白杖ヲ携ヘテ正宮ニ參進シ大宮司祝詞ヲ口申シ諸員新宮ノ御床下ニ到リ祝歌ヲ謠ヒ

ツツ白杖ニテ御柱根ヲ築固メ奉ルナリ其ノ歌内宮ハ二首
カシコシヤ五十鈴ノ宮ノ杵築シテケリ杵築シテケリ國ゾサカユル郡ゾサカユル万代マデニ万代マデニ

天照ス大宮處カクシツツ仕ヘマツラム万代マデニ万代マデニ
外宮ハ壹首

度會ノ豐受ノ宮ノ杵築シテ宮ゾサカユル國ゾサカユル万代マデニ万代マデニ

後鎮祭

皇太神宮儀式帳ニ宮造畢時返祭料物如始トアリ等由氣太神宮儀式帳ニ宮造奉畢

次後返祭並山口祭仕奉用物如始然天平賀宮柱諸木本別置トアリテ鎮地祭ニ對シテ行ハルル祭儀ナリ其ノ行事ハ鎮地祭ニ準ジ且ツ御柱木ノ本ニ坐ス神ヲ祭リ天平瓮ヲ安置シテ事業ノ竣成ヲ奏告ス日時ハ宣下セラル

御裝束神寶讀合

皇太神宮儀式帳ニ新宮傍奉使官小辨已上一人史生一人鍛冶長三人參入トアリ又延喜式ニ營造神寶並裝束使太神宮諸雜事記康平二年ノ條ニ宮莊使參宮ト見エテ造宮使ノ外ニ神寶使ヲ命シタリキ後ニハ造宮使之ヲ兼ネテ辨代ト稱シタリキ現今ハ神寶御裝束共ニ造神宮使廳ニテ取扱ヒ造宮使ヨリ祭主ニ引渡サル事トナレリ先ヅ新ニ調進セラレタル御裝束神寶ノ納マレル辛櫃ヲ四丈殿ノ外庭ニ昇居エ造神宮使以下四丈殿ニ着キ神官モ之ニ列シテ辛櫃壹合ヅツヲ殿内ニ昇入レ送文ニ照ラシ點檢査閱シテ授受ヲ行フ式ナリ

川原大祓

皇太神宮建久遷宮記建久元年ニ、十六日略中召立畢、行列先禰宜、次神寶、次召立役人、次權官一兩持物、各行石橋出、二鳥居邊下、大庭到河原河合、御幸櫃等河端並立略、中御巫内人勤仕御祓トアリテ、御裝束神寶ノ讀合畢リテ後ニ、五十鈴川邊ニテ行フナリ、外宮ハ五丈殿ノ前ニテ御裝束神寶ノ祓ヲ行ヒ、翌日更ニ河原祓ヲ行ヒシガ、現今ハ別宮遙拜所ノ南方ナル、三ツ石ノ所ニテ、内宮ニ同ジク、假御極代、假御船代及ビ奉選用具、御裝束、神寶等ヲ陳列シテ、祓ヲ修シ、御物並ニ奉仕員ヲ祓清ムル式トナレリ、

御飾

新ニ調進ナリシ、御裝束ニテ正宮ノ御殿内ヲ飾リ、遷御ノ準備ヲナシ奉ル儀式ニシテ、儀式帳ニ、新宮傍奉使トアレド、其ハ御金物飾奉ルノ儀ニシテ、此ハ神宮傳來ノ秘事ニ據リ、大少宮司禰宜御飾ヲ奉仕シ、祭主之ヲ檢知セラル、故ニソノ作法最モ鄭重嚴密ヲ極ム、同時ニ東西寶殿、外幣殿、御饌殿ノ御飾ヲモ奉仕ス、

遷御

正宮ヨリ新宮ニ御體ヲ遷シ奉ル儀式ナリ、祭主、大宮司、少宮司、禰宜十人、權禰宜二十人、宮掌四十人、宮掌補八十人、勅使、掌典、宮内屬、掌典補、奉仕シ造神宮使、副使、主事、技師、屬、技手、囑託員、内務大臣、神社局長、内務大臣秘書官、三重縣知事參列ス、參進ノ際ハ、儀仗兵一ケ大隊前後ヲ護シ、二鳥居ニテ祓ノ式アリ、玉串行事所ニテ、勅使、掌典、祭主、大少宮司、禰宜、太玉串ヲ執リ、進ミテ中重石壺ニ着キ、内宮ニテハ權禰宜モ一員、權禰宜順次ニ、勅使以下ノ太玉串ヲ奉奠ス、次ニ勅使版位ニ進ミテ、御祭文ヲ奏シ畢レバ、大少宮司進ミテ御扉ヲ開キ、禰宜ト共ニ殿内ニ祇候シ、遷御ノ準備ヲナシ奉ルヲ伺ヒテ、權禰宜階下ノ方東ニ卓立シテ召立文ヲ讀ム、執物奉仕ノ諸員ハ、召立ニ從ヒテ列ヲ整ヘ、行障絹垣奉仕ノ諸員ハ、大床ニ昇リ一拜ノ後、絹垣ヲ御扉口ニ寄セ、宮掌補御道敷布ヲ、正殿階下ヨリ新殿階下マデ敷キ奉ル、時ニ鷄鳴所役ノ宮掌補進ミテ鷄鳴ヲ唱フル事三、勅使御階ノ下ニ進ミテ出御ヲ三奏セララル、此ノ時大少宮司、禰宜、御體ヲ奉戴シテ絹垣ノ中ニ入ル、儀仗兵ノ前行ニ次ギテ、前陣供奉員神寶ヲ捧ゲ、次ニ宮内省樂長、樂師、神樂歌ヲ奏シテ前行ス、次ニ掌典警蹕ヲナシ、次ニ勅使歩ヲ進ム、次ニ行

障絹垣ニテ奉戴ノ諸員ヲ擁シ、次ニ祭主以下、後陣供奉ノ諸員列ヲ正シ、儀仗兵其ノ後ヲ護リ、肅々トシテ新宮ニ遷幸ナシ奉ル、新宮ニ入御ナシ奉レバ、又召立ニ從ヒテ、前陣及ビ後陣ノ御神寶ヲ殿内ニ奉納シ、大少宮司御扉ヲ閉テ、勅使御祭文ヲ奏申ス、大宮司勅使ニ御遷宮ノ儀式畢ル旨ヲ告グ、諸員中重ニ退キ、奉拜八度拍手兩端ヲナシテ退下ス、遷御ノ沿革ハ、既ニ總論ノ處ニ述ベタリキ、日時ハ宣下セラル、

奉幣

皇大神宮豊受大神宮遷御ノ翌日官幣奉納ノ大祭ナリ、二鳥居ニテ官幣並ニ勅使以下ノ修祓アリ、玉串行事所ニテ官幣點檢ヲ行ヒ、權禰宜二員幣帛案ヲ昇キ、進ミテ内玉垣御門ノ前ニ安シテ版ニ著ク、玉串行事ハ總ベテ遷御ノ時ノ如ク奉奠ス、畢リテ内玉垣御門ノ前ニテ、勅使御祭文ヲ奏シ、東寶殿ニ官幣ヲ奉納シテ、奉拜八度拍手兩端ノ後ニ、五丈殿ニテ饗膳アリ、此ノ奉幣ヲ從來一社奉幣ト稱ス、日時ハ宣下セラル、

古物渡

遷御ノ翌日、古殿ニ奉納シアリシ神寶類並ニ特種ノ御物ヲ、新殿ニ移シ奉ル式ナリ、大宮司以下奉仕ス、

御神樂

奉幣ノ夕、大御饌ヲ奉奠シ、續キテ御神樂並ニ祕曲ヲ奉納セラル、ルナリ、此ハ明治二十二年度ヨリ初テ行ハル、祕曲ニ至リテ其ノ所作人ノ外ハ、神樂舎ニアルヲ許サレザルヲ以テ、他ノ所作人及ビ參列員ハ一時退出ス、因ニ云フ御神樂歌ノ中ナル星ノ三曲ハ、月讀神ニ憚リテ奏セザル故實アリ、且ツ別宮ニ月讀宮ノアラセラルルヲ以テ之ヲ除カルルナリ、勅使及ビ祭主以下參列ス、

神宮遷宮一覽表

皇大神宮	豐受大神宮
白鳳十三年九月十六日 <small>式年遷宮初</small> 和銅二年九月十六日 天平元年九月十六日 同十九年九月十六日 天平神護二年九月十六日 延曆四年九月十八日 同十一年 <small>正殿炎上ニ</small> 弘仁元年九月十六日 天長六年九月十六日 嘉祥二年九月十六日 貞觀十年九月十六日 仁和二年九月十六日	朱鳥二年九月十五日 <small>式年遷宮初</small> 和銅四年九月十五日 天平四年九月十五日 天平勝寶元年九月十五日 神護景雲二年九月十五日 延曆六年九月十五日 弘仁三年九月十五日 天長八年九月十五日 仁壽元年九月十五日 貞觀十二年九月十五日 寬平元年九月十五日 延喜七年九月十五日

延喜五年九月十六日 延長二年九月十六日 天慶六年九月十六日 應和二年九月十六日 天元四年九月十七日 長保二年九月十六日 寬仁三年九月十七日 長曆二年九月十六日 天喜五年九月十六日 承保三年九月十六日 嘉保二年九月十六日 永久二年九月十六日 長承二年九月十六日 仁平二年九月十六日 嘉應元年十二月十六日 <small>正殿炎上ニ</small>	延長四年九月十五日 天慶八年十二月 康保元年九月十五日 永觀元年九月十五日 長保四年九月十五日 治安元年九月十五日 長久元年九月十五日 康平二年九月十五日 承曆二年九月十五日 承德元年九月十五日 永久四年九月十五日 保延元年九月十五日 久壽元年九月十五日 承安三年九月十五日 建久三年九月十五日
---	---

承安元年九月十六日
 建久元年九月十六日
 承元三年九月十六日
 安貞二年九月十六日
 寶治元年九月十六日
 文永三年九月十六日
 弘安八年九月十六日
 嘉元二年十二月廿二日
 元享三年九月十六日
 興國四年十二月廿八日
 正平十九年二月廿六日
 元中八年十二月二十日
 應永十八年十二月
 永享三年十二月十八日
 寬正三年十二月廿七日

建曆元年九月十五日
 寬喜二年九月十五日
 建長元年九月廿六日
 文永五年九月十五日
 弘安十年九月十五日
 嘉元四年十二月
 正中二年九月十五日
 興國六年十二月廿七日
 天授六年九月八日
 應永七年二月廿八日
 同二十六年十二月廿一日
 永享六年九月十五日
 永祿六年九月廿三日
 天正十三年十月十五日
 慶長十四年九月廿七日

天正十三年十月十三日
 慶長十四年九月二十一日
 寬永六年九月廿一日
 慶安二年九月廿五日
 萬治二年十一月廿五日
 寬文九年九月廿六日
 天和三年三月十日
 元祿二年九月十日
 寶永六年九月二日
 享保十四年九月三日
 寬延二年九月朔日
 明和六年九月三日
 寬政元年九月朔日
 文化六年九月朔日
 文政十二年九月朔日

寬永六年九月廿三日
 慶安二年九月廿七日
 寬文九年九月廿八日
 元祿二年九月十三日
 寶永六年九月五日
 享保十四年九月六日
 寬延二年九月四日
 明和六年九月六日
 寬政元年九月四日
 文化六年九月四日
 文政十二年九月五日
 嘉永二年九月五日
 明治二年九月七日
 同廿二年十月五日
 同四十二年十月五日

嘉永二年九月二日

明治二年九月四日

同廿二年十月二日

同三十三年十月二日 正殿炎上ニヨリ臨時遷宮

同四十二年十月二日

とこしへに世を照らします、日の御靈つけし鏡は、伊勢の大神と
 鈴廼舎の翁のよまれしが如く、佐久々斯侶伊須受宮は皇祖天照
 大御神にまして、かむぎねの八咫鏡にましますを知らざる者は、
 世になかるべし。されど、此の大宮處に鎮まり坐せりしゆゑよし
 を、熟く知れる人は、猶希なるべく、外宮之度相には、同じ大人の朝
 夕に、物くふ毎に、豊受の、神の恵を、思へ世の人。とよまし、大神の
 鎮まり坐すをすら、知りえざるが少からず。二宮の相殿、また諸の
 別宮にます神等をば、物識人さへ、かにかくに、思ひ惑へるがあれ
 ば、なべての人のえ知らぬは、いふも更なり。まして、百足らず八十
 と數ふる攝社末社の事どもをば、ふつに辨へざるぞ多からむ。さ
 れば、この宮々社々に坐す大神等の御名を始めて、そのみいさを、
 ゆゑよし、みあらか、みまつりのあらましを、廣く徧く誨へ諭さむ
 とて、斯の書をば、しるさしめられしなりけり。かれ、松木御巫、二人

の權禰宜の専ら勞き成せるを、校へ訂して、かくは物しつるになむ。されど、名におふ大綱にしあれば、その細目をば、遠からず、世に出づべき大神宮史に就きて知るべくこそ

ふみわけておくかをも見よ神路山

のほりゆくてのこれをしをりに

明治四十五年三月

神宮少宮司從五位勳六等木野戸勝隆

監督 神宮禰宜正五位勳六等 檜垣貞吉

編修 神宮權禰宜正七位 松木時彦

編修 神宮權禰宜從七位 御巫清白

書記 神宮司廳出仕 西村玉藏

明治四十五年六月三十日印刷
明治四十五年七月五日發行

(非賣品)

神宮司廳

東京市京橋區築地三丁目十一番地

印刷者 野村宗十郎

東京市京橋區築地二丁目十七番地

印刷所 株式會社 東京築地活版製造所

342

177

11311

342

177

014176-000-9

342-177

神宮大綱

神宮司序／編

M45

ABB-0474



